

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(8)

仁田古墳群 I

仁田古墳群1区・2区・3区・矢作遺跡4区・
下新田古墳群・大坂古墳群



2010年3月

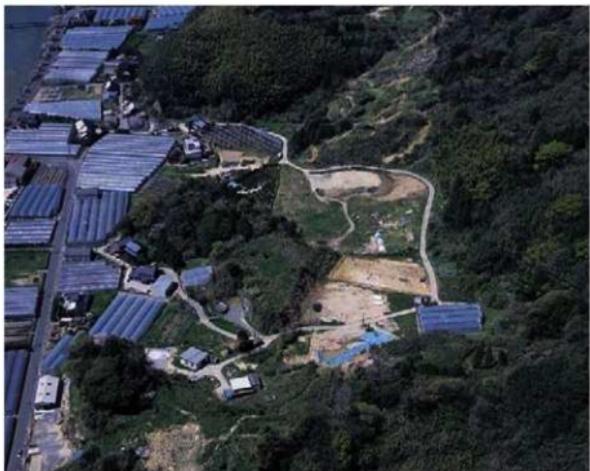
佐賀県教育委員会



玉島川東岸航空写真



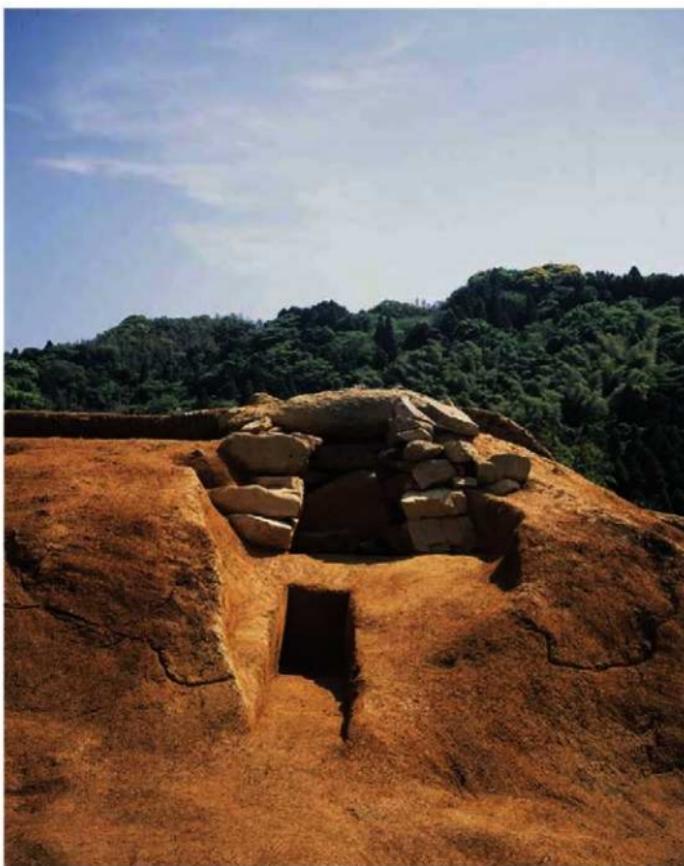
仁山・欠作地区調査終合成写真



仁田、矢作地区遠景（東から）



矢作遺跡 4 区 ST401 石室全景（北から）



大坂古墳群 ST01 石室全景（南から）



仁田古墳群 1 区出土埴甌集合



仁田古墳群 2 区 SP201 出土土器集合



大坂古墳群 ST01 石室出土土器集合

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(8)

仁田古墳群 I

仁田古墳群1区・2区・3区・矢作遺跡4区・
下新田古墳群・大坂古墳群

2010年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は、佐賀県教育委員会が国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託を受け、唐津市教育委員会の協力のもと、平成 17～20 年度に実施した西九州自動車道唐津道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告です。同シリーズでは『中原遺跡IV』につづく 8 冊目にあたります。

仁田古墳群・矢作遺跡・下新田古墳群・大坂古墳群は縄文時代～中世までの各時代の生産遺跡や墳墓、集落跡など各時代において重要な遺構・遺物が発見されました。

今回の報告は玉島川東岸域の発掘調査報告書の第 1 冊目にあたります。本書が今後の学術・文化向上に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多難な調査作業に従事していただいた地元の皆様、整理作業に従事していただいた調査事務所の方々、並びに埋蔵文化財の保護に御理解頂きました佐賀国道事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

平成 22 年 3 月 26 日

佐賀県教育委員会

教育長 川崎俊広

例　　言

1. 本書は、西九州自動車道唐津一浜玉道路建設に伴い平成17～20年度に実施した、唐津市浜玉町湖上・谷口所在の仁田古墳群・矢作遺跡・下新田古墳群・大坂古墳群の発掘調査報告書であり、西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書の第8冊である。
2. 発掘調査は国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり唐津市教育委員会の協力を得て実施した。
3. 本書の執筆分担は目次に記す。
4. 報告書作成にあたっての整理作業の遺物復元、遺物実測、製図、遺物写真撮影、編集などは主に唐津中原事務所で行ない、一部文化財資料室でも行なった。また遺物実測の一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託している。写真現像焼付は唐津中原事務所で行なった。作業分担は次のとおりである。
遺物復元整理　・・・桑代ゆかり・徳田まり子・松本いつ子・脇山邦子（中原事務所）
遺物実測・製図　・・・大蘭聖子・菊池孝子・美浦あすさ（中原事務所）、一番ヶ瀬富士子・江島美恵子・桑原廣子・山口美佐子（文化財資料室）
遺物写真撮影　・・・美浦雄二
写真現像焼付　・・・古藤真理子（中原事務所）
写真整理　・・・松本綾子（中原事務所）
図版作成　・・・戸塚洋輔・藤原理恵・美浦雄二
5. 遺構実測は一部作業員の補助のもとに調査員が行ない、（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。空中写真は（有）空中写真企画に委託した。
6. 発掘調査、遺物整理に際して下記の方々から指導・助言を得た。
大橋康二（九州陶磁文化館）、田島龍太（唐津市教育委員会）、徳永貞紹・宮武正人（佐賀県教育庁）、西田民雄（佐賀県文化財保護審議員）、原田昌幸（文化庁）、東中川忠美（名護屋城博物館）（順不同・敬称略）
7. 本書の執筆・編集は美浦雄二が行なった。

凡　　例

1. 遺跡の略号は下記のとおりである。
仁田古墳群（TND）・矢作遺跡（YAH）・下新田古墳群（SMD）・大坂古墳群（OOS）
2. 遺構種別記号は次のとおりである。
SK：土壤、SD：溝跡・溝状遺構、SP：土壤墓、ST：古墳、SX：性格不明遺構
3. 各遺構番号は（遺構種別記号-番号）で連番とした。本書でも発掘調査時の遺構番号を原則的にそのまま用いた。
4. 遺物番号は遺構ごとに連番として本文中では挿図番号-遺物番号で表記した。写真図版遺物も同じである。
5. 本書に用いた方位はすべて国土座標第II系の座標北である。
6. 遺物および実測図の検索・照合のため、実測遺物全てに登録番号を一覧表に付記した。
7. 遺物・遺物写真・遺構・遺物実測図は佐賀県文化財調査研究資料室に保管する。

目 次

I. 調査の経過（美浦）	1
1, 調査に至る経過	1
2, 調査組織	1
3, 調査の方法と経過	6
II. 遺跡の位置と環境（美浦）	15
1, 地理的環境	15
2, 歴史的環境	18
III. 仁田古墳群1区の調査（美浦）	23
1, 調査の概要	24
2, 遺構	24
3, 遺物	32
IV. 仁田古墳群2区の調査（美浦）	67
1, 調査の概要	68
2, 遺構	68
3, 遺物	71
4, 小結	73
V. 仁田古墳群3区の調査（美浦）	87
1, 調査の概要	88
2, 遺構	88
3, 遺物	91
4, 小結	91
VI. 矢作遺跡4区の調査（美浦、戸塚）	105
1, 調査の概要	106
2, 遺構	106
3, 遺物	109
4, 小結	109
VII. 下新田古墳群の調査（美浦、戸塚）	121
1, 調査の概要	122
2, 遺構	122
3, 遺物	128
4, 小結	128

Ⅶ. 大坂古墳群の調査（美浦、藤原）	139
1. 調査の概要	140
2. 遺構	140
3. 遺物	156
4. 小結	158
Ⅸ. 付論（美浦）	181
1. 仁田古墳群1区出土棺甕について	181
2. 唐津市域の古墳の分布について	181

挿図目次

図 I-1 路線図(1/50000).....	2
図 I-2 仁田古墳群矢作遺跡調査区位置図 (1/2000)	7
図 I-3 下新田古墳群A・B地区調査区位置 図(1/2000)	8
図 I-4 大坂古墳群調査区位置図(1/2000)	9
図 II-1 遺跡位置図	15
図 II-2 海岸線・砂丘地形分布図(1/10000)	16
図 II-3 周辺遺跡分布図(1/50000,1/100000)	19
図 III-1 仁田古墳群1区・2区地形測量図 (1/800)	25
図 III-2 仁田古墳群1区遺構配置図(1/250)	27
図 III-3 土層模式図(1/20)	28
図 III-4 土壌墓1(1/40)	28
図 III-5 甕棺墓1(1/40)	29
図 III-6 甕棺墓2(1/40)	30
図 III-7 甕棺墓3(1/40)	31
図 III-8 仁田古墳群1区出土棺甕1(1/12)	35
図 III-9 仁田古墳群1区出土棺甕2(1/12)	36
図 III-10 仁田古墳群1区出土棺甕3(1/12)	37
図 III-11 仁田古墳群1区出土土器・陶磁器 (1/3)	38
図 III-12 仁田古墳群1区出土土器・陶磁器 ・煙管(1/3,1/2)	39
図 III-13 仁田古墳群1区出土錢(1/2)	40
図 IV-1 仁田古墳群2区遺構配置図(3/500)	69
図 IV-2 調査区南壁土層図(1/80)	70
図 IV-3 SP201(1/20)・SK203・P2003・P2004・ P2007・P2049(1/40)	72
図 IV-4 SP201出土遺物(1/3,1/2)	74
図 IV-5 その他の遺構出土遺物・包含層出土 遺物(1/3)	75
図 IV-6 包含層出土土器・陶磁器・石製品 (1/3)石器(1/2)	76
図 V-1 仁田古墳群3区遺構配置図(1/200)	89
図 V-2 調査区東壁土層図(1/80)	90
図 V-3 SK301・SD304・SK307・P3018(1/50)	90
図 V-4 SK301出土遺物・包含層出土土器1 (1/3)	92
図 V-5 包含層出土土器2(1/3)	93
図 V-6 包含層出土土器3(1/3)	94
図 V-7 包含層出土土器・陶磁器・土製品 (1/3)	95
図 V-8 包含層出土石製品(1/2,1/3)	96
図 VI-1 矢作遺跡4区地形測量図(1/400)	107
図 VI-2 ST401埴丘測量図(1/80)	108
図 VI-3 調査区北東壁土層図(1/40)	108
図 VI-4 ST401石室第1、第2主体部土層図	

（1/40）	110
図VI-5 ST401第1主体部（1/40）	111
図VI-6 ST401第1主体部内遺物出土状況 （1/20）	112
図VI-7 ST401第1、第2主体部墓壙（1/40）	113
図VI-8 ST401第1主体部使用石材（1/40）	114
図VI-9 ST401出土鉄製品（1/2）	114
図VII-1 下新田古墳群A地区地形測量図 （1/400）	123
図VII-2 A地区遺構配置図（1/60）	124
図VII-3 A地区土層断面図（1/60）	124
図VII-4 石室遺物出土状況図1（1/10）	124
図VII-5 石室遺物出土状況図2（1/10）	124
図VII-6 ST01古墳石室（1/40）	125
図VII-7 下新田古墳群B地区1トレンチ遺構 配置図（1/80）	126
図VII-8 下新田古墳群A・B地区出土遺物	127
図VIII-1 大坂古墳群遺構配置図（1/800）	141
図VIII-2 ST01古墳墳丘（1/200）	142
図VIII-3 ST01地山整形状況（1/200）	143
図VIII-4 ST01東西トレンチ土層断面図 （1/50）	144
図VIII-5 ST01南北トレンチ土層断面図 （1/50）	145
図VIII-6 ST01古墳天井石（1/50）	146
図VIII-7 ST01古墳石室（1/50）	147
図VIII-8 ST01古墳石室内堆積状況（1/50）	148
図VIII-9 ST01石室内遺物出土状況1（1/20）	149
図VIII-10 ST01石室内遺物出土状況2（1/20）	150
図VIII-11 ST01古墳石室正面見通し（1/50）	151
図VIII-12 ST01古墳石室閉塞状況（1/50）	151
図VIII-13 ST02古墳石室（1/50）	153
図VIII-14 ST02古墳石室（1/50）	153
図VIII-15 ST02南北、東西トレンチ土層図 （1/50）	154
図VIII-16 溝・炭窯（1/40）	155
図VIII-17 ST01出土土器1（1/3）	158
図VIII-18 ST01出土土器2（1/3）	159
図VIII-19 ST01出土土器・鉄製品（1/3,1/2）	160
図VIII-20 ST01出土鉄製品（1/2）	161
図VIII-21 ST01出土鉄製品・装身具類（1/2）	162
図IX-1 記年銘棺蓋一覧（1/40）	182
図IX-2 唐津市内古墳時代墳墓分布図1	183
図IX-3 唐津市内古墳時代墳墓分布図2	184

表 目 次

表I-1 調査担当者一覧表	5
表I-2 各遺跡の調査期間及び担当者一覧	6
表III-1 仁田古墳群1区土壤一覧表	41
表III-2 仁田古墳群1区棺窓計測表	45
表III-3 仁田古墳群1区出土遺物一覧表	48
表III-4 仁田古墳群1区出土煙管・錢一覧表	49
表III-5 仁田古墳群1区出土鉄計測表	49
表III-6 仁田古墳群1区出土煙管計測表	50
表IV-1 仁田古墳群2区出土土器一覧表	77
表IV-2 仁田古墳群2区出土鉄製品・石製品 一覧表	78
表V-1 仁田古墳群3区出土土器一覧表	97
表V-2 仁田古墳群3区出土土製品一覧表	98
表V-3 仁田古墳群3区出土石製品一覧表	98
表VI-1 矢作遺跡4区出土鉄製品一覧表	114
表VII-1 下新田古墳群出土土器一覧表	130
表VII-2 下新田古墳群出土石製品一覧表	130
表VIII-1 大坂古墳群出土土器一覧表	165
表VIII-2 大坂古墳群出土鉄製品・ 耳環・玉類一覧表	166

卷頭図版目次

(表 紙)玉島川東岸航空写真	4.大坂古墳群ST01石室全景(南から)
(裏表紙)仁田古墳群2区SP201出土遺物集合	5.仁田古墳群1区出土棺甕集合
1.玉島川東岸航空写真	仁田古墳群2区SP201出土土器集合
2.仁田、矢作地区調査区合成写真	6.大坂古墳群ST01石室出土土器集合
3.仁田、矢作地区遠景(東から)	
矢作遺跡4区ST401石室全景(北から)	

図版目次

PL.III-1	1.調査区全景1(上空から)	51	PL.III-13	仁田古墳群1区出土棺甕 8	63
	2.調査区全景2(南から)	51	PL.III-14	仁田古墳群1区出土棺甕 9 、 仁田古墳群1区出土遺物 1	64
PL.III-2	1.調査区全景3(西から、谷口古墳 を望む)	52	PL.III-15	仁田古墳群1区出土遺物 2	65
	2.甕棺墓群1(上空から)	52	PL.IV-1	1.調査区全景1 (反転前、上空から)	79
PL.III-3	1.遺跡遠景	53		2.調査区全景2(反転前、南から)	79
	2.遺構検出状況	53	PL.IV-2	1.調査区全景3 (反転後、上空から)	80
	3.土壤墓群1(南から)	53		2.調査区全景4(反転後、西から)	80
PL.III-4	1.土壤墓群2(北西から)	54	PL.IV-3	1.調査区全景5(反転後、北から)	81
	2.甕棺墓群2(北から)	54		2.調査区反転前完掘状況1 (南から)	81
	3.甕棺墓群3(北西から)	54	PL.IV-4	1.調査区反転前完掘状況2 (南から)	82
PL.III-5	1.SK01半裁状況(南から)	55		2.調査区反転前完掘状況3 (東から)	82
	2.SK04検出状況(西から)	55		3.調査区反転後完掘状況1 (西から)	82
	3.SK131遺物出土状況(西から)	55	PL.IV-5	1.調査区反転後完掘状況2 (北から)	83
	4.SK07遺物出土状況(東から)	55		2.SP201全景(南から)	83
	5.SK19検出状況(南から)	55		3.SP201土器集中部	83
	6.SK43検出状況(西から)	55	PL.IV-6	1.SP201漆器・土器検出状況 (南から)	84
	7.SK83(上)、84(下)検出状況(北から)	55		2.SP201完掘状況(南から)	
	8.調査区西壁土層(東から)	55			
PL.III-6	仁田古墳群1区出土棺甕 1	56			
PL.III-7	仁田古墳群1区出土棺甕 2	57			
PL.III-8	仁田古墳群1区出土棺甕 3	58			
PL.III-9	仁田古墳群1区出土棺甕 4	59			
PL.III-10	仁田古墳群1区出土棺甕 5	60			
PL.III-11	仁田古墳群1区出土棺甕 6	61			
PL.III-12	仁田古墳群1区出土棺甕 7	62			

3.SK202(南から).....	84	PL.VI-1	1.調査区全景1(南から)	131
4.SK203完掘状況(西から).....	84		2.調査区全景2(玉島川を望む)	131
5.P2004半裁状況(南から).....	84	PL.VI-2	1.調査区全景3(上空から)	132
6.調査区南壁東側(北から)	84		2.A地区全景(上空から)	132
7.調査区西壁(東から)	84	PL.VI-3	1.ST01石室全景(南から).....	133
8.調査区北壁(南から)	84		2.ST01石室石積(北から).....	133
PL.IV-7 仁田古墳群2区出土遺物 1	85		3.ST01遺物出土状況(南西から)	133
PL.IV-8 仁田古墳群2区出土遺物 2	86	PL.VI-4	1.B地区1トレンチ全景(南から)	134
PL.V-1 1.調査区全景1(上空から)	99		2.ST01遺物出土状況(南から)	134
2.調査区全景2(西から)	99		3.ST01石室掘方土層(西から)	134
PL.V-2 1.遺構検出状況(西から)	100		4.A地区作業風景(南から)	134
2.調査区全景3(北西から)	100		5.B地区1トレンチ西壁(東から)	134
3.谷部完掘状況(北から)	100	PL.VI-5	ST01出土遺物1	135
4.SK302半裁(南から)	100	PL.VI-6	ST01出土遺物2,B地区出土遺物1	136
5.SD304土層(西から)	100	PL.VI-7	B地区出土遺物2	137
6.SK307(北から)	100	PL.VI-1	1.調査区全景1(調査前,南から)	169
7.遺物出土状況(西から)	100		2.調査区全景2(北から)	169
8.調査区東壁(西から)	100	PL.VI-2	1.調査区全景3(上空から)	170
PL.V-3 仁田古墳群3区出土遺物 1	101		2.ST01全景1(上空から)	170
PL.V-4 仁田古墳群3区出土遺物 2	102		3.ST01全景2(南から)	170
PL.V-5 仁田古墳群3区出土遺物 3	103	PL.VI-3	1.ST01調査前(西から)	171
PL.VI-1 1.調査区全景1(北から)	115		2.ST01埴丘検出状況(南東から)	171
2.調査区全景2(南から)	115		3.ST01墓道前面遺物出土状況 (南から)	171
PL.VI-2 1.ST401第1,2主体部検出状況1 (西から)	116	PL.VI-4	1.ST01石室閉塞部検出状況(南から)	172
2. ST401第1,2主体部検出状況2 (南から)	116		2.ST01羨道部遺物出土状況(北から)	172
3.ST401第1 主体部蓋石 (北から)	116		3.ST01石室内遺物出土状況(南から)	172
PL.VI-3 1.ST401第1主体部蓋石除去後(北から)	117	PL.VI-5	1.ST01石室床面全景(南から)	173
2.ST401第2主体部土層断面 (南から)	117		2.ST01右袖部(北から)	173
3.ST401埴丘土層(南から)	117		3.ST01左袖部(北から)	173
PL.VI-4 1.ST401第1主体部遺物出土状況 (北から)	118	PL.VI-6	1.ST02全景(南から)	174
2.調査区全景3(上空から)	118		2.ST02石室全景(南から)	174
PL.VI-5 1.ST401完掘状況(南から)	119		3.SX03断面(北から)	174
2.ST401第1,2主体部掘方(南から)	119	PL.VI-7	ST01出土土器1,石製品	175
PL.VI-6 矢作遺跡4区出土遺物	120	PL.VI-8	ST01出土土器2	176
		PL.VI-9	ST01出土土器3,ST01出土鉄製品1	177
		PL.VI-10	ST01出土土器4	178
		PL.VI-11	ST01出土鐵製品2	178
			ST01出土鐵製品3,ST01出土耳環, ST01出土玉類	179

調査の経過

1. 調査に至る経過

西九州自動車道は、福岡県福岡市から前原市、佐賀県唐津市、伊万里市、長崎県松浦市、佐世保市を経由して佐賀県武雄市に至り、九州横断自動車長崎大分線と合流する総延長約 150km の路線であり、国土交通省九州地方整備局佐賀国道事務所の事業である。本埋蔵文化財発掘調査事業は、このうちの唐津道路区間の中の浜玉インターチェンジから福岡県境までの区間約 3.4km を対象としている。

佐賀県教育委員会社会教育・文化財課（当時は文化財課後に文化課）は、佐賀国道事務所から道路建設事業の照会を受け、平成 6 年度から路線予定地の踏査および確認調査を実施した。文化財調査体制は開発事業が広域かつ大規模であることから、調査主体は佐賀県教育委員会社会教育・文化財課とし、調査対象地の当該教育委員会からの職員派遣を受けた。これまでの本調査地点は唐津市堂の前遺跡・井ヶタ遺跡・未広遺跡・梅白遺跡・中原遺跡・赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・目貫古墳群・大江前遺跡・仁田古墳群・矢作遺跡・下新田古墳群・大坂古墳群である。このうち 2000 年 3 月に堂の前遺跡・井ヶタ遺跡・2003 年 3 月に梅白遺跡、2006 年 3 月に赤野遺跡・岩根遺跡・袈裟丸城跡・大江前遺跡・目貫古墳群、2007 年 3 月と 2008 年 3 月、2009 年 3 月に中原遺跡の一部の発掘調査報告書を刊行した。

本報告書に関する確認調査対象地は、路線内の玉島川以東から福岡県境までである。本調査に至る確認調査は平成 16 年～19 年 9 月にかけて実施した。確認調査担当は佐賀県社会教育・文化財課小松謙、唐津市文化課美浦雄二である。佐賀国道事務所路線測点番号では 120 ～ 170 まであり、重機及び人力による掘削を行なった。この確認調査により仁田古墳群及び矢作遺跡の広がりを確認した。下新田古墳群 A 地点、大坂古墳群は現地踏査により古墳の存在が認知できていたため、本調査範囲に加えることとした。仁田古墳群の確認調査では埴輪片が出土しており注目される。本調査は平成 17 年 12 月から着手し、平成 20 年 5 月に終了した。

2. 調査組織

調査主体 佐賀県教育委員会

調査協力 唐津市教育委員会

発掘調査（平成 17 年 4 月～21 年 3 月）

平成 17 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野 健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	初村 健二
	佐賀県教育委員会	文化課参事	東中川忠美
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	松本 誠一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	中村 信
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課主幹	西田 和己
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松 謙
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	谷 洋一郎

図 I-1 路網図 (1/50000)



庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	大島 健司
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	田中健一郎
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦 雄二
	佐賀県教育委員会	文化課係長	中原 吉朗
	佐賀県教育委員会	文化課主査	平尾 和子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	黒木 文好
	佐賀県教育委員会	文化課主事	山口 徹也
調査補助員	百崎正子		
発掘現場作業員	石本雅生、上野政喜、大谷節子、川崎はつえ、川崎美登香、進藤英司、杉原茂子、 田中朱実、中山博司、橋本静夫、豆田紀久子、吉村百合子、		
整理作業員	池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、江副明子、奥知恵子、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、辻美紀子、徳田まり子、中島美佳、松本いつ子、美浦あずさ、村里育子、脇山邦子、渡部直美		

平成 18 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野 健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	松永 光生
	佐賀県教育委員会	文化課参事	東中川忠美
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	松本 誠一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	中村 信
	佐賀県教育委員会	文化課主幹	西田 和己
	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松 謙
調査員	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	兒玉 洋志
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	丹羽 崇史
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦 雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課主幹	佐伯 勇次
	佐賀県教育委員会	文化課主査	平尾 和子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	黒木 文好
	佐賀県教育委員会	文化課主事	吉田 顯徳
	発掘現場作業員	石本雅生、岩田桂子、上野政喜、大谷節子、嘉村(川崎)恵美子、川崎はつえ、 川崎美登香、國分鎌彦、佐々木征子、佐藤良和、進藤克八、進藤睦美、杉原茂子、 中山博司、橋本静夫、豆田紀久子、宮添廣海、吉村百合子、米倉格	
整理作業員	池内理恵、市丸宮子、浦田照千代、江副明子、奥知恵子、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、 辻美紀子、徳田まり子、中島美佳、松本いつ子、美浦あずさ、村里育子、脇山邦子、渡部直美		

平成 19 年度

総括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野 健二
	佐賀県教育委員会	文化課長	松永 光生

	佐賀県教育委員会	文化課参事	東中川忠美
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	松本 誠一
	佐賀県教育委員会	文化課副課長	中村 信
調査総括	佐賀県教育委員会	文化課主幹	西田 和己
調査員	佐賀県教育委員会	文化課指導主事	小松 譲
	佐賀県教育委員会	文化課主査	川副麻理子
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	戸塚 洋輔
	佐賀県教育委員会	文化課嘱託	藤原 理恵
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦 雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会	文化課主幹	佐伯 勇次
	佐賀県教育委員会	文化課主査	平尾 和子
	佐賀県教育委員会	文化課主査	黒木 文好
	佐賀県教育委員会	文化課主事	吉田 顯徳
調査補助員	美浦あすさ		
発掘現場作業員	石本雅生、市丸年光、上野政喜、大谷節子、岡部禎宏、川崎(嘉村)恵美子、川崎はづえ、川崎美登香、國分嶺彦、佐々木征子、佐藤良和、進藤克八、進藤睦美、杉原茂子、谷口藤江、中山博司、野中清輝、橋本静夫、原豊弘、平尾はるみ、古川正木、牧山信雄、宮添廣海、横山清子、米倉格、渡邊京子		
整理作業員	市丸宮子、浦田照千代、江副明子、大薗聖子、奥知恵子、川原里美、菊池孝子、桑代ゆかり、坂本直久、徳田まり子、中島美佳、松本いつ子、村里育子、脇山邦子、渡部直美		

平成 20 年度

	佐賀県教育委員会	教育長	川崎 俊広
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課長	江島 秋人
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課参事	東中川忠美
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課副課長	七田 忠昭
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課副課長	寺島 克敏
調査総括	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課係長	小松 譲
調査員	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	梶山 裕史
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	井上 優生
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	市川 浩文
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課嘱託	戸塚 洋輔
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課嘱託	田中健一郎
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課嘱託	藤原 理恵
	唐津市教育委員会	文化課職員	美浦 雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主幹	佐伯 勇次
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	平尾 和子
	佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主査	古川 直樹

佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主事	吉田 順徳
佐賀県教育委員会	社会教育・文化財課主事	池田 陽介
調査補助員	美浦あづさ	
発掘現場作業員	石本雅生、市丸年光、大谷節子、岡本秀治、岡部禧宏、川崎(嘉村)恵美子、川崎はつえ、國分鏡彦、佐々木征子、佐藤良和、進藤克八、進藤睦美、杉原茂子、中山博司、野中清輝、橋本静夫、平尾はるみ、古川正木、牧山信雄、宮添廣海、米倉格、渡邊京子	
整理作業員	一番ヶ瀬富士子、市丸宮子、江島美恵子、大蘭聖子、川原里美、菊池孝子、桑代ゆかり、桑原廣子、古藤真理子、徳田まり子、松本綾子、松本いつ子、山口美佐子、脇山邦子	
室内整理作業	平成18年度～平成20年度	
報告書作成	平成21年度	
総括	佐賀県教育委員会 教育長	川崎 俊広
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課長	江島 秋人
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課参事	七田 忠昭
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課副課長	蒲原 宏行
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課副課長	寺島 克敏
調査総括	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課係長	小松 譲
調査員	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主査	梶山 裕史
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主査	井上 倫生
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主査	市川 浩文
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課嘱託	戸塚 洋輔
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課嘱託	藤原 理恵
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課嘱託	土屋 了介
	唐津市教育委員会 文化課職員	美浦 雄二
庶務会計	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主査	上村亞紀子
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主査	古川 直樹
	佐賀県教育委員会 社会教育・文化財課主事	吉田 順徳
調査補助員	美浦あづさ	
整理作業員	一番ヶ瀬富士子、江島美恵子、大蘭聖子、菊池孝子、桑代ゆかり、桑原廣子、古藤真理子、徳田まり子、松本綾子、松本いつ子、脇山邦子	

表 I - 1 調査担当者一覧表

年度	西暦	佐賀県(職員)	(嘱託)	唐津市職員	資料室(嘱託)
平成17	2005	西田・小松・川副	大嶋・谷・田中(9月まで)	美浦(10月から)	見玉
平成18	2006	西田・小松・川副	丹羽・見玉(2月まで)・田中(3月)	美浦	小森
平成19	2007	西田・小松・川副	戸塚・藤原	美浦	小森
平成20	2008	小松・梶山・井上・市川	田中・戸塚・藤原	美浦	小森

表 I - 2 各遺跡の調査期間及び担当者一覧

調査区名	調査期間	主な担当者
仁田古墳群1区	H17.12.～H18.3月	美浦・谷
仁田古墳群2区	H18.4月～H18.7月	美浦・兒玉・丹羽
仁田古墳群3区	H19.3月～H19.6月	美浦・丹羽・藤原
仁田古墳群4区	H19.8月～H20.3月	美浦・藤原
矢作遺跡1区	H18.7月～H19.3月	美浦・兒玉・丹羽・田中
矢作遺跡2区	H19.5月～H19.8月	美浦・川副・藤原
矢作遺跡3区	H19.6月～H20.3月	小松・美浦・戸塚・藤原
矢作遺跡4区	H19.5月～H19.6月	戸塚
下新田古墳群	H19.3月～H19.5月	戸塚
大坂古墳群	H20.1月～H20.5月	梶山・戸塚・藤原

3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

仁田古墳群の略号はTNI、矢作遺跡はYAH、下新田古墳群はSMD、大坂古墳群はOOSとした。調査区の呼称は算用数字を用い、仁田古墳群1区であれば「TNI-1」とし、図面や写真、遺物の注記など記録類の表示に用いた。仁田古墳群と矢作遺跡は地形的なまとまりや買収状況によりそれぞれ1区から4区の調査区に分けた。

調査区画は隣接する仁田古墳群1、2区は統一し、世界測地系にあわせX = 50650、Y = -88080の交点を原点とする10m × 10mの方眼区画を設定した。東西方向をアルファベットとし東から西にA～G、南北方向を算用数字にして南から北に1～とし、グリッド（区画）名をアルファベット+算用数字で表記した。各グリッドの南東杭をグリッド杭とし、杭にグリッド名を表示した。

調査区が近接する仁田古墳群3、4区と矢作遺跡1～3区は統一した調査区を設定した。世界測地系にあわせてX = 50650、Y = -88120の交点を原点とする10m × 10mの区画を設定した。グリッド設定は仁田古墳群1、2区と同じく南東杭を基準とした。古墳の調査を行なった矢作遺跡4区、下新田古墳群、大坂古墳群は包含層遺物の取り上げがなかったため、グリッドの設定を行っていない。

仁田古墳群と矢作遺跡の遺構番号は3桁の一連の番号とし、百の位は調査区を示すことにした。この遺構番号の頭に遺構の種別を示すアルファベット2文字の分類記号を付けて表示した。下新田古墳群と大坂古墳群は2桁の番号である。柱穴は調査区ごとの3桁の一連番号とし千の位は調査区を示すこととした。

遺構の写真は白黒、カラーリバーサルとも4×5、プロニー、35mmを使用し、カラーネガは35mmのみに使用した。また、必要に応じ気球による写真撮影を委託した。これまでの写真撮影との大きな違いは、平成18年度からデジタルカメラによる撮影を本格的に導入したことである。

調査にあたっては基本土層を設定し、表土は重機により掘削し、包含層は人力掘削を原則とした。ただし、出土遺物が少ない包含層は重機掘削を行なった。

(2) 調査の経過

玉島川東岸の本調査は平成17年12月5日の仁田古墳群1区の重機による表土掘削から始まった。

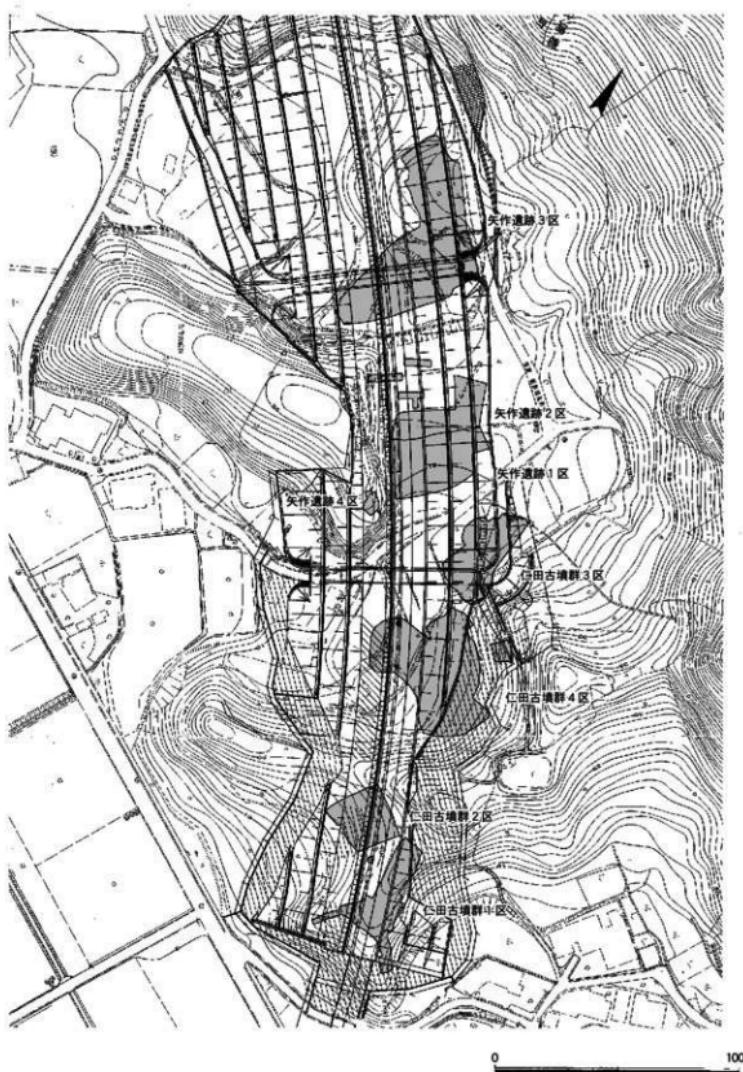


図 I-2 仁田古墳群・矢作遺跡調査区位置図 (1/2000)



図 I - 3 下新田古墳群 A・B 地区調査区位置図 (1/2000)

終了は平成 20 年 5 月であり、調査期間は 3 年間である。本報告書に掲載する調査区は仁田古墳群 1 ~ 3 区と矢作遺跡 4 区、下新田古墳群、大坂古墳群である。

仁田古墳群 1 区の調査では、玉島川東岸地区の調査が始めてであったため、作業員の募集から始めた。遺跡周辺地区で公募をかけ、調査を進めながら徐々に体制を整えていった。また周辺は公共水道がないため、水の確保がその後の調査においても最大の懸案事項となった。加えて民家と畑地に近接する丘陵上の調査区であるため、調査区からの排水についても苦労が続くことになる。

工事との関係も大きな問題となった。佐賀国道事務所は西九州道の工事を“着々プロジェクト”と命名し、区間を区切って用地買収から供用開始を 5 年間で行なうこととしたため、用地買収が虫食い状であっても、期間がないため調査を進めなければならず、常に工事と発掘調査が隣り合わせの状態であった。そのため工事業者とは常に連絡を取り合って調査対象地や進入ルートの設定を行なった。

仁田古墳群 1 区の調査期間は平成 17 年 12 月から平成 18 年 3 月までである。平成 12 年 12 月 5 日から重機による表土掘削を開始し、12 月 12 日からは人力による掘削を始めた。丘陵先端部では踏査により古墳状の地形の盛り上がりを確認していたが、路線の変更により調査区外となった。表土を剥ぐと包含層ではなく、直下が地山となっており、大きな削平を受けていることが分かった。しかし、時期不明ながら地山に掘り込まれた土壤状の遺構が調査区全体で確認されたため、これらを調査対象とした。丘陵先端部の遺構の掘削を開始した。その結果、これらの遺構は近世以降の墓であることが分かり、他の遺構は完全に削平されていることが分かった。1 区の調査と並行して周辺の確認調査も行なった。1 区の西側斜面で包含層と遺構があることが分かり、18 年度の調査対象地とした。1 区東側では流れ込みの層から弥生土器を中心に遺物が出土したが、遺構の広がりはなかったため調査対象とはならなかっ



図 I - 4 大坂古墳群調査区位置図 (1/2000)

た。仁田古墳群1区は3月8日に調査を終了した。また3月6日から矢作地区の用地買収が済んだ地点の確認調査を行ない、仁田古墳群3、4区、矢作遺跡1区を調査対象地に加えることになった。

平成18年4月、新年度の体制で県は嘱託の谷が去り児玉（前年度資料室担当）と丹羽が新たに加わった。4月12日から2区の表土剥ぎに着手した。4月17日には人力による遺構検出を開始した。表土の関係上、反転調査を行なうこととした。表土剥ぎを行なったところ、傾斜が非常にきついことが分かり、少量の雨でも運搬作業ができない状態であった。また粘質土であったため、すぐに検出面が乾いて硬化し、遺構掘削ができない時もしばしばであった。6月に入り重機により調査区の反転を行ない、月末には調査が終了し埋め戻しを行なった。しかし、折しも梅雨明け前の豪雨と重なり、調査区に降った雨が直接直下の道路や畑地に流れ込み、数度人力による汚泥の除去や排水を行なうことになり、周辺住民や工事関係者に迷惑を掛けることになった。

平成18年7月31日に矢作遺跡1区の表土剥ぎを行なった。その際建物群に伴う柱穴や砂鉄の集中と鍛冶炉群を確認した。8月8日から人力による調査を開始した。8月23日には「道の日」の事業として地域住民による調査現場の見学が行なわれた。9月5日に通勤中の作業員が交通事故により亡くなられるという痛ましい事故が起きた。9月26日には矢作遺跡3区の確認調査を行ない、古墳状の石組遺構として4基を確認した。また重機による谷部の確認では谷底付近から古墳時代～古代にかけての包含層を確認した。11月に入り矢作遺跡1区では、鍛冶炉群を除いて古代の遺構面まで重機による掘削を行ない、下層からも古代の鍛冶炉を確認した。これにより、当遺跡は古代以来鉄生産に関連する遺跡であるという認識が出来上がつていった。同じく、11月から中世の鍛冶炉群の調査を開始した。鍛冶炉群は調査を進めるに苦慮していたが、12月4日に福岡市の長屋氏が現場の観察に来られ、また製鉄遺跡研究者の穴沢氏による調査指導が12月25日（～27日）に行なわれたことにより、年明けから本格的に作業を進めることができた。土壤洗浄作業を調査と並行して行なったが、洗浄用の大量の水と洗浄後の泥水を処理する必要があり、地元住民の協力をいたぐことにより何とか解決に至った。2月上旬から鍛冶炉群の2面目の調査を行なったが、2面目からは明確な鍛冶炉は確認できなかった。2月15日には遺構の広がりを確認するため調査区を東西に拡張し、遺構面の重複を確認するため深掘りを行なった。その結果西側の拡張区では鍛冶炉群の広がりは見られず、柱穴列が多く見られた。平成19年5月に丘陵まで再拡張を行ない丘陵との境界部に溝が掘削されているのを確認している。深掘り部分では、古代の遺構面の下層からも遺構面を確認したが、これより下層については、危険を回避するため調査を断念した。最終的に矢作遺跡1区は遺構面を中世2面、古代1面、古墳～弥生時代2面を調査したことになる。

平成19年2月末から仁田古墳群3区の表土剥ぎを開始した。また2月28日に嘱託の児玉が退職し、田中（前長崎新幹線担当）が加わった。3月に矢作遺跡1区の調査後の埋め戻しと仁田古墳群3区、下新田古墳群A地点の調査、渕上地区的確認調査を並行して行なった。渕上地区的確認調査では一部で包含層を確認したため下新田古墳群B地点として19年度に本調査を行なうことになった。

平成19年4月、新年度の体制で県は嘱託の丹羽と田中が去り、藤原と戸塚（前年度嘉瀬川ダム担当）が新たに加わった。4月23日から仁田古墳群3区と下新田古墳群A地点の調査を開始した。5月9日から前述した矢作遺跡1区の再拡張と下新田古墳群B地点のトレンチ調査を行なった。5月17日から矢作遺跡2区と4区の表土剥ぎを行ない、5月下旬から人力掘削を開始した。矢作遺跡2区では1区から続く造成土と若干の中世の遺構を確認したが、西側では削平がひどく、表土直下が岩盤という状態であった。しかし一部にシルト質の土壤を確認した。これは後にAso-4火碎流堆積物であることが

分かり、中世の遺構調査終了後、6月28日に再度重機を投入して火砕流堆積物の広がりの調査を行なった。火砕流堆積物は丘陵頂部にかけて同じ厚さで統一しており、火砕流堆積後に隆起沈降現象が起き、現地形が形成されたことがわかった。矢作遺跡4区では丘陵部の確認調査により、丘陵端部で古墳を1基確認した。盛土はほとんど残っておらず、石棺系の石室と粘土床が見つかった。6月19日には終了し、25日から矢作遺跡3区の追加の試掘調査を行ない、縄文時代の包含層を確認した。7月に入り重機による表土剥ぎを開始し、古墳の調査から人力を投入した。確認調査段階では4基と想定していたが、実際は古墳が2基であった。10月11日に空撮を行ない、11月に縄文晩期の包含層、12月に古代に埋没した深い谷部の調査に取り掛かった。谷部からは鉄滓が集中して見つかっており、付近に古代の製鉄炉が存在することは確実である。年明けの1月には新たに確認した縄文早期の包含層の調査を行ない、3月3日に調査を終了した。

仁田古墳群4区は8月5日に重機による表土剥ぎを開始し、埴輪と川原石の集積(SX401)と炭窯、ピットを中心とした遺構を発見した。8月23日からは人力掘削を開始した。当初埴輪の集積は丘陵上からの流れ込みではないかと考えていたため、丘陵上でもトレンチ調査を行なったが、果樹園と近世以降の墓群により大きく地形変更を受けており、その手がかりを得ることはできなかった。埴輪の集積の取上げ後、地形を確認するために深掘りを行なったところ、下層から埴輪窯を発見した。そのため急速に遺構の有無を確認するために調査区を拡張することとなり、工事側と調整を行なった。既に工事が周辺で行なわれていたが、可能な限り調査区を拡張した。その結果、埴輪の集積土壤やピット群を新たに確認した。埴輪窯の調査は12月から開始したが、窯跡は現地保存を検討していたため、中断を挟みながら慎重に作業を進めることとなった。1月26日には現地説明会を行ない300名の参加者を得た。非常に反響が大きかったことも後押しとなり、工事側と協議の結果、現地での埋め戻し保存が決定した。そのため窯跡は未調査部分を残したまま3月に埋め戻しを行なった。

大坂古墳群では1月28日に重機による表土剥ぎを開始した。ST01は当初予想していたより遺存状態がよく、年度をまたいで調査を継続することになった。ST01は石室床面から須恵器や鉄製品が豊富に出土しており、袖部も立石ではなく平積みであり、玄界灘沿岸の古墳の特徴をよく示していた。3月13日には石室内から鉄製品が盗難にあってることがわかり、警察の現場検証を受けた。4月25日にST02の調査を本格的に始めた。ST02は石室の奥壁と側壁の一部を除き大きく破壊を受けており、遺物も出土しなかった。5月1日から再度重機による表土剥ぎを行なったが、2基以外の古墳は見つかなかった。5月27日に大坂古墳群の調査は終了し、玉島川東岸の調査が全て終了した。

調査日誌

平成 17 年 (2005 年)

- 12月 5 日 仁田古墳群 1 区重機による表土掘削開始
- 12月 12 日 人力掘削開始

平成 18 年 (2006 年)

- 1月 17 日 仁田古墳群 1 区周辺試掘開始
- 1月 26 日 試掘終了
- 2月 9 日 空中写真撮影
- 2月 16 日 調査区拡張開始
- 3月 8 日 仁田古墳群 1 区現場作業終了
- 3月 6 日 仁田古墳群・矢作遺跡地区確認調査開始
- 4月 12 日 仁田古墳群 2 区表土剥ぎ開始
- 4月 17 日 仁田古墳群 2 区人力掘削開始
- 5月 12 日 現場見学会開催



見学会風景（仁田古墳群 2 区）

- 5月 15 日 SP201 掘削
- 5月 18 日 空中写真撮影
- 6月 1 日 重機による深掘り、調査区の反転調査開始
- 6月 16 日 空中写真撮影
- 7月 31 日 矢作遺跡 1 区重機による表土剥ぎ開始
- 8月 3 日 鍛冶炉群確認
- 8月 8 日 人力掘削開始

- 8月 23 日 道の日事業による遺跡見学
- 9月 5 日 作業員通勤中に交通事故で死亡
- 9月 8 日 基本層序確定
- 9月 16 日 木簡学会の現地見学で中原事務所訪問
- 9月 26 日 矢作遺跡 3 区確認調査開始
- 10月 20 日 矢作遺跡 1 区空中写真撮影
- 11月 2 日 重機により下層の掘削開始
- 11月 7 日 古代の鍛冶炉確認
- 11月 14 日 首都大学東京山田氏、福岡市教委山口氏中原遺跡出土木製品調査
- 11月 16 日 中世鍛冶炉群掘削開始
- 12月 4 日 福岡市長屋氏來訪
- 12月 25 日 穴澤氏調査指導（～27日）

平成 19 年 (2007 年)

- 1月 23 日 空中写真撮影
- 2月 5 日 鍛冶炉群 2 面目掘削開始
- 2月 7 日 鍛冶炉群他写真撮影
- 2月 15 日 重機による深掘り、調査区拡張開始
- 2月 16 日 パリノ・サーヴェイ現地調査
- 2月 26 日 空中写真撮影、仁田古墳群 3 区表土剥ぎ開始
- 2月 28 日 嘱託児玉退職
- 3月 12 日 排土運搬開始
- 3月 20 日 下新田古墳群調査開始
- 3月 22 日 淀上地区確認調査
- 4月 23 日 仁田古墳群 3 区、下新田古墳群 A 地点人力掘削開始
- 5月 9 日 矢作遺跡 1 区拡張部、下新田古墳群 B 地点重機による表土剥ぎ開始
- 5月 11 日 下新田古墳群 A 地点空中写真撮影
- 5月 14 日 矢作遺跡 1 区拡張部、下新田古墳群 B 地点人力掘削開始

5月 16日 仁田古墳群3区,矢作遺跡1区
 空中写真撮影
 5月 17日 矢作遺跡2区,4区重機による
 表土剥ぎ開始
 5月 21日 矢作遺跡2区人力掘削開始,下
 新田古墳群調査終了
 5月 22日 矢作遺跡4区人力掘削開始
 5月 30日 矢作遺跡4区 ST001 蓋石除去
 6月 1日 仁田古墳群3区調査終了
 6月 12日 矢作遺跡4区空中写真撮影
 6月 19日 矢作遺跡4区調査終了
 6月 25日 矢作遺跡3区人力による試掘開始
 6月 28日 矢作遺跡2区重機による表土
 剥ぎ開始
 6月 29日 矢作遺跡2区 Aso-4火砕流跡確認
 7月 12日 矢作遺跡3区,仁田古墳群4区
 重機による確認調査
 7月 17日 矢作遺跡3区重機による表土
 掘削開始
 7月 26日 矢作遺跡2区空中写真撮影
 7月 27日 パリノ・サーヴェイ現地調査
 8月 5日 仁田古墳群4区重機による表土
 剥ぎ開始
 8月 10日 矢作遺跡2区調査終了
 8月 23日 仁田古墳群4区人力掘削開始
 8月 27日 仁田古墳群4区丘陵上伐採開始
 9月 3日 大坂古墳群重機による確認調査
 開始
 9月 5日 仁田古墳群4区丘陵上重機によ
 る確認調査
 9月 13日 仁田古墳群4区 SX401 挖削開始
 10月 4日 仁田古墳群4区 SX401 トレン
 チ掘削,埴輪窯 SO405 発見
 10月 11日 矢作遺跡3区空中写真撮影
 10月 17日 仁田古墳群4区空中写真撮影
 10月 22日 仁田古墳群4区現地で工事と
 の打ち合わせ
 10月 23日 県教育長現場訪問
 11月 5日 仁田古墳群4区トレンチ調査開始

11月 12日 矢作遺跡3区縄文包含層調査
 開始,仁田古墳群4区調査区拉張
 11月 15日 文化庁福宣田調査官來訪
 11月 16日 矢作遺跡3区谷部重機掘削開始
 11月 22日 仁田古墳群4区 SK419 挖削
 11月 26日 仁田古墳群4区 SO405 焼成部
 掘削開始
 11月 30日 仁田古墳群4区空中写真撮影
 12月 11日 仁田古墳群4区工事打ち合わせ
 12月 13日 矢作遺跡3区谷部人力掘削開始
 12月 20日 仁田古墳群4区福岡県教委重藤
 氏,岸本氏,小郡市宮田氏來訪

平成 20 年

1月 7日 矢作遺跡3区縄文下層調査開始
 1月 15日 仁田古墳群4区県文化財保護審
 議会來訪
 1月 18日 仁田古墳群4区,矢作3区空中
 写真撮影
 1月 24日 仁田古墳群4区記者発表
 1月 25日 仁田古墳群4区大野城市教委舟
 山氏,石木氏來訪
 1月 27日 仁田古墳群4区現地説明会(300
 名参加)
 1月 28日 大坂古墳群重機による表土剥ぎ
 開始
 1月 29日 仁田古墳群4区中里逢庵
 氏,NHK 来訪



大坂古墳群の調査風景

- 1月 30日 仁田古墳群 4区春日市井上氏來訪
 2月 4日 大坂古墳群人力掘削開始
 2月 6日 仁田古墳群 4 区中里太郎衛門氏
 他, 佐賀国道事務所長來訪
 2月 21日 仁田古墳群 4 区 SO405 保存協議
 2月 22日 仁田古墳群 4 区唐津市文化財保
 護審議会現地視察
 2月 28日 仁田古墳群 4 区重機による調査
 区拡張開始
 3月 3日 矢作遺跡 3区調査終了
 3月 12日 大分県教委小林氏調査指導, 北
 九州市埋文字野氏他來訪
 3月 13日 大坂古墳群 STO01 盗難被害
 3月 14日 仁田古墳群 4 区熊本大学杉井氏,
 花園大学高橋氏他來訪
 3月 17日 仁田古墳群 4 区 SO405 埋め戻
 し開始
 3月 22日 仁田古墳群 4 区調査終了
 5月 15日 大坂古墳群空中写真撮影
 5月 27日 大坂古墳群調査終了



線刻が施された石材（大坂古墳群 STO1）



迷った？ 調査員

遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

仁田古墳群、矢作遺跡、下新田古墳群、大坂古墳群は佐賀県唐津市浜玉町谷口、測上に所在する。

唐津市は九州の北端で佐賀県の北西部、現在の市役所で北緯33度27分、東経129度58分である。平成17年1月に唐津市、浜玉町、巣木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町が合併し、さらには平成18年1月に七山村も合併した。平成20年度の統計によれば、面積487.45m²で人口132,952人、世帯数は48,500世帯である。唐津市は今回の合併により東は福岡県二丈町、南は佐賀市と多久市、西は伊万里市と玄海町に接する。北は唐津湾および玄界灘に面し、朝鮮半島へと連なる。呼子町から老岐島まで約30kmであり、鏡山山頂からも老岐島影を望むことができる。このように半島に最も近いという地理的環境のため、古代より我が國のなかでもいち早く半島や大陸の文化を受容した地域である。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地②松浦杵島丘陵地③脊振山地西部域④低地部(広義の唐津平野)⑤島嶼域の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に、第三紀末期～第四紀初頭にかけて噴出した松浦玄武岩が覆う溶岩台地である。通称“上場台地”と呼ばれ、標高150～200mである。②松浦杵島丘陵地は南北に流下する佐志川およびその延長線を境に東側の丘陵性山地であり、松浦川左岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約200m内外である。③脊振山地西部域は松浦川および唐津平野の東南部にあたり脊振山系の西部地域にあたる。地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部(唐津平野)は東松浦溶岩台地や松浦杵島丘陵地や脊振山地に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する低地を総称している。松浦川とその支流、玉島川、佐志川流域にあたる。五つの地形区分のうち①東松浦溶岩台地では主に旧石器～縄文時代の遺跡が、④低地部では主に弥生時代以降の遺跡が、⑤島嶼域ではおもに弥生～古墳時代の遺跡が立地する。また②の地域は急峻な地形を利用し中世には山城が築かれ、近代以降石炭の採掘が盛んに行なわれるようになる。

唐津平野を形成した河川には、最大規模の松浦川やその支流の徳須恵川、半田川、宇木川がある。松浦川とその支流は、脊振山系と松浦杵島丘陵地の間を縫うように流れる。玉島川は唐津平野の東端を流れる松浦川に次ぐ規模の河川である。脊振山系に水源をもち唐津湾に注ぐ。この他、唐津市街地を流れる町田川や唐津平野の北西端を流れる佐志川がある。これらの大河川や中小河川流域により、唐津平野内の遺跡はさらに地域区分ができる。

唐津平野の地形発達は海岸線の変化と密接に関わり、井関氏(1982)や下山氏(1994)の先行研究がある。井関氏の研究は唐津平野の地形発達史の嚆矢である。縄文海進期の海域の拡大による奥唐津湾の範囲を想定し、唐津平野の地形発達史の原型を示した。下山氏は海成層に含まれる海棲生物化石のうち貝

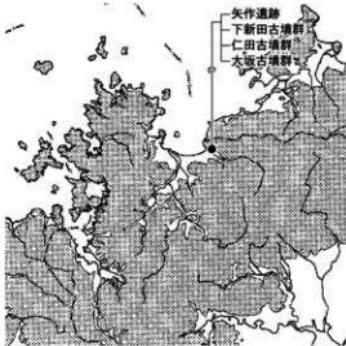
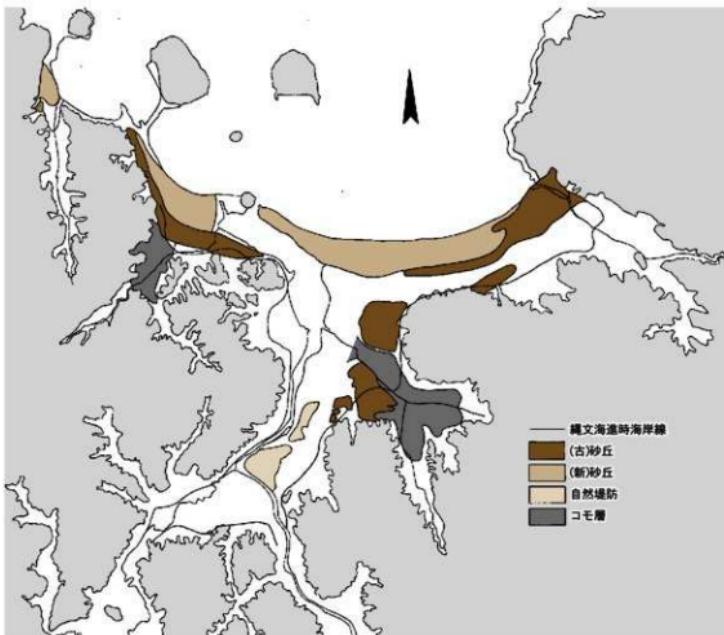


図 II -1 遺跡位置図



図II-2 海岸線・砂丘列地形分布図（1／10000）

殻に注目し、ボーリング資料により北部九州の海岸線を復元した。考古学的な検討は、コモ層の分布域を明らかにした木下氏(1981,1993)に始まる。近年田崎氏(2007)が唐津平野をモデルに、発掘調査データを用いて沖積低地の環境変遷を追っている。また小松・美浦(2008)は自然科学的な分析に加え、発掘調査成果を盛り込んで、現在までの唐津平野の地形発達と遺跡立地の関係についてまとめを行なっている。図II-2の縄文海進時海岸線は、これまでの研究をもとにしたものである。

縄文海進期の海面上昇の終焉後、幾度か訪れた海退現象により河川の堆積（沖積上部砂層）が拡大し、奥唐津湾は埋め立てられ現在の平野の概形が形成された。また同時に松浦川東岸地域と唐津市街地南部地域に砂丘列（古砂丘列）も形成され、初期稻作に適した後背湿地を生み出した。松浦川東岸の砂丘列は鏡山西麓の鏡集落から原集落、中原集落、徳武集落まで連続している。中原遺跡や後述する梅白遺跡は砂丘微高地上に立地するが、この砂丘の砂は極めて細く礫などを含まない風成砂である。井関氏は原集落と中原集落を古砂丘列としたが、西九州自動車道に係る文化財確認調査により、梅白遺跡から中原遺跡間も砂丘があることが分かり、夕日山北麓に広い砂丘が形成されていることが判明した。この古砂丘列の形成は発掘調査成果により縄文中期の前半代には始まっていることが分かった。

鏡山南麓の宇木川・半田川流域は砂丘列によって後背湿地になるが、この低地部に植物遺体層（通称コモ層）が広く堆積する。木下氏(1981)は、昭和40年代末～50年代にかけての農業基盤整備事業に係る文化財確認調査を基に、コモ層の分布範囲を明らかにした。宇木汲田貝塚遺跡や柏崎貝塚遺跡は、

縄文時代晚期～弥生時代前期の貝塚であり、後背湿地に面する丘陵裾部に立地する。発見された貝殻にヤマトシジミが多く見られた。そのため当該期、後背湿地は汽水性の潟であるとの考え方が支配的となり、コモ層の分布がその潟の範囲を示すものと考えられてきた。ところが、平成9年から始まった梅白遺跡の調査によって、コモ層の下から古墳時代の水田と、さらにその下層から縄文時代晚期～弥生時代中期の水田関連遺構が発見され、後背湿地の低地部においてもすでに水田開発が行われていたことが分かってきた。また、井関氏が想定した中原集落の砂丘はさらに夕日山北麓まで広がることも確認できた。

松浦川西岸の砂丘列は唐津市街地の南部地域に広がる砂丘であり、その背後に流れる町田川流域が後背湿地になる。菜畑遺跡の水田はこの後背湿地に、桜馬場遺跡は砂丘上に立地する。前述したコモ層は町田川流域にも広がっている。菜畑内田遺跡ではコモ層直下から梅白遺跡と同時期の古墳時代の水田が見つかっていることから、コモ層の堆積時期が宇木・半田川流域と同じであることが分かった。現在町田川の流路は砂丘列を横断し唐津城下が河口域になっているが、これは近世の河川改修の結果であり、それ以前の流路がどこを流れていたのかが問題である。小松・美浦(2008)では、和多田方面に東流し松浦川に注いでいたと想定している。

これに対し松浦川本流域ではコモ層は見つかるものの、その堆積時期は中原遺跡の調査成果により弥生後期中頃～後半と分かり、上述の流域とは違いがあることが分かった。堆積時期の違いは遺跡の発達する時期と密接な関係があり、今後とも注視していかなければならない。

佐志川流域では、コモ層が流域全体には発達しないことが発掘調査により確かめられている。河口部には砂丘列が形成されるものの規模が小さく、河口部を閉塞するまでは至らなかつたためであろうか。中流域の汐入遺跡では、縄文海進時の貝層が見つかっており、当時の海岸線の推定ができるようになつた。

今回掲載した遺跡は玉島川の流域にあたる。現在の玉島川は北流して唐津湾に注ぐが、これは近世初頭の河川改修によるものであり、旧玉島川は虹の松原砂丘と鏡山の間を西流していたとされる。また旧松浦川も徳須恵川と合流せずに北流していたとされ(註1)、鏡地区付近で玉島川と合流していたようだ。そのため鏡地区は松浦川と玉島川の河口域に属することになり現地形とは異なるため注意を要する。新砂丘列は弥生～古墳時代に形成されたと考えられ、虹の松原砂丘の発達は玉島川河口を天然の良港に仕上げた。玉島川流域はこれまで発掘調査が少ないこともあり、微細な堆積環境やコモ層の分布についてまだ不明な点が多い。大江前遺跡では弥生前期以前の時期の黒褐色粘質土(分解が進んだコモ層か)が見つかっているが、他の遺跡ではコモ層は見つかっておらず、流域全体を覆うような大規模なコモ層の発達は見られない可能性も考えておく必要がある。平成17年度から調査した仁田古墳群と矢作遺跡の調査では、古代と中世に谷部の埋積が進んだことが分かってきた。これらは人為的な開発の影響によることが推測される。

(註)

1：当時の河川は低地部ではいく筋にも川筋が分かれて流れていたと思われ、現在のように一本の川筋ではなかったであろう。そのため徳須恵川と松浦川が当時も合流していた可能性は当然ある。しかし本流では別の流路を形成していたと考えている。古文書では鏡の赤水付近で玉島川と松浦川は合流していたとある。そのため玉島川河口域の埋積は中～近世段階には相当進んでいたものと思われる。

参考文献

- 木下巧 1981『古代末瀬文化資料集成』肥前文化史研究会
井関弘太郎 1982「末瀬の地形と地質」『末瀬国』六興出版
下山正一 1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33-5
田崎博之 2007「発掘調査データからみた砂堆と沖積低地の形成過程」『砂丘形成と寒冷化現象』科研費補助研究報告書
小松謙 2008『中原遺跡』佐賀県教育委員会
小松謙・美浦雄二 2008「弥生成立期の地理的景観—佐賀県唐津市唐津平野にみる初期農耕集落の出現と拡大」藤尾慎一郎『弥生時代の考古学第2巻 弥生文化誕生』同成社

2. 歴史的環境

唐津地方は前項で記したとおりの地理的条件のため原始・古代から半島・大陸文化受容の地であった。東松浦溶岩台地・通称上場台地や低地部（唐津平野）さらに東松浦半島海岸に浮かぶ島嶼などにそれぞれ特徴的な遺跡が立地することも記した。以下、玉島川流域を中心に概観する。玉島川流域は細かく見ると玉島川本流域とその支流の横田川流域に分けることができるため、必要に応じて分けて記載する。

[旧石器時代]

最も遺跡数が多いのは上場台地上である。台地上には比較的幅の広い谷がヤツデ状に発達しており、遺跡はその谷部の湧水点近くに立地する。玉島川本流域では、上流域の旧七山村地域で少數の遺跡の存在が知られているものの非常に少なく、詳しい状況は分かっていない。このうち調査が行なわれた馬川谷口遺跡(1)からは、瀬戸内系のナイフ形石器が見つかっており注目される。大断遺跡(2)でも発掘調査が行なわれ、旧石器時代の遺物が出土しているようだが詳細不明である。西九州道関係で調査した赤野遺跡(3)は半田川、横田川上流域にあたり、ナイフ形石器等の少量の遺物が出土している。旧石器時代の調査として特出すべきものに、Aso-4火碎流堆積物の発見が挙げられる。赤野遺跡と矢作遺跡2区(4)で見つかっている。特に矢作遺跡2区の火碎流堆積物の堆積は規模が大きく、炭化木も発見された。これらの調査により、火碎流は脊振山地を越え、唐津地域にも及んでいることが証明された。

[縄文時代]

縄文時代も遺跡数が多いのは上場台地上であり、早期と晩期前半に遺跡数が増加することが指摘されている。しかし前時代に比して、縄文時代では低地部にも遺跡が見られるようになり、低地部の代表的な遺跡として菜畑遺跡、徳蔵谷遺跡が挙げられる。玉島川流域ではこれまで調査例が少なかったが、近年になり調査例が増えている。本流域の五反田松本遺跡(5)では、縄文中期後半～後期にかけての大量の遺物が流路状の落込みから出土しており、付近に同時期の集落が広がっているのは確実である。また矢作遺跡3区(6)では縄文時代早期や晩期の遺物が、下新田古墳群B地点(7)では、縄文時代早期の遺物が出土している。前述の馬川谷口遺跡でも早期の遺物が出土している。

玉島川流域の旧石器～縄文早期の遺跡は規模が小さいものが多いが、地質的に花崗岩地帯であるため丘陵の傾斜が急であり、大規模な遺跡が成立するような立地ではないためであろうか。また唐津地区では縄文中期以降の遺跡が台地上だけでなく、平野部でも見つかることが多く、遺跡の拡散期の一つである。五反田松本遺跡は徳蔵谷遺跡とほぼ同時期の遺跡であり、唐津地区での低地部への進出時期を示している。近年の調査により、玉島川流域にも同期の遺跡が広がることが分かってきたことは大きな成果である。



図II-3 周辺道路分布図 (1/50000, 1/100000)

[弥生時代]

弥生時代早期（縄文時代晚期後半）になると、低地部に形成された砂丘列背後の低湿地が初期稲作の適地となり、町田川流域では菜畑遺跡が、宇木・半田川流域では宇木汲田遺跡が出現する。玉島川本流域では、1954年に五反田支石墓(8)が調査され、甕棺や土器を内部主体にもつ6基の墓が見つかっている。この調査以降、弥生時代の遺跡の調査は少なかったが、近年本事業により大江前遺跡(9)の調査が行なわれた。ここでは稲作開始期の水路が見つかり、夜白式土器と大洞系の土器が共伴していることが分かり、全国的な広域編年網形成における大きな成果が上がっている。横田川流域では、干居地区に砂丘列が形成されており、その後背湿地は狭いものの稲作適地の一つである。ここに稲作開始期の遺跡として稻浦遺跡(10)が見つかっている。発見される土器は、大江前遺跡出土土器とほぼ同時期のものであり、これらは、町田川や宇木・半田川流域の稲作開始期の土器と比べ、若干新しい傾向を示しており、唐津平野内でも稲作の開始時期に差があることが分かってきた。弥生時代の遺物は仁田古墳群や矢作遺跡でも土器は見つかるものの、後の時代の遺物と比べると非常に少なく、遺跡としても大きな集落を形成するには至っていない。『浜玉町史』によると、弥生時代の遺物は各地域から見つかっているが、五反田周辺と横田周辺が最も多いようであり、両地区に拠点的な集落が形成されていたのであろう。

[古墳時代]

玉島川流域では前時代に比して多くの遺跡が見つかっており、古墳時代以降に流域の本格的な開発が始まったことを示している。遺跡数が多いため、渕上・谷口地区、五反田・南山地区、横田川流域、鏡地区の小地域に分けて概観する。渕上・谷口地区の経塚山古墳(11)では、当地方で唯一4mを越える竪穴式石室が築かれ、雛形鉄器が副葬される。雛形鉄器は横田川流域の目貫古墳群(12)ST01からも出土しており、経塚山古墳の築造は、玉島川流域にとって大きな画期である。谷口古墳(13)は国内最初期の竪穴系横口式石室をもつことで著名である。内部には九州では稀な長持形石棺を主体部にもち、副葬品は仿製三角縁神獸鏡、碧玉製石針など畿内の要素をもつ。この他黒田古墳群（石棺群）では、組み合わせ式石棺（箱式石棺か）や割り貫き式石棺（舟形石棺等か）が見つかったと伝えられている（註2）。黒田古墳群の詳細な位置は不明である。仁田古墳群は明治年間に発見され、須恵器等が出土しているようだ。矢作古墳群は本事業の調査により、矢作遺跡4区(14)として1基の古墳の調査を行なった。同事業では、他にも下新田古墳群と大坂古墳群(15)の調査を行なった。大坂古墳群からは玄門平積みの石室を主体部にもつ古墳が見つかっている。この他渕上古墳(16)は佐賀県内では唯一、石屋形をもつ石室が築かれており、後述する樋の口古墳(25)と並び肥後地域との繋がりを示す貴重な事例である。また仁田古墳群4区(17)からは全国的に見ても貴重な5世紀代の遺存状態の良好な埴輪窯が確認され、埴輪生産関係資料の少ない佐賀県で貴重な発見となった。

五反田・南山地区周辺は発掘例がないため詳細がよく分からないが、五反田古墳(18)からは金銅製冠？環？が出土したとされる。玉島古墳(19)からは鏡や垂飾付耳飾が出土している（註3）。この他集落遺跡の調査では、五反田松木遺跡から土器の集中部と炉跡が見つかっており、住居跡と推測されている。横田川流域では、小山田古墳(20)が近年発見された。直径は30mを越える大型墳であり、部分的な確認調査であるため遺物の出土はないものの、経塚山古墳や谷口古墳と同時期と推測されている。横田下古墳(21)は初期横穴式石室をもつことで著名であり、石室は福岡市の鋤崎古墳との類似性が指摘されている。横田下古墳が築かれた時期は、唐津平野内で集落遺跡が多く発見されており、古墳時代の画期の一つである。近隣の横田下古墳群(22)では、3基の古墳があったとされ、短甲や鏡の出土が報告されている。近年調査された大岩西遺跡(23)では、竪穴式石室や箱式石棺墓群が調査されている。出土

遺物としては、谷口古墳出土例と近似した石鉗が出土しており、併行する時期に築かれた小石室の古墳群なのであろう。前述のとおり本事業で調査された目貫古墳群では離形鉄器が出土している。

湖上・谷口地区、横田川流域の古墳は前方後円墳集成編年4～5期に多く、唐津地区の首長墓となる古墳が多く築かれている。また近年確認調査で高雄遺跡(24)から小型の土師器が多く出土しており、付近に集落の存在が推測される。

河口域の鏡地区には石障系石室をもつ樋の口古墳があり、唐津地域では非常に稀な家形埴輪や円筒埴輪が出土したことが伝えられている。島田塚(26)と正願寺(27)からは舟形石棺が見つかっている。島田塚からは銅鏡等の半島系の遺物が出土しており、唐津地域の古墳後期の首長墓である。この他後期古墳としては御灯坊古墳(28)や玉葛窟古墳(29)が知られているが、現在のところ前期に遡る古墳は見つかっていない。

[奈良・平安時代]

古代の唐津地域は肥前国松浦郡にあたる。松浦郡は現唐津市、西松浦郡、長崎県平戸や五島列島、佐世保市などを範囲とする極めて広い面積をもつ。松浦郡の古代行政組織は肥前国風土記によれば郷11所、里26所、駅5所、烽8所である。この中の具体的な地名や駅名は肥前国風土記、延喜式、和名抄などの史料によって分かる。郷名は肥前国風土記に値嘉郷、和名抄に庇羅、大沼、値嘉、生佐、久利の郷名が記される。里名は肥前国風土記に賀周里がみえるだけである。駅名は肥前国風土記に逢鹿駅、登望駅、延喜式に磐水、大村、賀周、逢鹿、登望の5駅名が記されている。烽は肥前国風土記に褶振烽、値嘉郷3所となっている。その他の地名の由来で鏡渡や大家島がみえる。

玉島川流域では古代の遺跡の調査はこれまで行なわれていなかったが、横田川上流域の岩根遺跡(30)を本事業により調査を行なっており、9世紀代の製鉄関連遺構が確認された。製錬炉本体は確認できなかつたが、遺物の検討から箱形炉であることが判った。流域は異なるものの近隣に位置する鶏ノ尾遺跡からは、平安時代の鍛冶炉と奈良～平安時代の炭窯等の遺構の他、谷部の整地層から大量の土師器供膳具と共に縁釉陶器、越州窯系青磁、播磨系須恵器が出土している。また仁田古墳群や矢作遺跡でも鍛冶炉や炭窯が見つかっており、これまでのところ古代の玉島川流域では製鉄に関する遺跡が多いようである。延喜式に記載された大村駅は唐津市浜玉町東北部にある大村神社(32)周辺が比定地である。大村神社の境内からは布目瓦が出土しており、また社殿背後に基壇状の盛り土もみられることから、奈良時代の寺院跡と考えられる。三宅格や東大寺要録にみられる弥勒知識寺と推定されている。古代官道はここから谷筋を抜け、白木峠を越えて福岡県側にいたると考えられる。

[中世以降]

中世以降の遺跡の調査もこれまで少なかったが、本事業により横田川流域では袈裟丸城跡(33)の調査が行なわれている。玉島川本流域でも矢作遺跡や仁田古墳群で製鉄関連遺構や大型の建物群の調査が行なわれている。前述の大村神社周辺は中世以降も交通の要所となっており、草野氏が鬼ヶ城(34)や居館を築いている。また草野氏は玉島川河口部に位置する鏡神社(35)の大宮司となっており、倭寇の一員として国外にも知られていた。また不時の発見ではあるものの市丸経塚(36)や座主経塚(37)が見つかっており、延焼した殿原寺(38)と並び中世の信仰を考える上で貴重な事例である。

近世になり平野部の本格的な開発が行なわれる。それまでは谷部の扇状地を利用した谷水田であったものが、積極的な新田開発により現在のような平野のほぼ全域が水田域となっている。玉島川の付け替えも元和二年の検地までには終了していたと考えられる。また近年、黒田山山頂部にある谷口石切丁場跡(39)が、近世大坂城の石垣の石材を調達した石切丁場ではないかと考えられるようになり、大きな

注目を浴びている。玉島川流域は宝暦十三年幕領に、文政元年対馬藩領となり明治を迎えていた。

註 2：唐津市史・経塚山古墳報告書による。

註 3：現在玉島古墳出土品として知られている山梶子形の耳飾は、『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』では、半田古墳（半田宮の上古墳）出土品として紹介されている。上述の文献では、玉島古墳出土品は「短冊形の小金片を鎖により繋げたもの」とされており、明らかに異なるものを指している。『末盧國』には、玉島古墳出土品と半田宮の上古墳出土品を変更したことについての記載がないため、詳細は不明である。遺物を所蔵する東京国立博物館では、玉島出土とされているためであろうか。

参考文献

- 1, 2 武谷和彦 2001 『馬川谷口遺跡』 七山村教育委員会
- 3, 9, 12, 30, 33 小松謙 2006 『大江前遺跡』 佐賀県教育委員会
- 4, 6, 10, 31 未報告
5. 田島龍太 2008 『五反田松本遺跡』 唐津市教育委員会
- 7, 14, 15 本報告
8. 松尾頼作 1957 『北九州支石墓の研究』 松尾頼作先生還暦記念事業会
渡辺正氣 1982 『五反田支石墓』『末盧國』 六興出版
11. 田平徳栄・蒲原宏行 1980 『経塚山古墳』 浜玉町教育委員会
13. 亀井明徳 1982 「谷口古墳」『末盧國』 六興出版
家田淳一・矢野和之・鷺津綾子 1991 『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』 浜玉町教育委員会
16. 西谷正 1982 「渕上古墳」『末盧國』 六興出版
17. 本村豪章 1982 「鬼釜古墳」『末盧國』 六興出版
- 18, 22 吉村茂三郎 1936 「名勝鏡山と其付近古墳の調査」『佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告』

佐賀縣

- 田平徳栄・蒲原宏行 1980 『経塚山古墳』 浜玉町教育委員会
19. 本村豪章 1982 「玉島古墳」『末盧國』 六興出版
- 20, 23 市川浩文 2002 『佐賀県内遺跡確認調査報告書 20』 佐賀県教育委員会
21. 小田富士雄 1982 「横田下古墳」『末盧國』 六興出版
24. 草場誠司 2008 『唐津市内遺跡確認調査(24)』 唐津市教育委員会
25. 高倉洋彰 1982 「樋の口古墳」『末盧國』 六興出版
26. 岡崎敬、本村豪章 1982 「島田塚古墳」『末盧國』 六興出版
28. 沢下孝信 1982 「御灯坊古墳」『末盧國』 六興出版
29. 劇茂源、沢下孝信、高橋学時 1982 「玉葛窟古墳」『末盧國』 六興出版
28. 松岡史 1962 「第二編 古代」『唐津市史』唐津市
30. 1982 「樋の口古墳」『末盧國』 六興出版
35. 中島直幸 1986 『鏡神社経塚』 唐津市教育委員会
唐津市教育委員会 1986 『鏡神社』 鏡神社一の宮建設委員会

第Ⅲ章

仁田古墳群 1 区の調査

遺跡名：仁田古墳群 1 区（略号TN I - 1）
所在地：佐賀県唐津市浜玉町谷口

仁田古墳群1区の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図III-1, 2)

調査区を丘陵の地形に沿って南北に約40m、東西に10mの広さで設定して、表土剥ぎを行なった。丘陵南端は端部が二股に分かれているため地形に沿って行なった。当初は丘陵南西端にある古墳の調査を中心に行なう予定であったが、路線の変更により対象地から除外されることになった。表土剥ぎを行なった結果、表土直下に花崗岩の岩盤と若干風化したバイラン土の地山を確認し、遺物包含層や旧表土は近世以来の墓群と果樹園造成による削平のため、全く確認されなかった。しかし、地山に掘り込まれた遺構を多數確認できたため、これらを調査対象とすることにした。調査区東西の壁際にトレーンチを設定し、土層と遺構の広がりを確認した結果、落ち際まで遺構が広がっていることが分かり、調査終盤には人力で調査区の拡張を行ない、遺構の広がりの確認に努めた。

遺構検出は丘陵の先端から行ない、方形プランの土壤を検出したため、SK番号を付け順次遺構の掘削に入った。その結果、土壤は土壤墓と甕棺墓と分かれたが、遺構略号の変更是せずに調査を進め、報告書作成においても、これを踏襲した。またピットは非常に少なかったため、遺構と一連の番号をつけた。調査中には周辺部の買収済みの用地の確認調査も並行して進め、1区の西側の確認調査では、遺構と遺物包含層を確認したため、次年度に本調査することとなった。また矢作地区の確認調査でも、遺構と遺物包含層を数箇所で確認したため、次年度以降の本調査対象地に加えた。

(2) 層序 (図III-3)

北西隅付近を基にした土層模式図を掲載している。1層は表土であり、土壤化のため下部(2層)に行くほど色調が明るくなる。3層は花崗岩バイラン土の地山。一部には岩脈も確認している。しかし北西隅の一部には褐色の粘質土の地山を確認しており、この粘質土は2区へつながっている。

2. 遺構 (図III-2, 4~7)

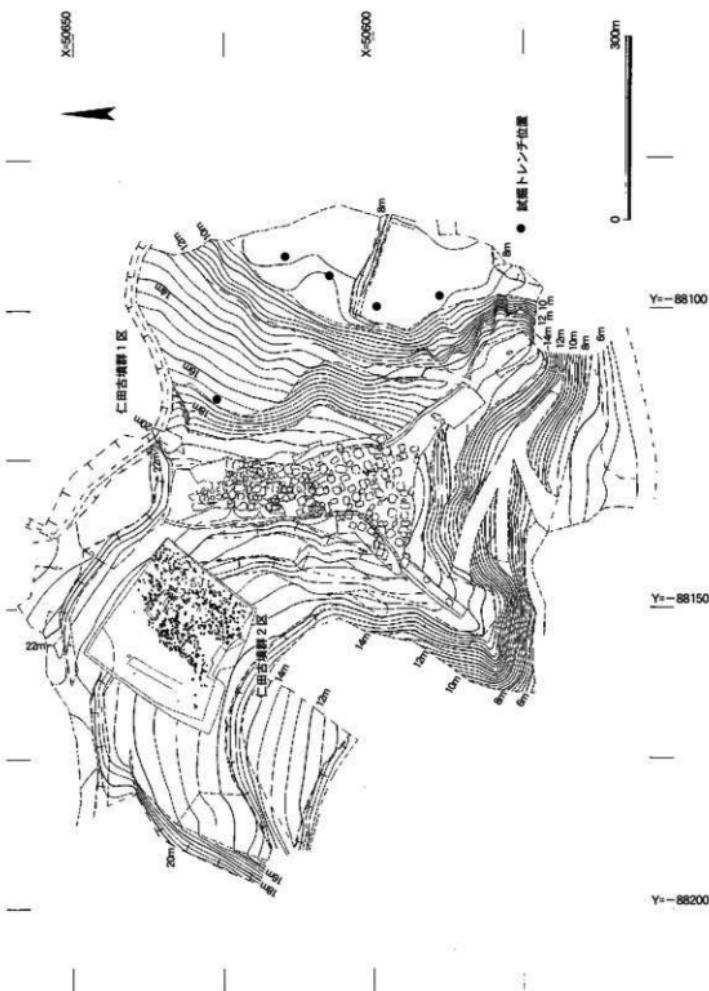
(1) 土壤墓 (図III-4)

土壤墓は90基確認した。土壤墓からは人骨が見つかっていないため、墓という確証はないが、岸高II遺跡の土壤墓との類似、いくつかの墓壙から見つかった陶磁器、北側に続いている甕棺墓群とのつながりから、土壤墓と認識するに至った。遺構はほとんどが大きく削平を受けており、深さ20~30cmしかなく、他の類例から見ると1m近い削平を受けていることが分かった。土壤墓と甕棺墓は共に墓壙の壁は直線的であり、底面との屈曲部も丸みを帯びていない。底面も丸みを帯びたものはない。遺構埋土は全て同一の褐色砂質土の単層である。

土壤墓は大きく見ると丘陵を東西に横断する方向にほとんど切り合いをもたず並んでいることが分かった。甕棺墓は丘陵基部に密集して丘陵を縦断する方向に墓群を形成しており、墓群の形成に違いがあることが分かった。このうち残りが良い数例について詳述する。

SK01

約1.3×1.0m。墓壙内から木の樹皮が見つかっているため、遺物は見つかっていないものの遺構番



図III-1 仁田古墳群1区・2区地形測量図 (1/800)

号をつけた。樹皮は墓壙内に収まる大きさにそろえられている。同様の類例は探すことができなかった。この他の遺構からは樹皮等は見つかっていないため、特に土壙墓としての確証がもてない遺構である。遺構埋土は他の土壙墓と同一の褐色の色調、含有物、しまりである。

SK02

約 $1.5 \times 1.0\text{m}$ 。深さが 1 m 程あり、あまり削平を受けていない。輸入陶磁染付の皿が埋土中から出土している。

SK04・131

川原石を中心とした礫群が見つかり、平面検出の段階でプランが確認できたため土壙としたが、断ち割りの結果非常に浅いことが分かった。そのため調査中は土壙ではないと判断して、図化後礫群を除去し再度検出を行なった結果 SK131 を確認した。礫群と SK131 の墓壙はずれており、重なる部分は少ない。そのため SK131 の墓壙上に配された礫群とするのは慎重にならざるを得ない。しかし SK04 の礫群は明らかに人工的な遺構であることから、遺構分類としては適当ではないが、当初からの命名である SK04 をそのまま残すこととした。SK131 は $1.7 \times 1.1\text{m}$ 。深さ 0.7 m。図化していないが底面から土師器皿底部片が出土した。

SK128

1.5 × 1.0m。側壁の角度は他と比べ緩やかである。切り合いがあり、128 が後出。肥前陶器皿の完形品が出土。

(2) 裹棺墓（図III-5～7）

墓壙は本来さらに深かったはずであるが、削平を受けているため本来の深さは土壙墓と同様不明である。また土壙墓と違い、密集して築かれており、墓域の構成に大きな違いがある。そのため個々の墓壙の大きさは分からいるものが多く、また埋土も全て同質同色であるため切り合いは不明である。墓石は全て除去してあり、改葬が行なわれている。そのため棺内から出土した遺物以外は二次的に移動しているものである。蓋には蓋がないものが多く、改葬の際に除去されたことも考えられるが、蓋があるものは改葬の際脚部を打ち割って中身を抜き出しているため、除去された可能性は低い。そのため木蓋があった可能性が最も高いと思われる。墓壙は一段毎に互い違いにするものと段がなく素掘りのものがある。底面に窪みを付け、蓋を据えやすくしたものと、平らなままのものがある。

SK07

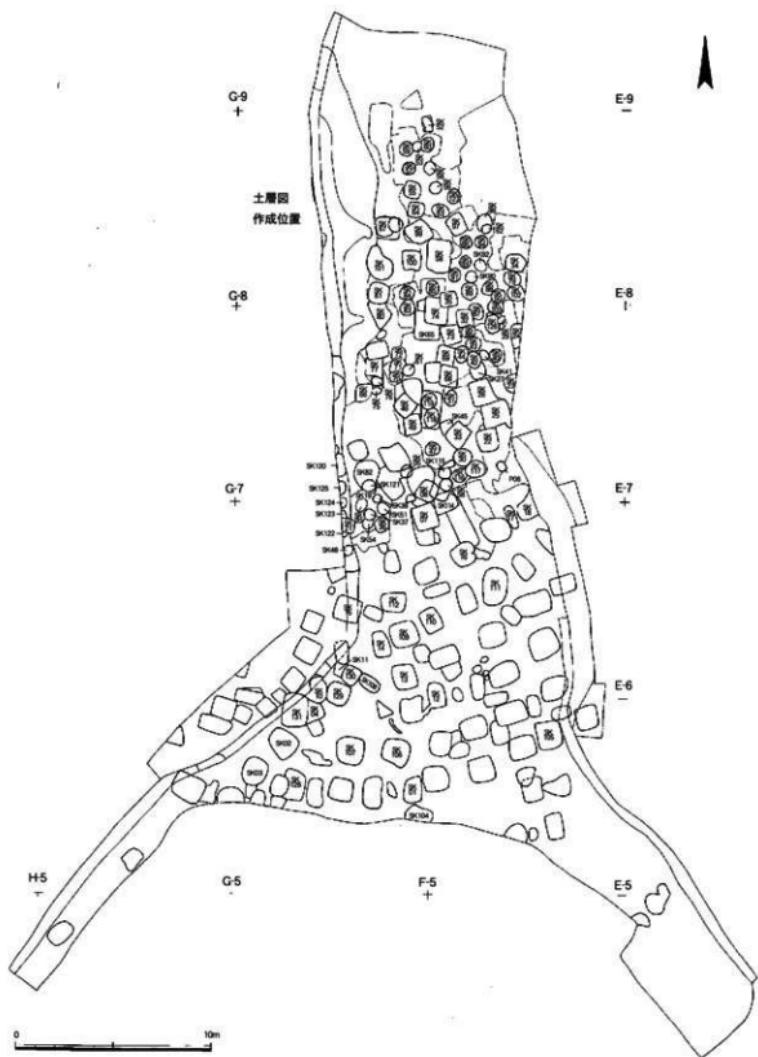
最初に発見した裹棺墓である。土壙墓と切り合いがあるが、土壙墓は非常に浅いため、大きく削平を受けていることが分かる。SK07 は当初図示している掘り込みを想定していたため、遺物は土壙墓としあたりから出土したものも SK07 としている。蓋を据える墓壙は一段毎に角を互い違いにする。

SK22

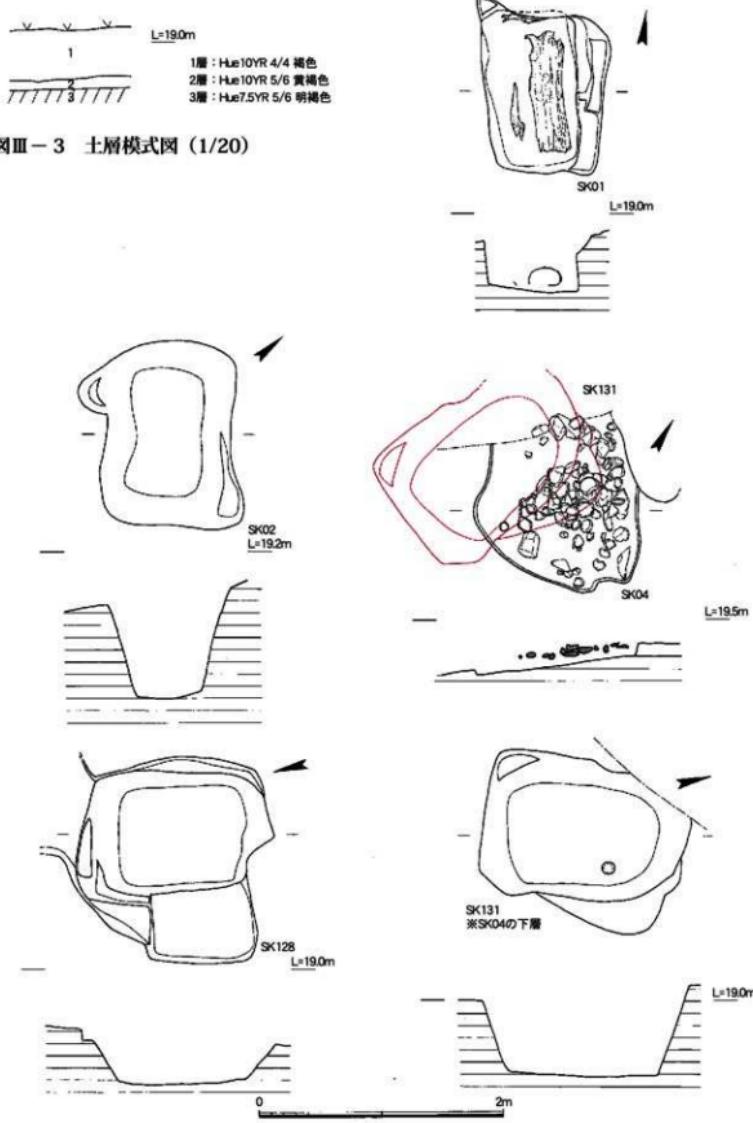
他の墓壙と切り合いをもたない数少ない例である。 $1.2 \times 1.2\text{m}$ のほぼ正方形。削平を受けながらも墓壙が約 2m 残っている。壁面はほぼ 80° 程度であり、掘削は困難であったろう。

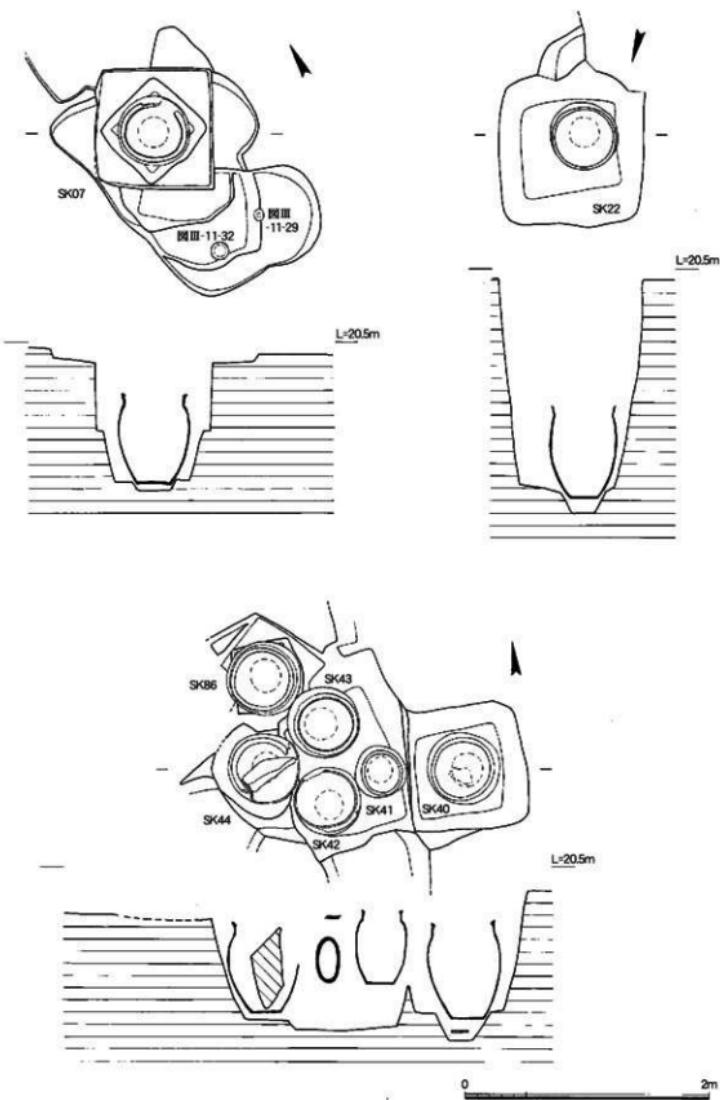
SK40～44、86

墓壙を接して築かれる。特に 42 と 44、43 と 86 は蓋自体がほぼ接している状態であった。そのため近親者の墓であった可能性もある。41～43 は同一墓壙内に埋納される。86 は墓壙を一段毎に角を互い違いにする。

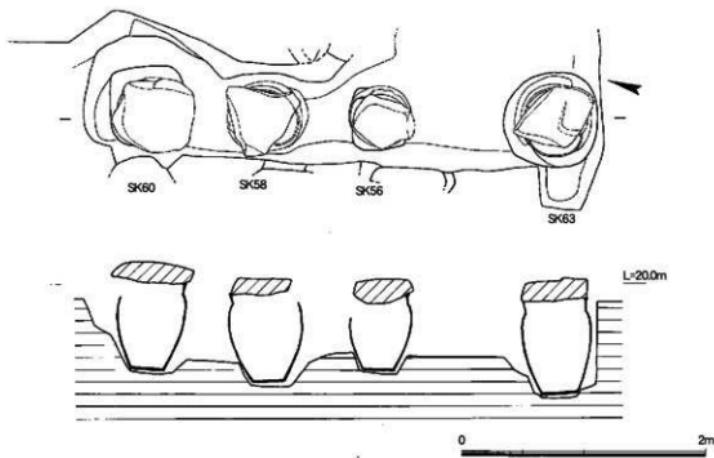
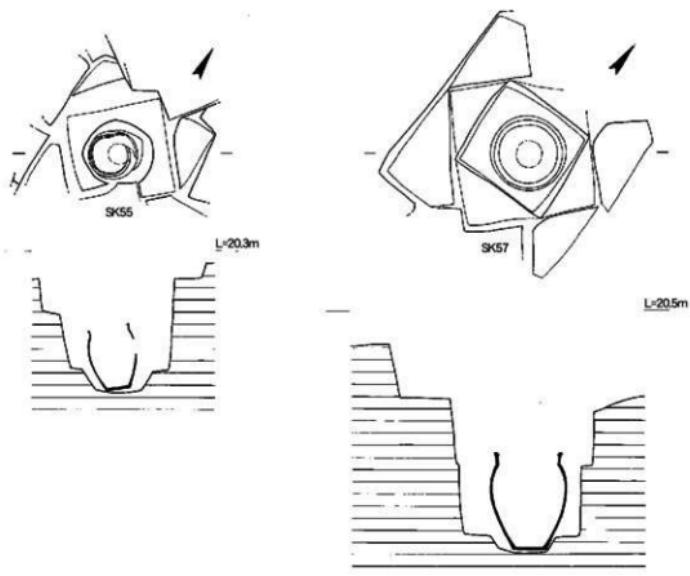


図III-2 仁田古墳群1区遺構配置図 (1/250)

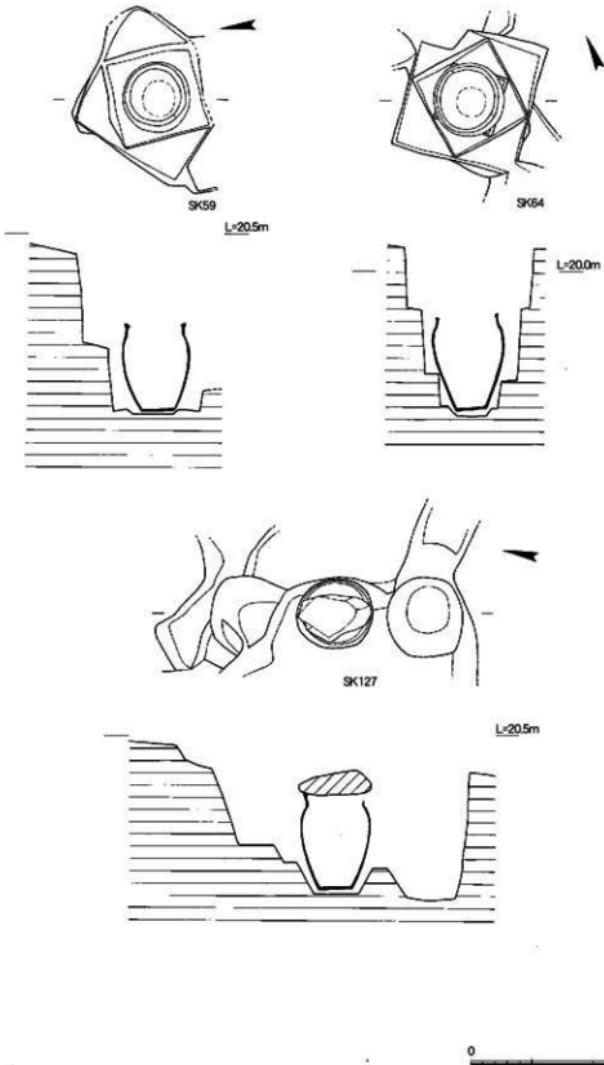




図III-5 製棺墓 1 (1/40)



図III-6 製棺墓2 (1/40)



図III-7 瓦棺墓3 (1/40)

SK55

墓壙を一段毎に角を互い違いにしており、3段が残存する。壁面はほぼ垂直。

SK57

墓壙は3段が残存する。壁面はほぼ垂直。底面には甕を据える窪みをつける。

SK56、58、60、63

墓壙が連なっており切り合いは不明。墓壙は一段毎に角を互い違いにはしていないようである。蓋には50cm程のサイズの石を用いる。

SK59

SK55、57、59、64は上記のSK56、58、60、63の西側に間隔を揃えてほぼ並列に並んでいる。SK59とSK60の間にはSK53が挟まっている。近しい関係にあったのであろうか。しかしSK55、57、59、64の列は墓壙を一段毎に角を互い違いにしており、掘り方には違いがある。

SK64

墓壙を一段毎に角を互い違いにしており、3段が残存する。壁面はほぼ垂直。

SK127

SK56、58、60、63の列の東側に位置する。掘り方だけが残った墓壙に接しており、改葬の際に甕ごと取上げたのであろうか。

3. 遺物（図III-8～13）

包含層は削平のためなく、遺構出土品だけである。東側のトレンチ出土品も一部掲載している。埋葬用の甕は計測できるものは全て計測を行ない、一部を実測した。記述は遺構順に行なう。

(1) 棺甕（図III-8～10）

棺甕は多く出土しているため、口縁部形態を基に分類を行なった。

1 a類：口縁部内面が玉縁状に突出するもの。最も多く出土している。

1 b類：a類と同じく口縁部内面が玉縁状に突出し、中程までを外面に突出させる。そのため内面が窪みを持つかたちとなる。

2類：口縁端部が内外面に突出するもの。外面は方形に面取りする。

3類：中小型品（中型：74cm未満、小型：65cm未満）のうち口縁端部がT字状に内外に突出するもの。

SK07 (1, 2)

1は蓋用の鉢。体部が直線的に開く。口縁端部を逆L字状に折り曲げ、端部を逆三角形に肥厚させる。

2は1a類。頸部から口縁部の器壁が厚く、頸部の締りが弱い。口唇部上面に砂目16ヶ所。

SK05 (3)

3類。小型の甕。肩部の張りがやや強く、口縁部はT字状をなす。肩部に突帯を付す。

SK19 (4～7)

SK19は不定形の土壙であり、数基分の墓の遺物が投棄された状態であった。SK19の掘削を進めていて、下部で確認した甕棺墓は別に番号をつけて調査を行なった。そのためSK19と他の墓出土品とした遺物と接合するものもある。4は白磁の鉢。SK38墓壙出土品と接合した。幅広の高台をもち、体部は丸みを帯びる。5は小形の甕であり、他には出土していないタイプ。口縁部が逆L字状に折れ曲がる。6は他の甕とは違い、釉が光沢を帯び、胎土が灰白色であるため肥前陶器の甕ではない可能性がある。

口縁部がT字状をなすが、大きく肥厚している。底部外面に墨書があるが、判読できなかった。7は3類。

SK22 (8)

器壁が厚めで胴部が丸みを帯びる。口縁部の外反が強い。1 a類。

SK41 (9)

中型の甕。口縁部が直立し、端部が内外面に肥厚する。3類。口唇部上面に砂目15ヶ所。

SK47 (10)

1 b類であるが、同類の16と比べると突出は小さい。口縁端部内面には肥厚させる際の折り曲げの跡が顕著に残る。口唇部上面に砂目16ヶ所。胴部の張りはやや強い。

SK48 (11)

小型の壺。口縁部は直立し、端部が外方に丸みを帯びて突出する。胴部の張りが強い。

SK55 (12、13)

12はこね鉢の転用品か。光沢のある釉薬を掛けしており、胎土は灰色。肥前陶器ではない可能性がある。13は小型の甕。3類。器形は9と同一であるが、口縁部は1 a類により近い。口唇部内面に沈線が2条巡る。

SK57 (14)

口縁部の外反がやや強く、内面の肥厚も大きい。胴部が丸みを帯びる。1 a類。

SK64 (15)

1 a類。口縁部が中程まで直立し、端部は外反する。口唇部内面に胎土目?が付着する。底部内面に砂目7ヶ所。

SK65 (16)

10と同じ1 b類であるが、口縁部の突出と窪みが大きい。焼け歪みがある。若干小振り。

SK68 (17)

胴の張りがほとんどなく、口縁部が直線的に開く。外底面に墨書がある。1 a類。

SK74 (18)

2類。細身であるが、肩部はやや張りがある。釉薬は掛かっていない。

SK85 (19)

2類。18と比べて肩で最大径が胴部中程にある。施釉され、胴部内面に粘土繕目が残る。口唇部上面に砂目が16ヶ所残る。

SK87 (20)

1 a類。口縁部は若干外反気味に直立する。

SK89 (21)

2類。19とほぼ同サイズであるが、施釉されない。

SK90 (22)

1 a類。口唇部内面の突出が大きい。底部付近の器壁が厚い。

SK92 (23)

1 a類であるが、高さに対して口径が大きく頸部の締まりも弱いため、他とは器形が異なる。自然釉が溶け出しており焼け歪みもある。

SK94 (24)

1 a 類としたが、若干内面に窪みがあり、b 類との中間形態。

SK98 (25)

2 類。2 類の中でも外面の突出が最も大きく、端部も丸みを帯びておらず、胸部の沈線の彫りが深い。

SK99 (26)

1 a 類としたが、口唇部内面の突出が蓋受けとなる。胸部に燈色の釉薬を別に掛ける。

SK122 (27)

1 a 類。胸部にスタンプ状の彫り込みで鶴亀、市松文様を刻む。

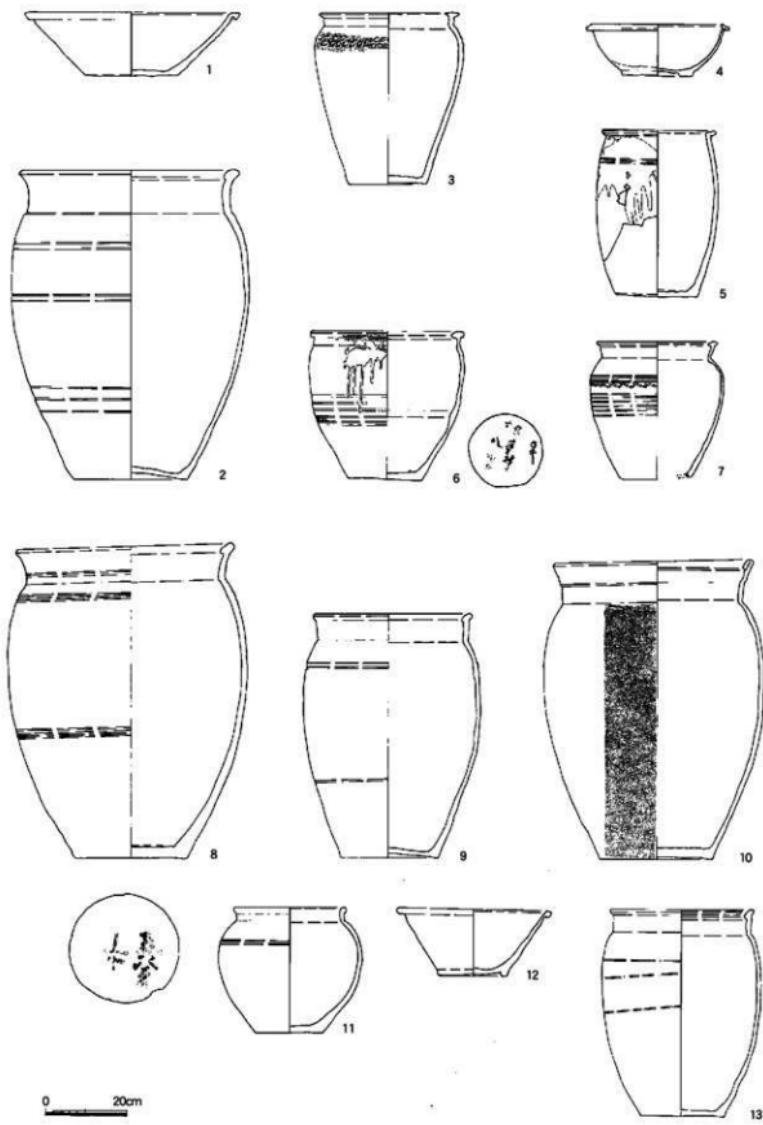
(2) 土器、陶磁器 (図III-11, 12)

28 は 9 レンチ出土。弥生土器裏底部。上げ底を呈する。この他 1 区東側のレンチからは、丘陵から流れ込んだ層から弥生土器が出土している。29 以降は墓壙出土品。29 は土師皿で、SK07 の埋土上層から出土した。底径が小さく底部糸切離し。外底面に 2 条の圧痕がつく。30 ~ 39 は陶器。32 は SK07 出土陶器皿。口縁部をなぶり口にする。35 は土壙墓 SK128 に副葬された陶器皿。釉の発色が悪く、内面底部に目跡が 4 箇所残る。36 は P06 出土陶器皿。P06 は墓域から見つかった性格不明の浅い小穴。埋土は墓壙と同じである。39 は SK85 周辺の埋土から出土した。陶器火入? 口縁端部を内側に折り曲げる。40 ~ 52 は磁器。45 は土壙墓 SK02 に副葬された磁器皿。内面に 2 条の園線を入れる。48 ~ 52 は紅皿。48 は SK41、49 は SK61 棺内出土。49 は外面にほとんど釉が掛かっていない。50 ~ 52 は SK87 出土品。SK87 は紅皿の他、後述する多量の錢を副葬した大型の棺蓋である。53 は土人形。極一部彩色が残る。

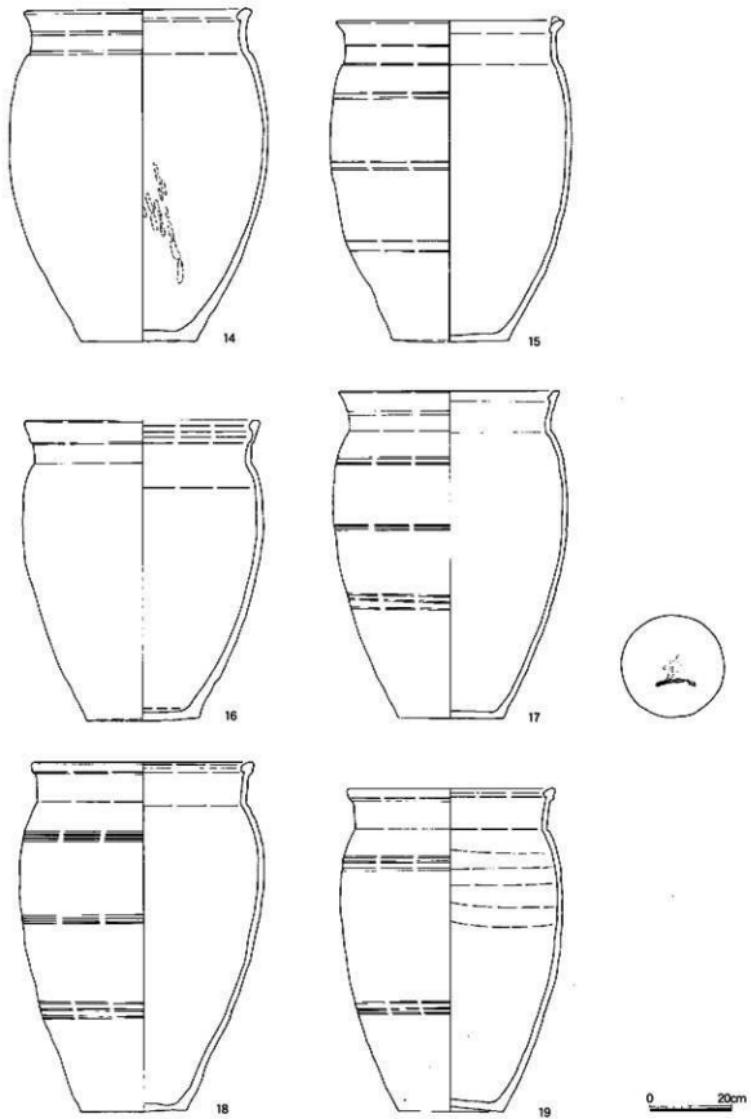
(3) 煙管、錢 (図III-12, 13)

煙管は棺内から多く出土しているが、その内 3 点を実測した。製品については表III-6 に計測値を掲載している。首部は全て太くて短く、脛返しがないタイプである。54 は SK119 出土。肩付きで首部が短い。吸口は出土品中最も長い。55 は SK25 出土の完形品。雁首～羅宇～吸口まで総長 19.2cm。煙管入れ（硬質）と皮袋も残存している。火皿内には煙草草の殻り？とも考えられる纖維質のものが残存している。火皿径は小さく、火皿高も低い。56 は SK97 出土。雁首、吸口共に肩付きで条線が巡る。

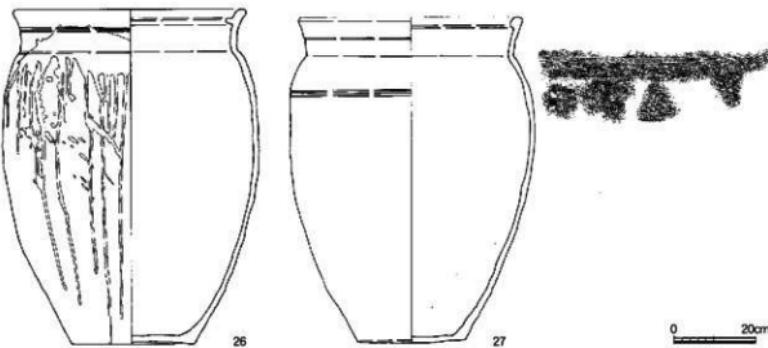
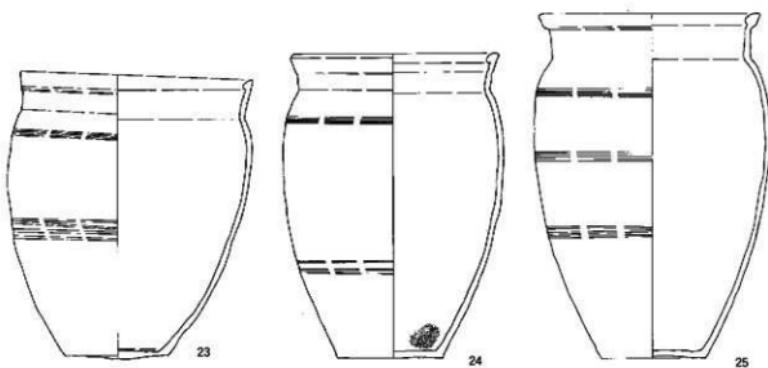
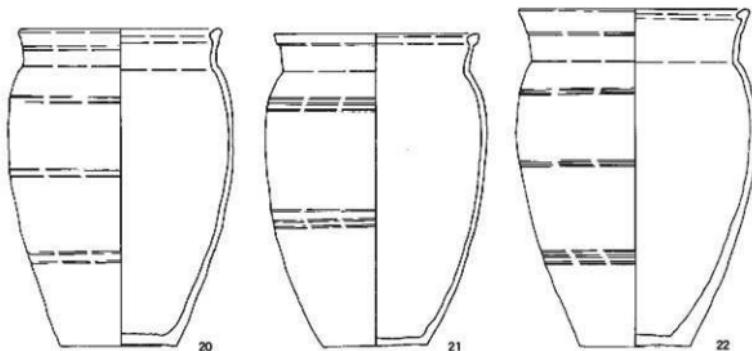
錢は出土遺構毎に一部を掲載している。SK19 以外はほぼ棺内からの出土である。錢種と数量については表III-5 に掲載している。渡来錢も少量含まれるが、判読できたものでは新寛永が多い。SK19 埋土上層から渡来錢を含む錢が出土しており、良好な遺存状態の天保通寶も 2 枚含まれる。SK101 から良好な状態の新寛永のいわゆる文錢が出土している。SK87 からは錆着した錢が大量に出土しており（総量約 530 g）、錆着することから鉄錢も含まれている。連なった状態であるため、束ねられていたのであろう。57 は SK87 出土品で鉄錢の仙台通寶と思われる。錆着しており文字は判読できないが、方形の外形から判断した。



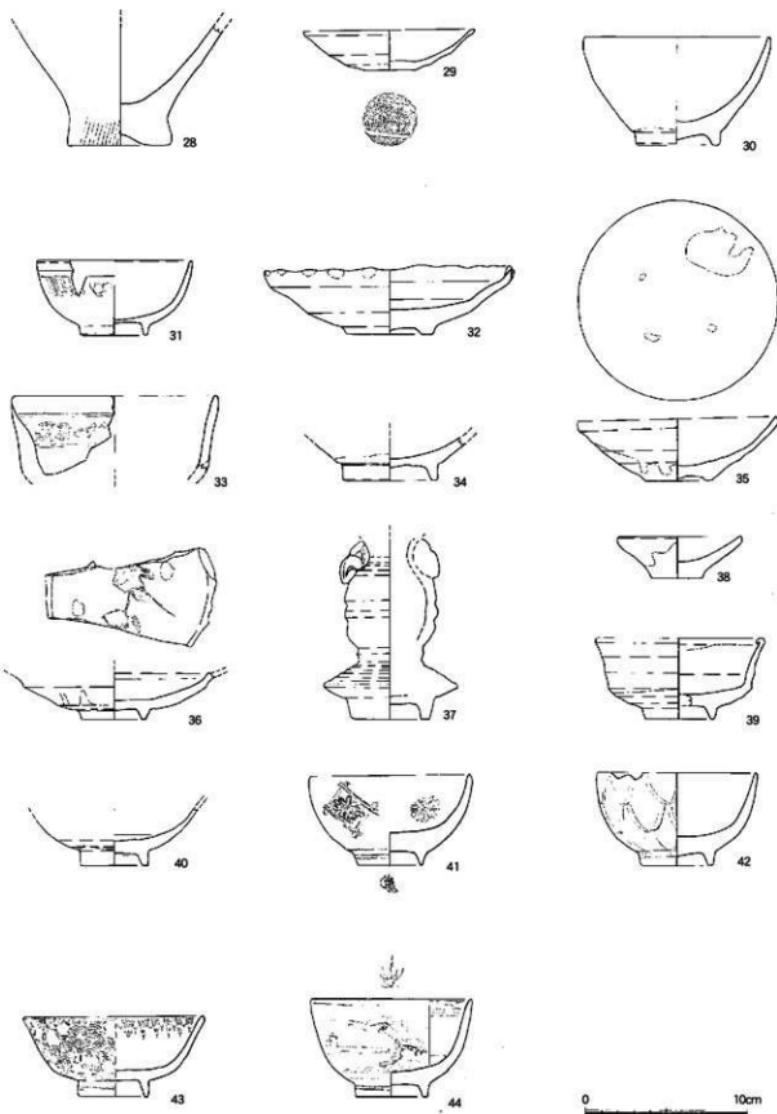
図III-8 仁田古墳群1区出土棺甕1 (1/12)



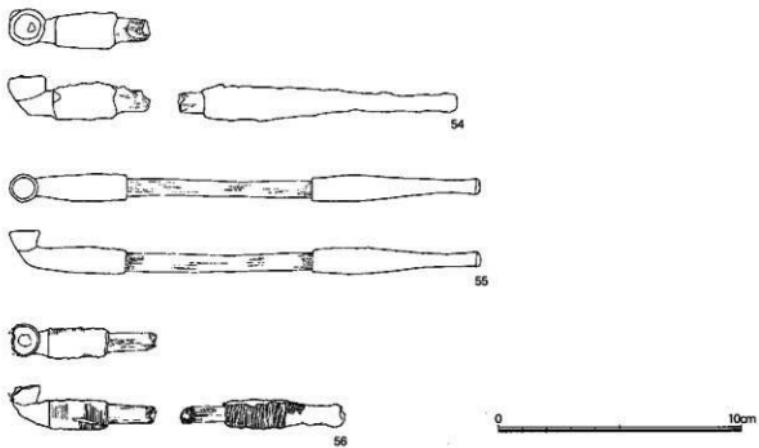
図III-9 仁田古墳群1区出土棺甕2(1/12)



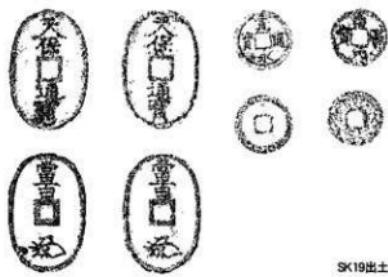
図III-10 仁田古墳群1区出土棺表3 (1/12)



図III-11 仁田古墳群1区出土土器・陶磁器 (1/3)



図III-12 仁田古墳群1区出土磁器・土製品・煙管(1/3、1/2)



SK19出土錢



SK24出土錢



SK29出土錢

SK47出土錢



SK101出土錢



SK87出土錢

57

0 5cm

圖III-13 仁田古墳群1区出土錢 (1/2)

表III-1 仁田古墳群1区土壤一覧表

遺構名	遺構の種類	出 土 遺 物	備 考	推定時期 (鏡から)
SK01	土塚墓	磁器片		
SK02	土塚墓	磁器皿,銅鏡,弥生土器,瓦器片?	磁器皿16C後半福建産か	
SK03	土塚墓	弥生土器		
SK04	土塚墓			
SK05	変棺墓	磁器(検出面)		
P06		鉄釘陶器		
SK07	変棺墓	土師皿,陶器皿,鉄製品,磁器	陶器皿1590~1620頃	
SK08	変棺墓	磁器		
SK09	変棺墓	銅鏡4	石蓋	1697~
SK10	土塚墓	土器片		
SK11	土塚墓	陶器片		
SK12	土塚墓	磁器片		
SK13	土塚墓	須恵器片		
SK14	土塚墓	陶器片		
SK15	土塚墓	銅鏡(10円)		
SK16	土塚墓	磁器片		
SK17	土塚墓	陶器		
SK18	土塚墓	磁器片		
SK19	変棺墓	銅鏡,磁器多	SK20.21はSK19の下部。変を割って寄せ集める。	1835~
SK20	変棺墓	銅鏡	SK20.21はSK19の下部	1863~
SK21	変棺墓		SK20.21はSK19の下部	
SK22	変棺墓	煙管,銅鏡		1697~
SK23	土塚墓	陶器,磁器		
SK24	変棺墓	磁器,煙管,銅鏡		1863~
SK25	土塚墓	タバコ入,煙管入,土師皿片,陶器片		
SK26	土塚墓			
SK27	土塚墓	煙管		
SK28	変棺墓	銅鏡,磁器(周辺)		1697~
SK29	変棺墓	銅鏡		1697~
SK30	変棺墓	銅鏡,磁器片,ピン		
SK31	変棺墓	銅鏡,磁器(紅皿,猪口)		1726~
SK32	土塚墓			
SK33	変棺墓	磁器,陶器(周辺)		

遺構名	遺構の種類	出 土 遺 物	備 考	推定時期 (鉄から)
SK34	妻柏墓	銅錢,磁器,陶器		明治以降~
SK35	土塚墓			
SK36	妻柏墓	銅錢		1867~
SK37	妻柏墓			
SK38	妻柏墓	青生土器片,磁器	磁器片	
SK39	妻柏墓			
SK40	妻柏墓	ボタン		
SK41	妻柏墓	紅皿	紅皿(棺内出土)1820~1860	
SK42	妻柏墓	磁器鉄		
SK43	妻柏墓			
SK44	妻柏墓			
SK45	妻柏墓			
SK46	妻柏墓	煙管,銅錢,磁器		1884~
SK47	妻柏墓	銅錢		1697~
SK48	妻柏墓	銅錢	壺18~19Cのあまり見られない器形	1697~
SK49	妻柏墓			
SK50	妻柏墓	ボタン,ビン,磁器(猪口)		
SK51	妻柏墓			
SK52	妻柏墓	陶器	麻骨器	
SK53	妻柏墓	磁器		
SK54	妻柏墓	煙管		
SK55	妻柏墓	ボタン	こね鉢	
SK56	妻柏墓	磁器(周辺)		
SK57	妻柏墓	入歯	モルタル?付着	
SK58	妻柏墓	銅錢		1697~
SK59	妻柏墓	鉄釘		
SK60	妻柏墓			
SK61	妻柏墓	磁器		
SK62	妻柏墓	煙管,銅錢		1697~
SK63	妻柏墓	青生(周辺),磁器(周辺)		
SK64	妻柏墓	モルタル?		
SK65	妻柏墓	煙管,銅錢,紙製品	墓壙内に2つ蓋石があり、その下から人骨出土	1697~
SK66	妻柏墓	ビン,ボタン?		
SK67	妻柏墓	磁器,入歯,モルタル?		

遺構名	遺構の種類	出 土 遺 物	備 考	推定時期 (既から)
SK68	妻棺墓	煙管,銅鏡		
SK69	妻棺墓			
SK70	妻棺墓	碁石		
SK71	妻棺墓	銅鏡,不明金具		
SK72	妻棺墓	銅鏡		
SK73	妻棺墓	銅鏡,煙管		
SK74	妻棺墓			
SK75	妻棺墓	磁器(施利)		
SK76	妻棺墓			
SK77	妻棺墓			
SK78	妻棺墓	磁器(施利)		
SK79	妻棺墓	ピン		
SK80	妻棺墓			
SK81	妻棺墓			
SK82	土壤墓	土器(蔵骨器)		1697~
SK83	妻棺墓	磁器		
SK84	妻棺墓	銅鏡(多數)		1697~
SK85	妻棺墓	陶器,磁器(周辺),銅鏡		
SK86	妻棺墓	木製櫛,煙管,磁器(猪口)		
SK87	妻棺墓	磁器(周辺),紅皿(棺内),銅鏡(多)	紅皿1820~1860	1787~
SK88	妻棺墓	銅鏡		
SK89	妻棺墓	磁器	側方出土磁器(繩文立)18C後半	
SK90	妻棺墓	煙管		
SK91	妻棺墓			
SK92	妻棺墓			
SK93	妻棺墓	煙管		
SK94	妻棺墓	煙管,磁器碗		
SK95	妻棺墓	煙管,銅鏡		1697~
SK96	妻棺墓			
SK97	妻棺墓	銅鏡,煙管		1697~
SK98	妻棺墓	銅鏡,磁器(上層)		
SK99	妻棺墓	銅鏡		1697~
SK100	妻棺墓	磁器		
SK101	妻棺墓	玉,銅鏡,人形(周辺),櫛,ピン		1668~

遺構名	遺構の種類	出 土 遺 物	備 考	推定時期 (既から)
SK102	斐柏墓			
SK103	斐柏墓	煙管		
SK104	土壤墓	弥生土器片		
SK105	土壤墓	弥生土器片		
SK106	土壤墓	弥生土器片,磁器片		
SK107	土壤墓	弥生土器片		
SK108	土壤墓	磁器片		
SK109	土壤墓	すり鉢片,磁器	磁器碗17C中頃	
SK110	土壤墓	すり鉢,磁器,弥生土器片		
SK111	土壤墓	磁器碗		
SK112	土壤墓	弥生土器片,磁器片		1697~
SK113	土壤墓	磁器片		1697~
SK114	斐柏墓	銅錢(多)		1697~
SK115	斐柏墓	銅錢,釘釘		1697~
SK116	斐柏墓	錢		
SK117	斐柏墓	煙管,錢		
SK118	斐柏墓	銅錢,煙管		
SK119	斐柏墓	銅錢,煙管		
SK120	斐柏墓	磁器(猪口)	SK21の下から検出	
SK121	斐柏墓	磁器碗(埋土中),銅錢	SK21の下から検出	
SK122	斐柏墓	釘釘,磁器		
SK123	斐柏墓			
SK124	斐柏墓			
SK125	斐柏墓			1697~
SK126	斐柏墓	陶器,煙管,銅錢(多)	陶器皿1590~1610	
SK127	斐柏墓	銅錢		
SK128	土壤墓	陶器,釘釘品,玉,錢		
SK129	土壤墓	磁器片		
SK130	土壤墓	磁器片		
SK131	土壤墓	土師器皿,銅錢		

表III-2 仁田古墳群1区棺壙計測表

1a類

No.	計測 (cm)									部位毎の比率			
	口径	器高	底径	肩部高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	肩部高/器高	口縁部高	頸部径/口径	最大径高/高さ
SK07	54	76	29	65	61	53	46	3	3.7	0.855	0.145	0.981	0.605
SK08	56	78	29	64	58	52	46	2.7	4.2	0.821	0.179	0.929	0.590
SK20	53	77	29	67	62	54	48	2	3.7	0.870	0.130	1.019	0.623
SK21	52	75	28	64	62	54	45	2.3	3.5	0.853	0.147	1.038	0.600
SK22	53	76	28	67	61	51	42	2	3.7	0.882	0.118	0.962	0.553
SK24	53	79	29	68	62	52	44	3.6	4	0.861	0.139	0.981	0.557
SK28			28										
SK30	55	81	29	67	64	58	54	2.6	4.1	0.827	0.173	1.055	0.667
SK33	53	80	28	69	60	52	46	2.6	4.2	0.863	0.138	0.981	0.575
SK34	56	77	29	64	63	57	43	2.6	4.2	0.831	0.169	1.018	0.558
SK39	50	80	27	66	59	53	53	2.5	3.4	0.825	0.175	1.060	0.663
SK40	53	82	31	68	63	55	52	2.6	3.7	0.829	0.171	1.038	0.634
SK43	52	77	30	66	62	52	42	2.3	4.2	0.857	0.143	1.000	0.545
SK44	51	78	29	67	60	52	43	2.7	4.6	0.859	0.141	1.020	0.551
SK46	57	79	30	67	64	56	45	2.5	4	0.848	0.152	0.982	0.570
SK49	58	80	30	66	65	55	44	2.3	4.2	0.825	0.175	0.948	0.550
SK50	56	79	27	66	60	54	51	2.5	4.7	0.835	0.165	0.964	0.646
SK51	51	83	29	69	59	51	50	2.5	3.2	0.831	0.169	1.000	0.602
SK54	51	78	27	65	58	50	47	2.7	3.9	0.833	0.167	0.980	0.603
SK57	57	82	28	71	66	58	52	3.3	4	0.866	0.134	1.018	0.634
SK58	51	76	29	65	62	52	45	2.2	3.8	0.855	0.145	1.020	0.592
SK60		76	29					2.5	3.6				
SK63	54	80	29	68	61	53	51	2.1	3.3	0.850	0.150	0.981	0.638
SK64	55	81	28	67	61	57	54	2.4	4.1	0.827	0.173	1.036	0.667
SK67	55	82	28	71	66	58	49	2.6	3.9	0.866	0.134	1.055	0.598
SK68	53	81	26	71	60	52	51	2.1	3.2	0.877	0.123	0.981	0.630
SK71		75	30					3	4.3				
SK72		77	26					2.4	3.5				
SK77	53	80	29	68	63	53	51	2.5	4	0.850	0.150	1.000	0.638
SK78	54	75	30	66	62	54	45	2.3	4.1	0.880	0.120	1.000	0.600
SK80	55	79	30	65	63	53	46	2.4	4.6	0.823	0.177	0.964	0.582

No.	計測 (cm)									部位毎の比率			
	口径	器高	底径	胴部高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	胴部高/器高	口縁部高	頸部径/口径	最大径高/高さ
SK81	58	83	30	71	68	58	51	3	4.2	0.855	0.145	1.000	0.614
SK83	54	81	29	71	62	54	43	2.8	4	0.877	0.123	1.000	0.531
SK84	53	80	30	67	62	54	47	2.7	4.2	0.838	0.163	1.019	0.588
SK86	54	80	30	68	64	56	48	2.7	4	0.850	0.150	1.037	0.600
SK87	49	79	29	68	57	51	53	2.6	3.3	0.861	0.139	1.041	0.671
SK88		75	31					2.8	4.6				
SK90	56	83	28	69	61	53	48	2.9	3.2	0.831	0.169	0.946	0.578
SK95	60	77	31	65	65	59	49	3	4.1	0.844	0.156	0.983	0.636
SK97	56	81	26	69	63	57	56	2.4	2.9	0.852	0.148	1.018	0.691
SK99	57	82	30	72	65	59	53	2.4	5	0.878	0.122	1.035	0.646
SK100	56	79	33	69	66	56	46	2.6	4.1	0.873	0.127	1.000	0.582
SK101	55	80	26	67	64	56	44	2.9	4.1	0.838	0.163	1.018	0.550
SK116	55	76	28	66	62	52	44	2.1	4	0.868	0.132	0.945	0.579
SK117		76	30					2.4	4.4				
SK118	48	81	29	71	59	45	46	2.4	3.7	0.877	0.123	0.938	0.568
SK119	53	77	27	65	57	51	49	2.5	3.4	0.844	0.156	0.962	0.636
SK120		79	30					2.8	4.2				
SK121	51	80	27	69	58	50	50	2.4	2.9	0.863	0.138	0.980	0.625
SK122	54	80	27	71	62	54	61	2.6	3.3	0.888	0.113	1.000	0.763
SK126	57	81	30	68	63	55	52	3	4	0.840	0.160	0.965	0.642
SK127	51	81	30	68	59	51	45	2.7	4	0.840	0.160	1.000	0.556

1b類

No.	計測 (cm)									部位毎の比率	
	口径	底径	胴部高	器高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	胴部高/器高	頸部径/口径
SK47	52	28	62	74	59	53	50	2	3	0.838	1.019
SK65		27		75				2.3	3.1	0.000	
SK69	53	26	67	77	58	52	48	2.3	3.3	0.870	0.981
SK92	57	26	59	70	61	57	45	2.1	2.9	0.843	1.000
SK94	50	26	65	75	55	49	50	2.2	3.1	0.867	0.980
SK96	56	26	59	70	61	57	49	2.1	3	0.843	1.018
SK102	55	26	70	80	60	52	52	2.3	3.2	0.875	0.945

No	計測 (cm)									部位毎の比率	
	口径	底径	胴部高	器高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	胴部高/器高	頸部径/口径
SK103	52	28	62	73	55	49	45	2.2	3.6	0.849	0.942
SK114	52	28	65	75	60	52	49	2.4	3	0.867	1.000
SK115	52	26	62	75	58	52	50	2	3.9	0.827	1.000

2類

No	計測 (cm)									部位毎の比率	
	口径	底径	胴部高	器高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	胴部高/器高	頸部径/口径
SK74	54	25	75	85	60	56	57	2.8	3.2	0.882	1.04
SK85	51	27	68	80	55	49	53	2.8	3.3	0.850	0.961
SK89	50	25	67	76	54	51	51	2.8	3.4	0.882	1.02
SK98	54	26	73	85	61	53	55	3	4	0.859	0.981

3類

No	計測 (cm)									部位毎の比率		
	口径	器高	底径	胴部高	最大径	頸部径	最大径高	口唇部厚	口唇部長	胴部高/器高	口唇部高/底径	頸部径/口径
SK42	54	71	28	60	58	52	43	2.3	3.5	0.845	0.155	0.963 0.817
SK05	35	44	20	40	39	35	35			0.909	0.091	1.000
SK41	39	62	25	54	45	39	41	2	3	0.871	0.129	1.000
SK47?	45	70	26	60	52	46	44	2.5	3.7	0.857	0.143	1.022 0.743
SK55	35	53	21	45	41	35	33	1.5	2.7	0.849	0.151	1.000
SK56	44	67	26	57	52	44	42	2.2	4.1	0.851	0.149	1.000
SK59	50	72	26	61	60	50	44	2.7	3.8	0.847	0.153	1.000 0.833
SK62		43	18					1.7	2.3			
SK70	42	50	23	41	48	42	30	2	3.6	0.820	0.180	1.000
SK73	57	73	28	63	62	56	50	2.2	3.5	0.863	0.137	0.982 0.849
SK75	36	53	22	44	44	40	30	2	3.4	0.830	0.170	1.111
SK76		55	24					1.3	3			
SK79	55	72	29	59	58	52	41	2.5	4	0.819	0.181	0.945 0.806
SK91	53	70	30	60	57	47	44	2.6	3.8	0.857	0.143	0.887 0.814
SK93	49	71	28	61	55	47	45	2.5	4	0.859	0.141	0.959 0.775

表III-3 仁田古墳群1区出土遺物一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 輪(外面) 胎土(内面)	調整		備 考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内器面	
Ⅲ-8-1	06002772	SK07	鉢	15.9	52.25 23.3	黄灰色 浅黄色	回転ナデ	回転ナデ	
* -2	06002751	SK07	棺蓋	75.1	53.6 27.4	暗褐色 灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	
* -3	06000185	SK05	棺蓋	42.6	34.6 19.6	赤色 にぶい黄褐色	施輪	施輪	
* -4	06002771 SK38	SK19	鉢(転用)	12.9	35.5 17.5	白色 灰黃褐色	施輪 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -5	06002775	SK19	棺蓋	(41.45)	(28.2) (20.5)	灰黃褐色 橙色	回転ナデ	回転ナデ	
* -6	06002774	SK19	甕	37.0	38.0 18.3	にぶい褐色 灰白色	施輪	施輪	
* -7	06002761	SK19	棺蓋	34.4	30.0 17.7	にぶい橙色 橙色	ナデ	ナデ	
* -8	06002760	SK22	棺蓋	76.45	53.05 26.7	にぶい赤褐色	タタキ ケズリ	タタキ 回転ナデ	墨書
* -9	06002753	SK41	棺蓋	60.3	39.5 24.2	にぶい赤褐色 赤橙色	タタキ ナデ	タタキ ナデ	
* -10	06000187	SK47	棺蓋	72.6	48.6 27.2	黒褐色 橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	
* -11	06000184	SK48	棺蓋	31.3	29.6 17.0	黒褐色 にぶい黄褐色	施輪	施輪	
* -12	06002770	SK55	鉢(転用)	17.0	38.3 17.7	褐色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -13	06002755	SK55	棺蓋	51.3	35.5 20.8	にぶい褐色 赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	
Ⅲ-9-14	06000191	SK57	棺蓋	80.7	55.3 27.9	黒褐色 明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	
* -15	06002744	SK64	棺蓋	78.2	55.0 27.5	にぶい褐色 灰白色	施輪	ナデ	
* -16	06002743	SK65	棺蓋	72.9	56.6 27.2	にぶい橙色 赤褐色	ナデ	ナデ 施輪	
* -17	06002738	SK68	棺蓋	79.6	53.5 25.5	褐灰色 灰褐色	施輪	ナデ タタキ	墨書
* -18	06002768	SK74	棺蓋	84.85	54.0 25.4	褐灰色 にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ タタキ	
* -19	06000188	SK85	棺蓋	78.6	51.0 25.8	暗褐色 浅黄褐色	施輪	ナデ	
Ⅲ-10-20	06000190	SK87	棺蓋	77.1	49.5 28.0	褐灰色	施輪	ナデ	
* -21	06002769	SK89	棺蓋	76.2	50.0 25.0	にぶい黄褐色 赤褐色	タタキ ナデ	タタキ ナデ	
* -22	06000194	SK90	棺蓋	82.1	66.3 26.8	にぶい黄褐色 赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	
* -23	06000189	SK92	棺蓋	69.9	56.4 29.95	明赤褐色 灰色	回転ナデ	ナデ タタキ	
* -24	06002752	SK94	棺蓋	74.0	50.5 26.8	灰褐色 褐灰色	ナデ	ナデ	
* -25	06002750	SK98	棺蓋	83.8	53.5 25.5	灰褐色 灰白色	タタキ ナデ	タタキ ナデ	
* -26	06002742	SK99	棺蓋	81.2	56.0 29.5	にぶい黄褐色 浅黄褐色	ナデ	ナデ	
* -27	06002740	SK122	棺蓋	79.1	54.5 26.5	暗赤褐色 浅黄褐色	施輪	ナデ	
Ⅲ-11-28	08002024	9トレンチ	弥生土器甕	(7.5)	6.4 10.4 3.3	にぶい黄褐色 浅黄褐色	ハケ ナデ		
* -29	08002026	SK07No.2	土器甕	2.5	11.5 5.2	浅黄色 灰黄色	回転ナデ ナデ		
* -30	08002023	SK23	陶器椀	6.6	(9.5) (4.2)	浅黄色 灰白色	施輪	施輪	
* -31	08002027	SK24	陶器椀	4.6	15.2 5.4	灰オーラー色 にぶい橙色	施輪	施輪	
* -32	08002029	SK07	陶器甕	4.2	12.3 4.1	橙色 灰色	露胎	施輪	
* -33	08001993	SK83	陶器椀?	(4.7)	(12.6) (5.8)	にぶい橙色 にぶい橙色	露胎	露胎	
* -34	08002028	SK85	陶器甕	(2.6)	12.3 4.1	灰白色 橙色	施輪		
* -35	08002019	SK128	陶器甕	3.9	4.1	灰白色 橙色	施輪	施輪	
* -36	08002025	P06	陶器甕	(2.8)	3.9	オリーブ灰色 にぶい橙色	露胎	露胎	

押出番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調		調整		備考
				器高	口外径(底)径	釉(外面) 胎土(内面)	外器面	内裏面		
# -37	08001992	SK82N6	陶器瓶	(11.0)		オリーブ黒色 褐灰色				
# -38	08001994	SK17	陶器灯明皿	2.6	(7.6)	にぶい赤褐色	自然釉 回転ナデ	自然釉 回転ナデ		
# -39	08002022	P06	陶器皿	5.0	(10.3) 4.2	淡黄色 黄褐色	施釉	施釉		
# -40	08002021	SK85	白磁碗	(3.6)	4.1	灰オリーブ色 灰白色	施釉 露胎	施釉		
# -41	08001989	SK24	染付碗	5.5	(9.7) 3.8	灰白色	施釉	施釉		
# -42	08001987	SK87	染付碗	5.6	9.8 4.5	明青灰色 灰白色	施釉	施釉		
# -43	08001990	SK19	染付碗	4.9	11.0 4.1	灰白色	施釉	施釉	蛇の目剥ぎ	
# -44	08001988	SK61	染付碗	6.0	9.9 4.4	灰白色	施釉	施釉		
III-12-45	08002020	SK02	染付皿	5.7	11.2 2.7	灰白色 浅黃橙色	施釉 露胎	施釉 露胎		
# -46	08001991	SK19	染付瓶	15.5	2.7 4.4	白色				
# -47	08001995	SK07	白磁小杯	3.0	6.7 2.7	白色			釉はざ	
# -48	08001999	SK41	白磁紅皿	2.0	6.3	灰白色				
# -49	08002000	SK61	白磁紅皿	1.8	5.8	白色 灰白色				
# -50	08001996	SK87	白磁紅皿	1.9	6.2	白色				
# -51	08001997	SK87	白磁紅皿	1.9	6.0	白色				
# -52	08001998	SK87	白磁紅皿	2.0	6.3	灰白色				
# -53	08002030	SK29	土製品人形	16.1		にぶい黄橙色			一部着色のこる	

表III-4 仁田古墳群1区出土煙管・銭一覧表

押出番号	登録番号	出土地点	種別	法量	備考
III-12-54	08003755	SK119	煙管	直管：全長45mm、外径1.5mm、内径1mm、壁厚0.5mm接合部5mmラフ径10mm 吸口：全長103mmラフ径10mm	
# -55	08003756	SK25	煙管	直管：全長45mm、外径1.5mm、内径1mm、壁厚0.5mm接合部5mmラフ径8mm	
# -56	08003757	SK97	煙管	直管：全長125mm、外径1.5mm、内径1mm、壁厚0.5mm接合部5mmラフ径8mm 吸口：全長45mmラフ径7mm	
III-13-57	08003758	SK87	鉄錢	残存長2.2cm	仙台通寶

表III-5 仁田古墳群1区出土銭計測表

通綱No.	総数	渡	古	文	新	鉄	寛	他	不明	備考
TNI SK02	2								2	付着
# SK09	4				1		1		2	
# SK15	1							1		
# SK19	8	2	1		2		2	1	10円 渡=洪武1治元平寶1他=天保通寶2	
# SK20	3							1	2	文久付着
# SK22	3					2			1	付着
# SK24	6							1	5	文久2枚、4枚付着
# SK27周辺	4								4	付着
# SK28	6		2	2	2		2			
# SK29	6	2		1	1		1		2	
# SK31	6	1		4				1	マ頭通2	
# SK34	2						1		1	1銭?
# SK36	1						1		1	1銭小
# SK42.43雙方	1							1		
# SK46	8	1	1	2			4			他4=1銭大(明治7年、16年、17年)
# SK47	5				1		2		2	新=長、不明2=鉄?
# SK48	5		1		2		1		1	
# SK58	11				2			9	2枚、5枚付着	
# SK62	6		1		2		1		2	2枚、2枚付着
# SK65	5							5	付着	
# SK65(5分1200円T字5)	10	1	1		1	α		3	渡=洪武6付着	
# SK68	5or6							5or6	付着(ヒ通し)	

遺構No.	総数	渡	古	文	新	鉄	寛	他	不明	備考
TNI SK71	5以上					1			4以上	付着(鉄サビ)
# SK72	4以上								4以上	付着
# SK73	6								6	付着
# SK84	24		1		4		1		18	3枚、2枚、2枚、2枚、9枚付着
# SK85	4以上								4以上	付着
# SK87	50以上				1	1	1		多	鉄=仙台遺寶(大) 付着
# SK88	4						1		3	付着
# SK95	6		2		4					
# SK97	5				3				2	
# SK98	1								1	
# SK99	6		1		2		1		2	
# SK101	6			6						
# SK114	11				2				9	2枚付着
# SK115	6		1		4				1	
# SK116	6				2				4	4枚付着
# SK117	15				1		4		10	2枚、2枚、2枚付着
# SK119	6								6	5枚付着
# SK121	3								3	付着
# SK126	30以上								30以上	付着
# SK127	5				2				3	付着
# SK128	3以上								3以上	付着
# SK131	3								3	2枚付着
# 糜土中	5				2		1	2		總2=1錢
# 清掃時出土(E7)	1				1					
# F-7(小面の近く)	1				1					

表III-6 仁田古墳群1区出土煙管計測表

(単位:mm)

遺構No.	全長	火皿径	火皿高	接合部	縦字径	縦首	吸口		備考
TNI SK22	45	18	10	12	11	○			
# #	54以上				11	○			
# #	45以上				11	○			
# SK24	(63)	11	8	8	10	○			
# #	41				9	○			
# SK25	48	12	8	8	8	○		ケース付	
# #	69				9	○		ケース付	
# SK27	52	14	9	9	10	○			
# #	66				11	○			
# SK46	71				9	○			
# SK54	48	12	9	8	9	○			
# #	56以上				9	○			
# SK65	62				9	○			
# SK68	61				10	○		肩あり	
# SK73	48	15	8	11	8	○			
# #	56				9	○			
# SK85	28以上					○		不明	
# SK90	37以上	?	?	8	9	○			
# #	54				9	○			
# SK93	50以上	?	?	7	7	○			
# SK94	41	16	9	8	8	○			
# SK95	43				10	○		肩あり	
# SK97	42	13	8	8	9	○		肩部に条線あり	
# #	49				7	○		肩部に条線あり	
# SK103	64				9	○			
# SK117	48	15	9	9	9	○			
# SK119	44	15	9	8	10	○		肩あり	
# #	103				10	○			
# SK126	64以上	?	?	8	7	○			
# #	63以上				9	○			



1. 調査区全景 1 (上空から)



2. 調査区全景 2 (南から)



1. 調査区全景 3（西から、谷口古墳を望む）



2. 瓢柄墓群 1（上空から）



1. 遺跡遠景



2. 遺構検出状況



3. 土塚墓群 1 (南から)



1. 土塁墓群2（北西から）



2. 妻棺墓群2（北から）



3. 妻棺墓群3（北西から）



1. SK01 半裁状況（南から）



2. SK04 検出状況（西から）



3. SK131 遺物出土状況（西から）



4. SK07 遺物出土状況（東から）



5. SK19 検出状況（南から）



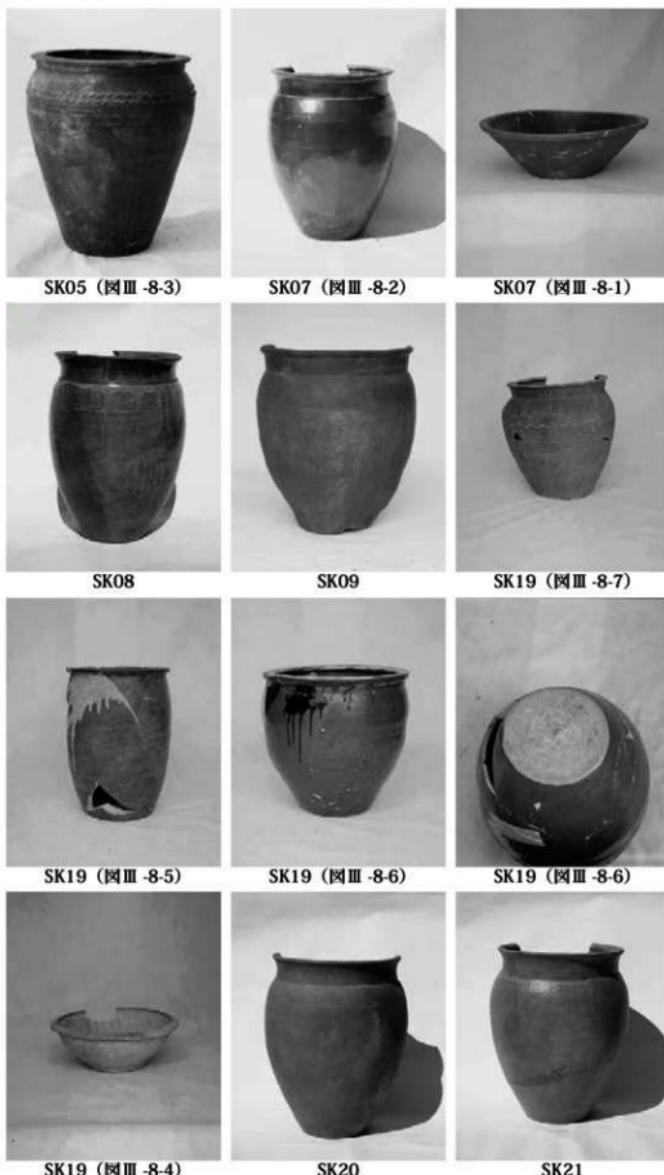
6. SK43 検出状況（西から）



7. SK83(上), 84(下) 検出状況（北から）



8. 調査区西壁土層（東から）



仁田古墳群 1 区出土棺甕 1



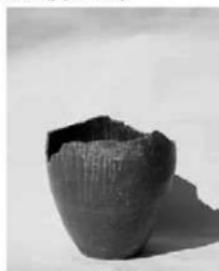
SK22 (図III-8-8)



SK22 (図III-8-8)



SK24



SK28



SK29



SK30



SK31



SK33



SK34



SK36



SK37



SK39

仁田古墳群 1 区出土棺甕 2



SK40



SK41 (図III -8-9)



SK42



SK43



SK44



SK45



SK46



SK47 (図III -8-10)



SK48 (図III -8-11)



SK49

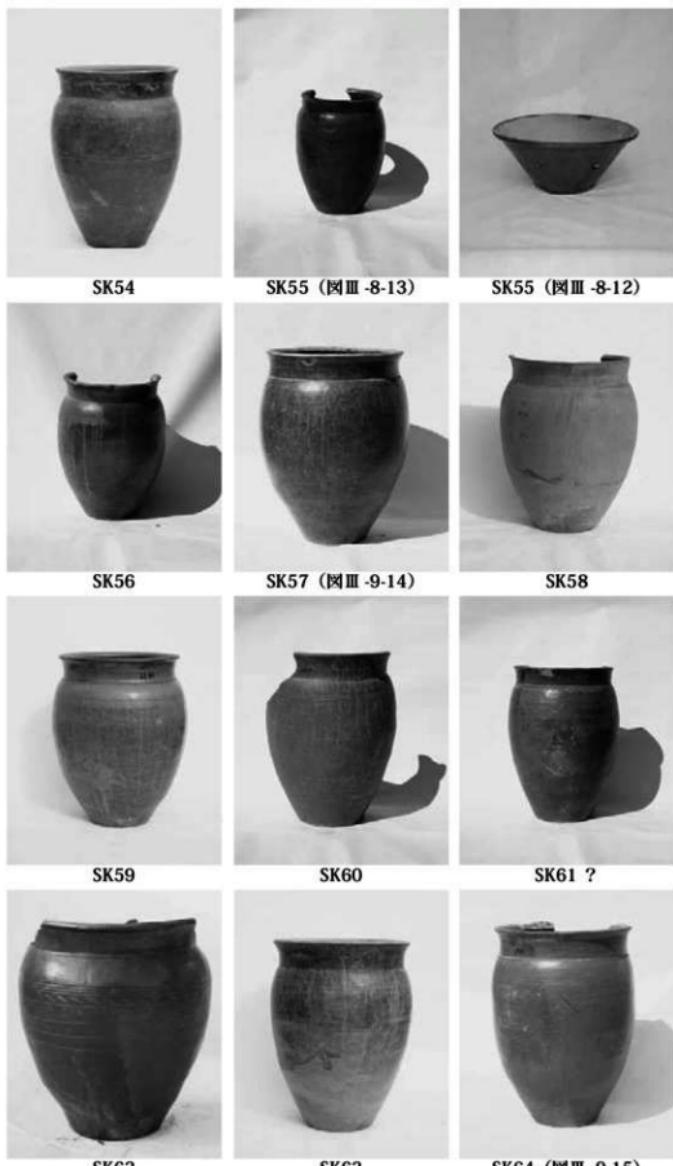


SK50



SK51

仁田古墳群 1 区出土棺甕 3



仁田古墳群 1 区出土棺甕 4



SK65 (図III -9-15)



SK66



SK67



SK68 (図III -9-17)



SK69



SK70



SK71



SK72



SK73



SK74 (図III -9-18)

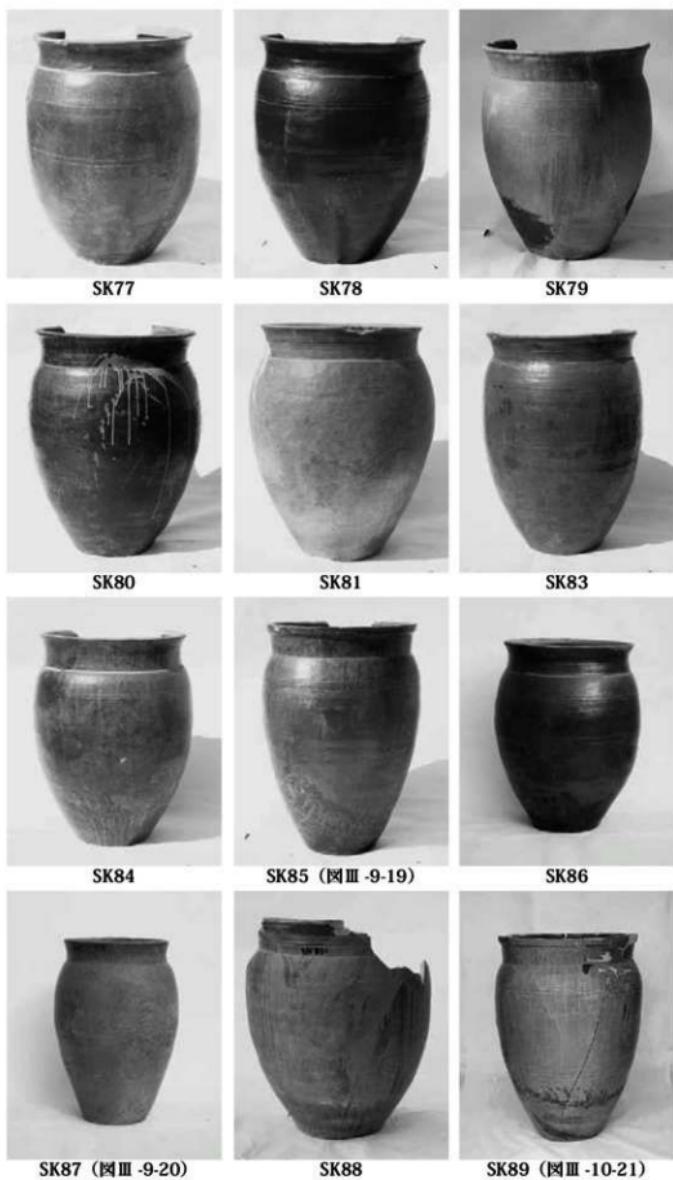


SK75

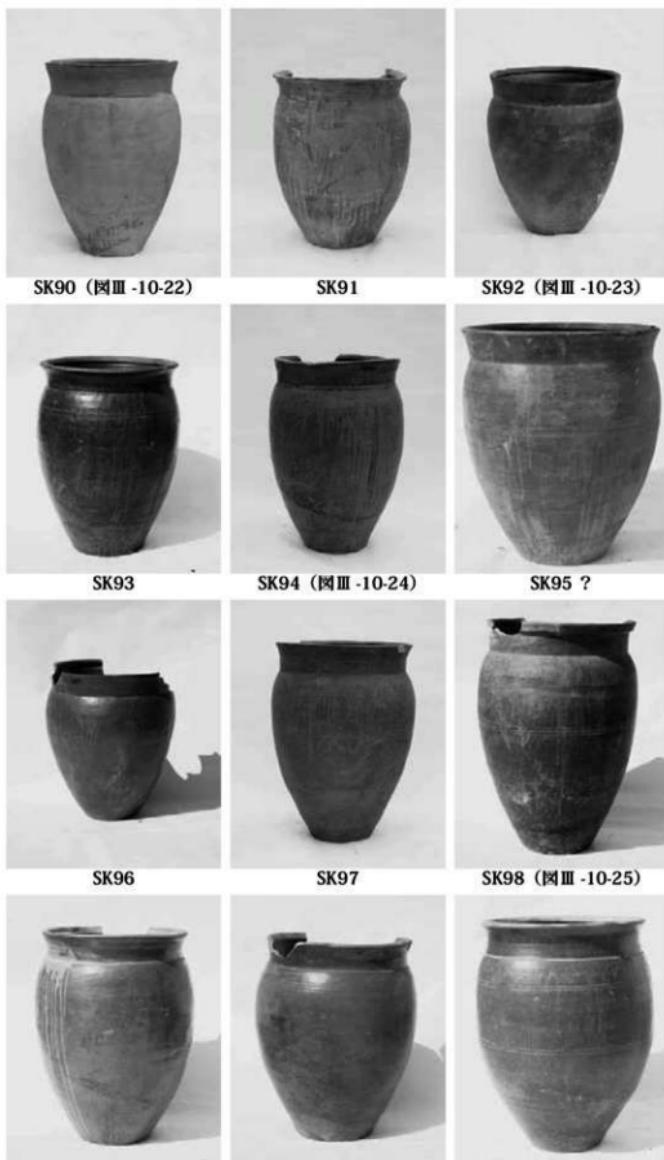


SK76

仁田古墳群 1 区出土棺甕 5



仁田古墳群 1 区出土棺甕 6



仁田古墳群 1 区出土棺甕 7



SK102



SK103



SK114



SK115



SK116



SK117



SK118



SK119



SK120



SK121



SK122 (図III-10-27)



SK122 (図III-10-27)

仁田古墳群 1 区出土棺甕 8



SK126



SK127



9 トレンチ (図III -11-28)



SK47 (図III -11-32)



SK128 (図III -11-35)



SK02 (図III -12-45)



陶器集合

仁田古墳群 1 区出土棺表 9、仁田古墳群 1 区出土遺物 1



磁器集合



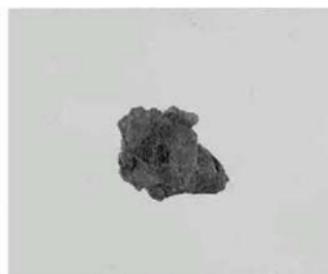
SK87 出土紅皿集合



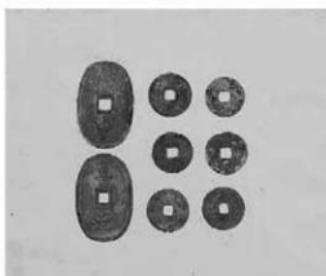
SK29 (図III -12-53)



煙管集合



SK87 出土仙台通寶 (図III -13-57)



SK19 出土錢集合



SK87 出土錢集合

仁田古墳群 1 区出土遺物 2

第IV章

仁田古墳群2区の調査

遺跡名：仁田古墳群2区（略号TN I -2）
所在地：佐賀県唐津市浜玉町谷口

仁田古墳群 2 区の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図IV-1)

地表面は非常に傾斜がきつく、当初遺跡が広がっていることは想定してなかったが、確認調査により遺構を確認したため調査を行なうことになった。表土剥ぎを行なうと、さらに傾斜は増し、調査に困難をきたす程であった。当調査区では明確ではなかったが、仁田古墳群 4 区を調査した際に、斜面を堆積土が覆う度に遺構面が更新されていることが分かった。2 区でも包含層として確認していた層に遺構面があったと思われるが、検出段階では確認できなかった。そのためであろうか、調査区内で見つかったピット群は堆積土が厚い谷部のもの程浅い傾向があった。検出面より上層から掘り込まれていたためであろう。遺物は古代のものが最も多く、当初は古代と中世に層が分かれると認識していたが、古代の層と考えていた層(3 ①②層)の下層から中世の遺物が出土したため、包含層はすべて中世以降に堆積した層であることが分かった。自然の埋積作用以外にも窪地を人工的に埋めている部分が多数あった。これらは褐色と灰褐色の粘質土(4 層)で縦状に埋められており、この粘質土に遺構(SK203)が掘り込まれた部分もあった。この粘質土は調査中から造成土として注目していたが、矢作遺跡 1、2 区でも同様の造成土が見つかっており、中世段階には小規模な地形の変更が頻繁に行なわれていたことが分かった。排土置き場の関係上調査区を半転して 2 回に分けて調査を行なったため、空撮も 2 回行なった。

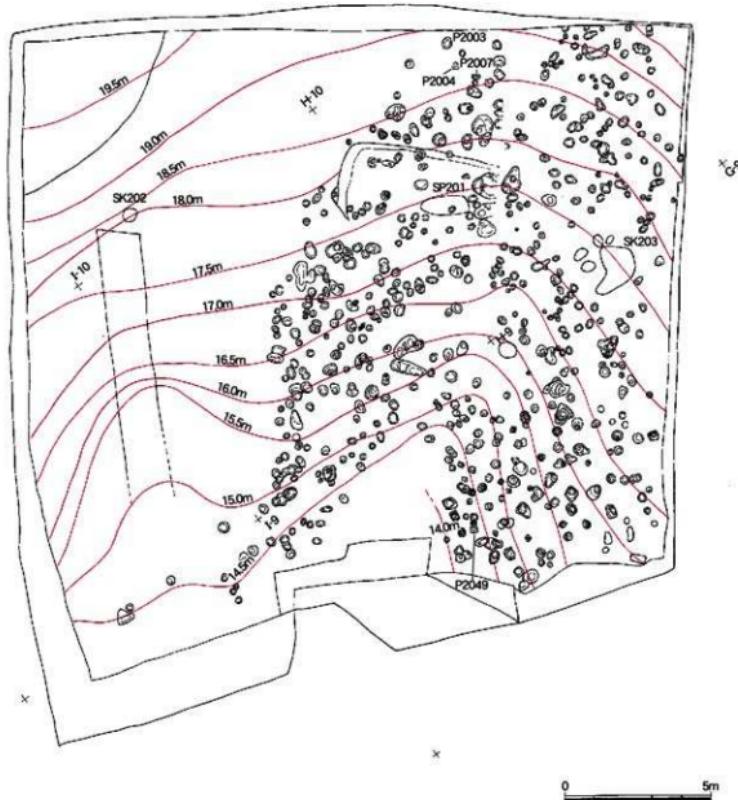
(2) 層序 (図IV-2)

前述のとおり地形の傾斜が厳しかったため、重機を入れて層序確認のための深掘りをすることができず、不安を残したまま調査を開始し、色調と遺物の出土状況から層序の決定を行なった。調査中は当初に決定した層序に基づいて調査を進めた。調査の終盤に重機を入れることができた。深掘りの結果、層序を 1 から 5 層に分層した。分層の基準は調査当初から変わっていないが、4 層が 3 層の下層に当たることが判明した。5 層の地山は北壁沿いの深掘りでは黒褐色を呈する部分もあり、3 層との識別が困難な状況であった。2 ~ 4 層が遺物包含層にあたる。3 層が最も多く遺物が出土した層であるが、褐色系と黒褐色系の砂粒を含む粘質土として認識される。境界がはっきりしない部分もあるため、色調の変化には土壤化の進み具合が関係しているのであろう。粘質土を覆う 2 層は砂質が強く土壤化が進んでいない。4 層は地山の土を用いて人為的に埋めた層であるため、平面的には地山と区別するのが困難な箇所が多くあった。

2. 遺構 (図IV-3)

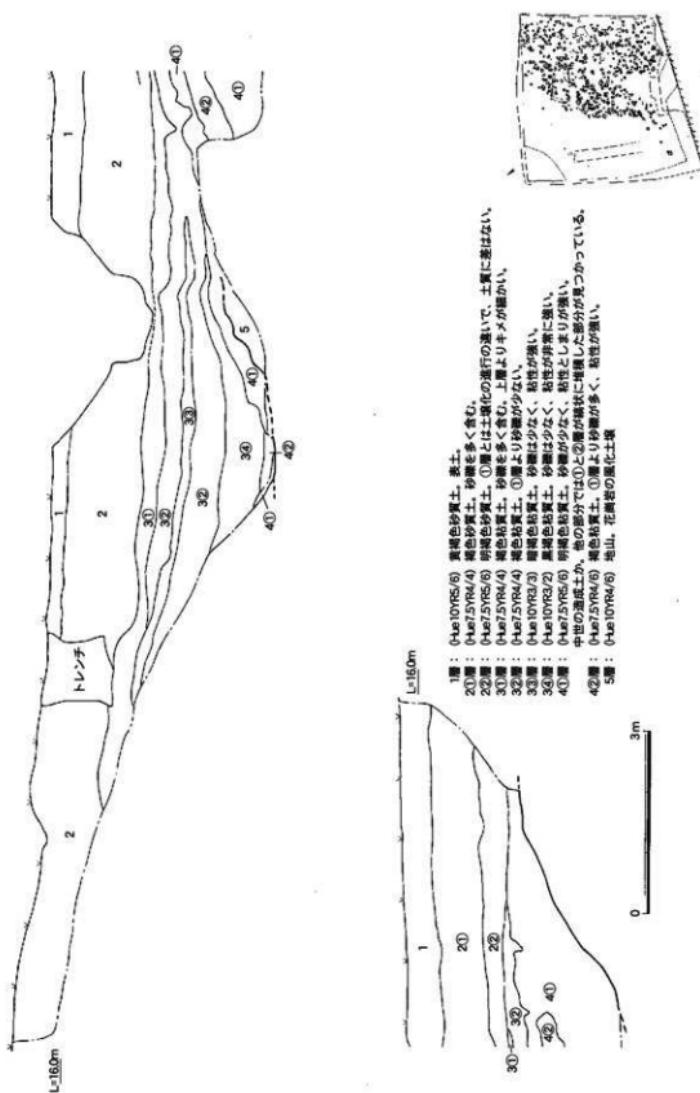
(1) SP201

規模は $3.35 \times 1.2m$ 。東側小口は直線的であるが、西側小口はいびつな形である。床面や土層にも木棺の痕跡がないことから土壤墓とした。床面からピットを 2 基確認したが、土壤墓に伴うものではなく、土壤墓を築く以前の遺構である。遺存状態が悪いため非常に浅く、検出段階で一部の遺物は既に見えている状況であった。土師器皿は深さがないため削平を免れているものもあったが、黒色土器は高さがある分割平を受けている。ただし遺構は包含層に覆われており、包含層の時期からみると削平を受けた時期も中近世であろう。埋土は褐色粘質土である。また土壤墓の北—西側の高所側に段状の遺構?が造成



図IV-1 仁田古墳群2区遺構配置図(3/500)

図IV-2 調査区南壁土質図 (1/80)



土を切って造られる。土壙墓の主軸とは揃っていないが、段状遺構？の底面は土壙墓の検出面とほぼ同一の高さまで下げられており、土壙墓に伴う造作と考えたいが、確証を得ることができなかった。

削平を受けているわりには遺物の量は多く、土師器、黒色土器、鉄製刀子、漆製品？が出土した。その他には骨？の白色の粒も確認したが漆製品？と同様に遺存状態が悪かったため取上げはできなかつた。遺物は3ヶ所に分れて出土した。東側からは破碎されて床面に集められた土師器杯と黒色土器椀、床面から数cm浮いた状態で漆製品？と鉄製刀子が出土した。中央部からは床面から若干浮いた状態で土師器皿が単体で出土した。西側の集中は土師器皿10点、黒色土器椀2点が方形？花弁形？に整然と並べられて出土した。床面からは若干浮いた状態であった。そのため①層中に床面がある可能性もあるが、土層からは判断できなかつた。

(2) SK202

個別図は掲載していないが、鍛治渾の塊が出土したため、鍛冶炉として調査を進めた。しかし粘土を貼った形跡もなく、掘り込みも見られないことから鍛治渾を投棄した遺構なのであろうか。丘陵の反対斜面の仁田古墳群4区では数回にわたり遺構面が更新され、古代～中世の鍛冶炉や炭窯が築かれているため、当調査区付近でも鍛冶炉が築かれていたのであろう。

(3) SK203

調査区南側で確認した不整形の土壙であり、埋土は暗褐色粘質土の単層であったが、底面が複数の土壤状に分かれているため、数回の掘り返しもしくは土壙に切り合いがある。遺構が掘られたのは地山面ではなく造成土上である。遺物が出土した付近の埋土上層からは炭化物が多く出土している。遺物は弥生土器であり、中世の造成土に掘られた遺構の時期とは異なる。

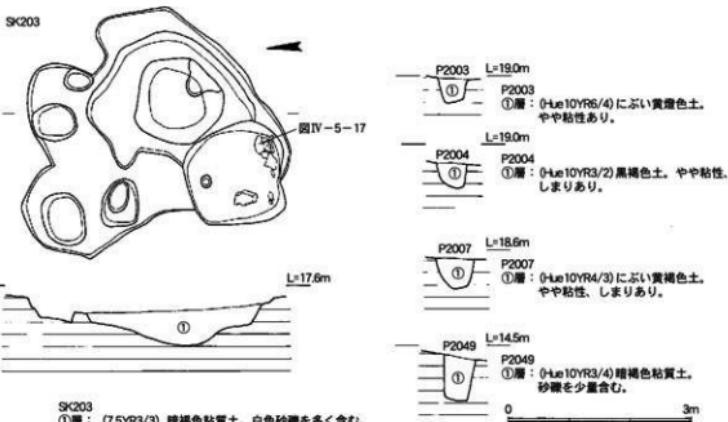
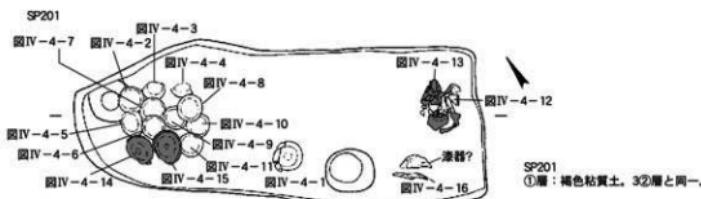
(4) ピット群

ピットは調査区東半の斜面に密集して見つかった。全体的に浅いものが多いが、前述のとおり谷部の斜面の下方で見つかったものは特に深い傾向がある。調査区西半では造成土で埋められ平坦面が造られ、遺物も出土するものの遺構はほとんど見つかっていない。東半とは層序が異なり包含層がほとんど広がっていないためであろうか。また調査区南端近くの斜面下方のピットには垂直方向のもの以外に斜面に対して直角方向に掘られたピットも多く見つかっている。このうちいくつかは方形に掘られており、円形のものとは時期差や機能差等の違いがあったのであろうか。このうちいくつかを図化している。ピットの機能については掘立柱建物跡の柱穴も考えたが、規則的に並んでおらず、鉛直方向を向かないピットもあることから、建物の柱穴とはならないと思われる。かといって、ピットの配置は散漫な感じではなく、数箇所にある程度集中する傾向が見られた。

3. 遺物

(1) SP201

底部糸切り離しの土師器皿と黒色土器が出土している。12と13は墓壙東側で破碎され、集められた状況で出土している。中央からは1が出土している。西側の集中からは2～11と14、15の黒色土器が並べられた状態で出土している。土師器皿は口径10cm前後、高さ1.7cm前後にほぼ揃っている。破碎された12は底部が厚く、底部内面から体部の立ち上がりが緩やかであり、口径も大きいようである。



図IV-3 SP201 (1/20)・SK203・P2003・P2004・P2007・P2049 (1/40)

13は前述のとおり破碎された状態で見つかっており、図上復原した。口径、高さ共に14、15より大きく、12の土師器皿と共に破碎されたものは大型品が選ばれていたことが分かる。14、15は口径、高さ共にほぼ揃っている。SP201が削平を受けていたため、黒色土器の口縁部が一部欠損する。高台は低く、体部は丸みを帯び、口縁部は外反しない。ミガキは丁寧に施す。16は鉄製刀子である。鋒に覆われており、一部に木質が遺存する。この他漆皮膜？と思われる残存物も発見されたが取上げできなかった。

(2) SK203

弥生土器壺の口縁部から肩部片が出土している。調整は磨耗のためはっきりせず、遺構に伴うものではなく埋土への流れ込みと思われる。

(3) ピット出土品

いずれも流れ込みであり、遺存状態が悪い。18はP2083出土。弥生土器壺小片。19はP2023出土。土師器杯小片。20、21はP2107出土。須恵器杯小片。高台は低い。

(4) 包含層出土品

上述のとおり、調査区の西側では包含層がなく、遺物は調査区東側の遺物包含層から多く出土した。調査区の西側では造成土中からの陶磁器の出土が見られた。丘陵の上部を覆う部分からは弥生土器が多く、低地部を覆う部分と調査区西側からは中世の陶磁器が出土している。古代の土器は包含層中から満遍なく出土している。22～25は弥生土器壺。逆L字状の口縁部であり、内面へ突出しない。25は口唇部外面に刻目を施す。26は弥生土器壺。27は土師器杯若しくは皿の底部片。28は須恵器杯蓋。つまみは扁平、口縁部は折り曲げによる。29は高台のない須恵器杯。30～34は須恵器高台付き杯。高台は方形で低い。体部は直線的に開く。『中原遺跡III』の分類(以下分類名は同じ)では28は杯蓋3A類、29は杯2アα類。30～32は杯2イβ類。

35は白磁碗。36～39は龍泉窯系青磁碗。1～8、9出土。連弁文をもつものは出土していない。

40～42は滑石製品。40は石鍋転用品と思われ、2カ所穿孔がある。41はバレン状石製品と呼ばれるものか？周囲の端部を薄く削り、図面上の左下端に穿孔する。右端には細い抉りが入る。43は石庖丁片。44は黒曜石製打製石鍬。

4. 小結

(1) ピット群について

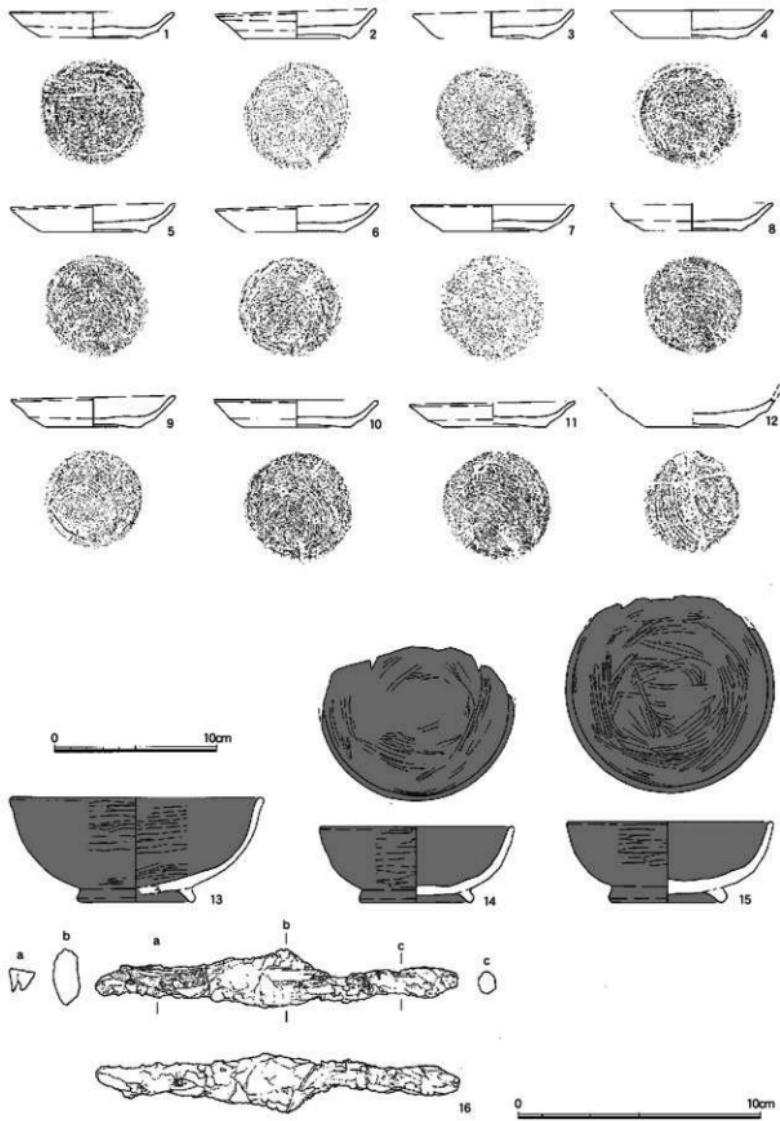
このピット群の機能に関しては、県社会教育・文化財課の宮武氏に中世墓に関連する遺構ではないかと教授いただいた。記して感謝したい。しかし、今回の報告では類例調査等について詰めることができなかった。今後の課題としたい。

(2) 土師器皿について

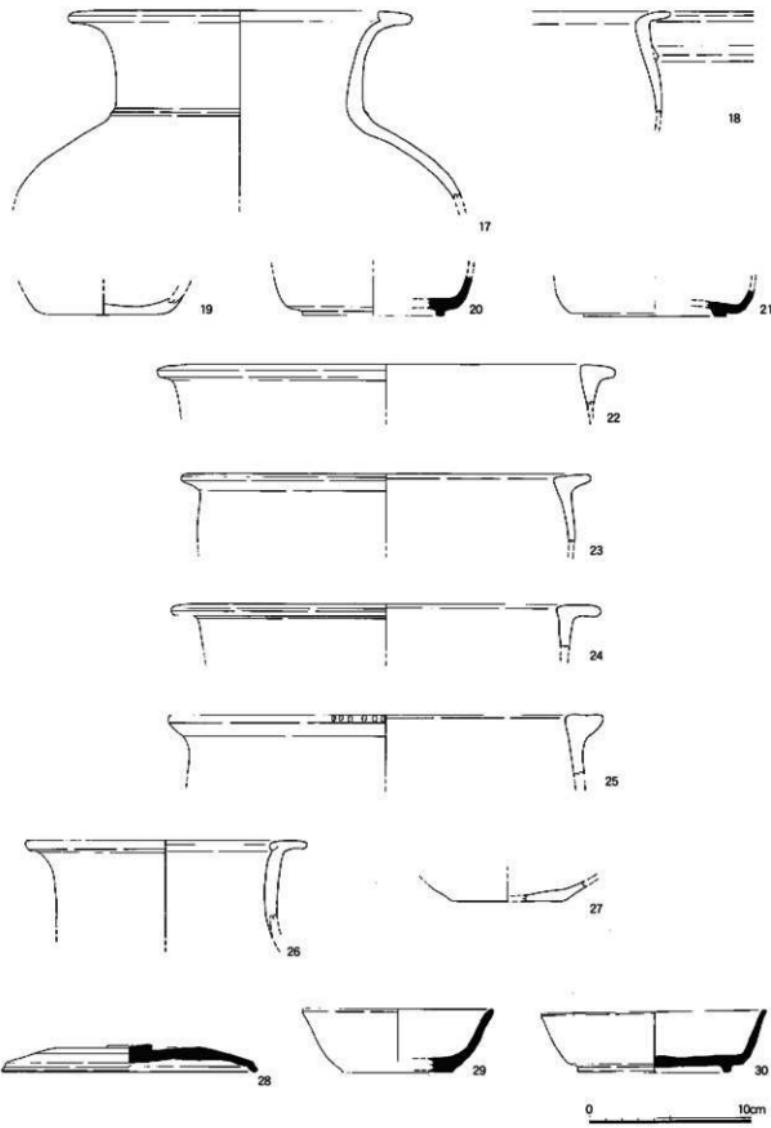
県社会教育・文化財課の徳永氏より、

「出土した土師器皿は底部が糸切り離しであり、黒色土器碗に伴って北部九州で出土する土師器皿は、回転ヘラ切り離しであるため、検討を要する。」

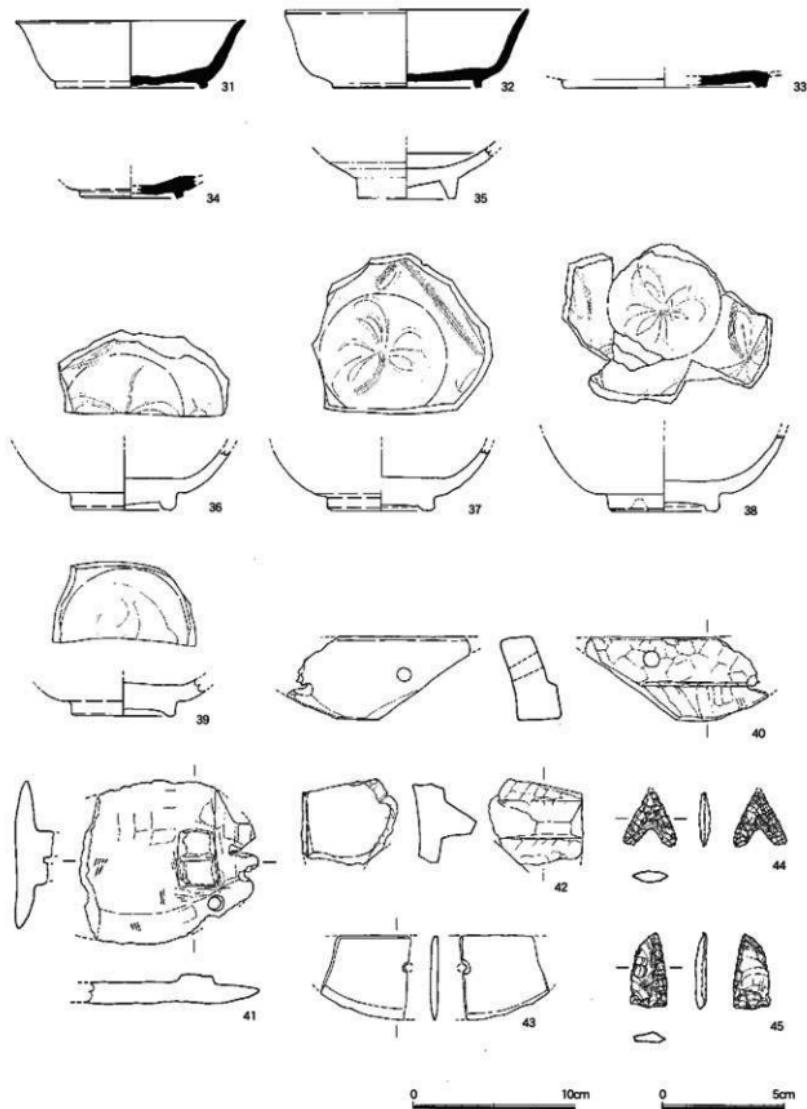
「同時期に糸切りの技術が広がっているのは北九州以東であるが、北九州市付近の土師器皿とも器形が異なるようであり、その他の地域からの搬入品、もしくは当地域での模倣品と考えられる。黒色土器



図IV-4 SP201 出土遺物 (1/3, 1/2)



図IV-5 その他の遺構出土遺物・包含層出土遺物 (1/3)



図IV-6 包含層出土土器・陶磁器・石製品（1/3）、石器（1/2）

からは 10 世紀後半～11 世紀。」

とのご教授をいただいた。記して感謝したい。

唐津地区では同時期の資料がほとんどないため、今後の資料の増加が待たれる。数少ない例で考えると、半田地区の岸高 II 遺跡で黒色土器と土師器杯が共存しているが、土師器杯の底部は回転ヘラ切り調整である。胎土については両遺跡の河川領域が異なるため、厳密な比較は出来ない。そのため、周辺調査区出土の古代～中世の土師器杯皿類と比較すると、SP201 出土土師器皿の方が、雲母片が若干少ないという違いがみられる。しかし、土器胎土に含まれる砂粒が少ないためこの検討結果には不安が残る。科学的な分析も必要であろう。また他地域の土器との比較検討も当然必要であるが、ピット群と同様に筆者の力量不足のために内容を詰めることができなかった。今後の課題としたい。

表IV-1 仁田古墳群2区出土土器一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 釉(外面) 胎土(内面)	調整		備考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内器面	
IV-4-1	08002058	SP201Na1	土師器皿	1.6	10.1 6.2	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
# -2	08002047	SP201Na6	土師器皿	1.8	9.9 6.5	橙色	回転ナデ	ナデ	
# -3	08002048	SP201Na7	土師器皿	1.7	9.9 6.2	橙色	ナデ	ナデ	
# -4	08002049	SP201Na8	土師器皿	1.7	(10.0) 5.8	浅黄橙色	回転ナデ	ナデ	
# -5	08002051	SP201Na9	土師器皿	1.7	10.0 6.3	黄橙色	回転ナデ	ナデ	
# -6	08002052	SP201Na10	土師器皿	1.7	10.0 6.0	橙色	回転ナデ	ナデ	
# -7	08002055	SP201Na11	土師器皿	1.6	10.0 6.3	橙色	回転ナデ	回転ナデ	
# -8	08002050	SP201Na12	土師器皿	1.65	9.9 6.0	浅黄橙色	回転ナデ	ナデ	
# -9	08002053	SP201Na13	土師器皿	1.9	10.0 5.8	にぶい黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ	ナデ	
# -10	08002054	SP201Na14	土師器皿	1.6	10.0 6.3	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
# -11	08002056	SP201Na15	土師器皿	1.5	10.1 6.3	浅黄橙色	回転ナデ	ナデ	
# -12	08002057	SP201Na3	土師器皿	(1.7)	5.8	橙色	回転ナデ	ナデ	
# -13	08002066	SP201Na2	黑色土器桿	6.4	(15.6) 7.2	黒褐色 黒色	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
# -14	08002065	SP201Na4	黑色土器桿	4.6	(12.0) 7.0	オリーブ黒色	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	
# -15	08002064	SP201Na5	黑色土器桿	4.9	12.7 7.2	黒色	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ	
IV-5-17	08002040	SK203南東	弥生土器壺	(11.5)	(21.0)	橙色 暗赤灰色			
# -18	08002046	P2083	弥生土器壺	(6.5)		にぶい橙色			
# -19	08002068	P2023	土師器杯	(1.3)	(7.6)	黄橙色			
# -20	08002038	P2107	須恵器杯	(2.5)	(8.6)	灰色	ナデ	ナデ	
# -21	08002039	P2107	須恵器杯	(1.6)	(8.7)	灰色	ナデ	ナデ	
# -22	08002043	3層	弥生土器壺	(2.8)	(28.0)	橙色	ナデ	ナデ	

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 釉(外面) 胎土(内面)	調整		備考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内裏面	
IV-5-23	08002041	3層	弥生土器甕	(4.2)	(25.0)	橙色		ナデ	
# -24	08002042	3層	弥生土器甕	(2.8)	(26.2)	橙色		ナデ	
# -25	08002044	下層	弥生土器甕	(3.8)	(26.6)	橙色	ナデ		
# -26	08002045	G-9 3層	弥生土器甕	(6.0)	17.2	橙色 褐灰色			
# -27	08002067		土器蓋?杯?	(1.2)	(6.8)	にぶい黄橙色			
# -28	08002032	HJ-8 3層上面	須恵器杯蓋	1.6	(15.6)	灰白色	ナデ 回転ナデ ヘラケズリ		
# -29	08002037	No.3	須恵器杯	3.9	(11.7) (6.8)	灰色	ナデ	ナデ	
# -30	08002035	I-8 H-8 3層	須恵器杯	3.8	(13.8) 9.5	灰白色	ナデ	ナデ	
IV-6-31	08002036	I-8 H-8 3層	須恵器杯	4.1	(14.0) 9.3	灰白色	ナデ	ナデ	
# -32	08002031	H-8 南4層	須恵器杯	4.8	(14.8) 9.2	灰白色	ナデ	ナデ	
# -33	08002033	G-9	須恵器杯	(1.0)	(12.4)	灰黄色	ナデ	ナデ	
# -34	08002034	G-9	須恵器杯	(1.3)	(6.4)	灰白色	ナデ	ナデ	
# -35	08002063	4層	白磁碗	(3.1)	6.0	灰白色	ヘラケズリ	施釉	
# -36	08002060	No.2	青磁碗	(3.7)	(6.4)	オリーブ灰色 灰白色	薄く施釉	薄く施釉	
# -37	08002059	I-8 6層	青磁碗	(3.8)	6.6	明緑灰色 灰白色	薄く施釉 施釉	薄く施釉	
IV-6-38	08002061	I-8 4層	青磁碗	(4.7)	6.8	オリーブ灰色 灰白色	薄く施釉 施釉	薄く施釉	
# -39	08002062	I-9	青磁碗	(2.3)	6.3	オリーブ黄色 灰白色	薄く施釉 施釉	薄く施釉	

表IV-2 仁田古墳群2区出土鉄製品・石製品一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)			備考	
				長さ	幅	厚さ		
IV-4-16	08003799	SP201 No.16	鉄製品刀子	14.89	2.4	1.1		
IV-6-40	08002069	耕土中	不明(石磨転用品)	5.1	11.1	2.1	滑石製	
# -41	08002074	I-8 6層	不明(石磨転用品)	10.0	10.8	2.3	滑石製	
# -42	08002070	I-8 黄褐色	不明(石磨転用品)	5.2	5.7	1.7	滑石製	
# -43	08002071	H-8 3層	石包丁	5.2	5.2	0.4		
# -44	08002072	H-9 3層	打製石盤	2.2	2.2	0.5	黒曜石	
# -45	08002073		石礫?	3.1	1.5	0.4	黒曜石	



1. 調査区全景 1 (反転前, 上空から)



2. 調査区全景 2 (反転前, 南から)



1. 調査区全景 3 (反転後, 上空から)



2. 調査区全景 4 (反転後, 西から)



1. 調査区全景 5（反転後、北から）



2. 調査区反転前完掘状況 1（南から）



1. 調査区反転前完掘状況 2 (南から)



2. 調査区反転前完掘状況 3 (東から)



3. 調査区反転後完掘状況 1 (西から)



1. 調査区反転後完掘状況 2 (北から)



2. SP201 全景 (南から)



3. SP201 土器集中部



1. SP201 漆器・土器検出状況（南から）



2. SP201 完掘状況（南から）



3. SK202（南から）



4. SK203 完掘状況（西から）



5. P2004 半掘状況（南から）



6. 調査区南壁東側（北から）



7. 調査区西壁（東から）



8. 調査区北壁（南から）



1. SP201 出土土器皿 (図IV -4-5)



2. SP201 出土土器皿 (図IV -4-2)



3. SP201 出土黑色土器 (図IV -4-5)



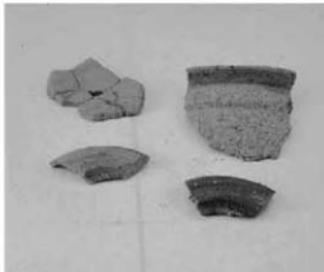
4. SP201 出土黑色土器 (図IV -4-14)



5. SP201 出土刀子 (図IV -4-16)



6. SK203 出土弥生土器 (図IV -5-17)



7. ピット出土土器集合



8. 包含層出土弥生土器集合

仁田古墳群 2 区出土遺物 1



1. 包含層出土土師器・須恵器集合



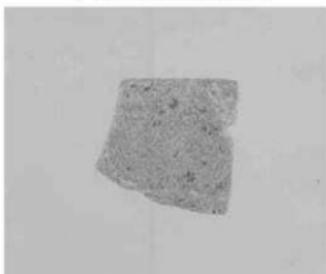
2. 包含層出土陶磁器集合



3. 包含層出土石製品集合



4. 包含層出土石製品 (図IV -6-91)



5. 包含層出土石庖丁 (図IV -6-43)



6. 包含層出土石鏃集合

仁田古墳群 2 区出土遺物 2

第V章

仁田古墳群3区の調査

遺跡名：仁田古墳群3区（略号TN I -3）
所在地：佐賀県唐津市浜玉町渕上

仁田古墳群3区の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図V-1)

矢作遺跡1区の道路を挟んで東側の丘陵斜面に広がる。谷部からは谷奥部から流れ込んだ遺物が比較的多く出土し、集落の広がりからみて、丘陵の上方が集落の本体部分であるのは確実であり、今回の調査区は集落の“ヘリ”部分にある。斜面は急であり、斜面の下方のものは遺構も浅いものが多く、調査区東側の高所側のピットは深いものが多い。調査区南端のSK307を確認した。SK307は他の遺構とは急斜面を隔てており、標高も高く、丘陵の鞍部に近い位置にある。

(2) 層序 (図V-2)

土層図は北壁の東端付近を掲載している。一部に確認調査のトレンチが入る。2層は調査区全体を覆っており、中世の陶磁器類が出土しているため、堆積時期も中世と思われる。3層との境界がほぼフラットであるため、中世段階に何らかの土地利用が行なわれたのであろう。3層は谷部を覆う層で、主要な遺物包含層である。丘陵部の落ちがけでは4層を覆っている。4層とした層は、褐色粘質土で炭化物を含み3層とは明らかに異なるが、平面検出では遺構を確認することはできなかった。しかしSK301と同質の土壤であることから、遺構の可能性を考えている。

2. 遺構 (図V-3)

(1) SK301・302

検出時では大きな遺構と認識していたが、掘削時にいくつかの遺構に分かれることが判明した。そのため当初の遺構内の北半の浅い掘り込みをSK301とし、南側に新たに見つかった深い掘り込みをSK302とした。SK301からは須恵器の杯が出土しており、この他の遺物も同時期のものが比較的多い。他の遺構からは明確な遺物が出土していないものの、同質の埋土のものは該期の遺構が多いのではないだろうか。

(2) SD304

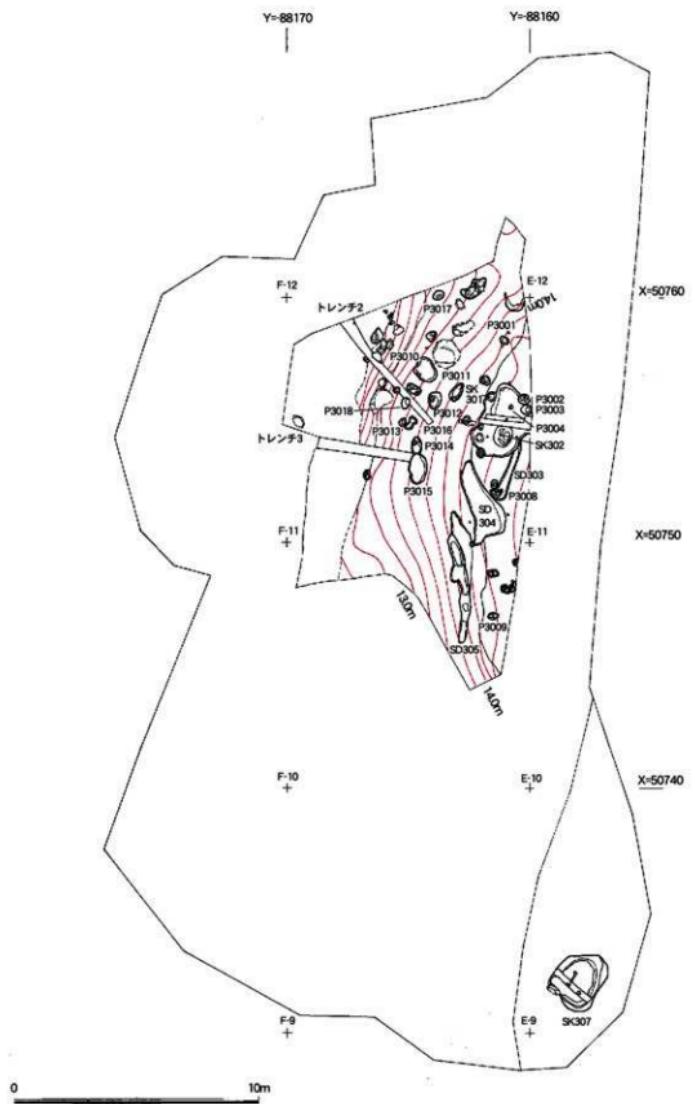
SK301とは埋土が異なり粘性が弱い。灰褐色系埋土であり全体の層序の2層と同一。SD305も同一の埋土である。

(3) SK307

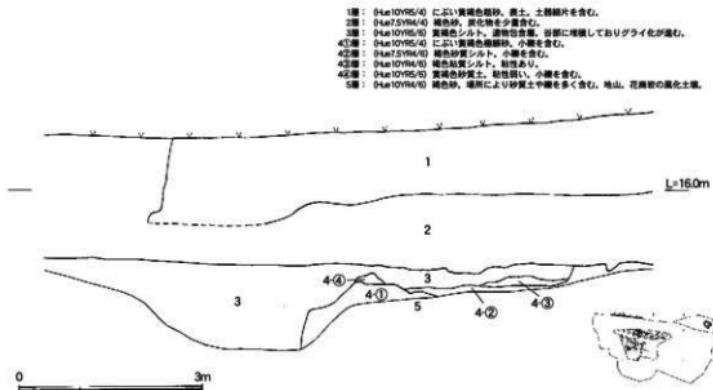
前述のとおりSK307は他の遺構とは離れており、丘陵の鞍部に近い位置にある。谷側の立ち上がりは削平を受けていたものの、丘陵側はほぼ垂直の壁面が良く残っていた。埋土上層に小礫が並んでいた。埋土は2層とほぼ同一である。床面直上に少量の焼土が混じった炭化物が極薄く広がる。比熱の痕跡がないため炭窯ではないと考えているが、他の遺構の可能性を指摘することもできない。遺物は埋土上部から少量出土した。

(4) ピット群

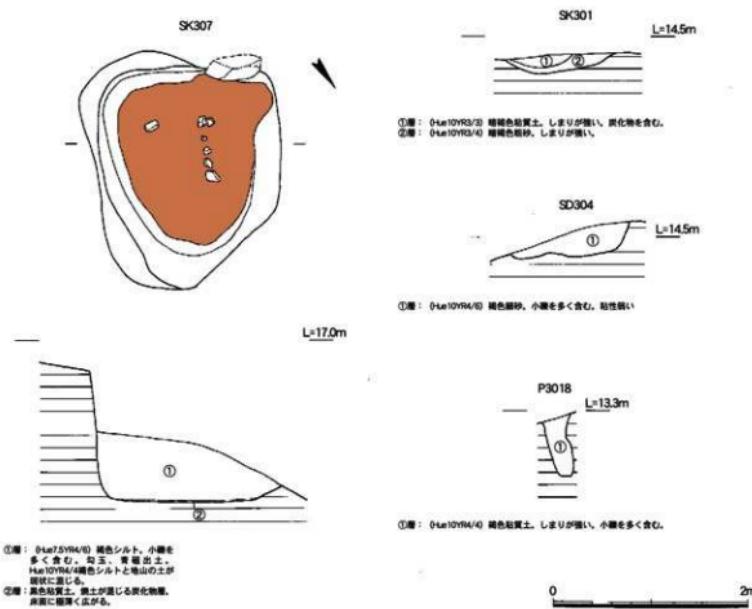
ピットはまばらに見つかった。建物跡等を復元するには至らなかった。図示したP3018は最も深い



図V-1 仁田古墳群3区遺構配置図 (1/200)



図V-2 調査区東壁土層図 (1/80)



図V-3 SK301・SD304・SK307・P3018 (1/50)

ものである。若干傾いた掘り方をしている。

3. 遺物

(1) SK301 (図V-4~8)

1は須恵器杯蓋。杯蓋1類。口唇部内面に段をもつ。埋土中からの出土。

(2) SD304

2は須恵器杯蓋1類。器高は低く、口径も小さい。

(3) 包含層出土土器・陶磁器

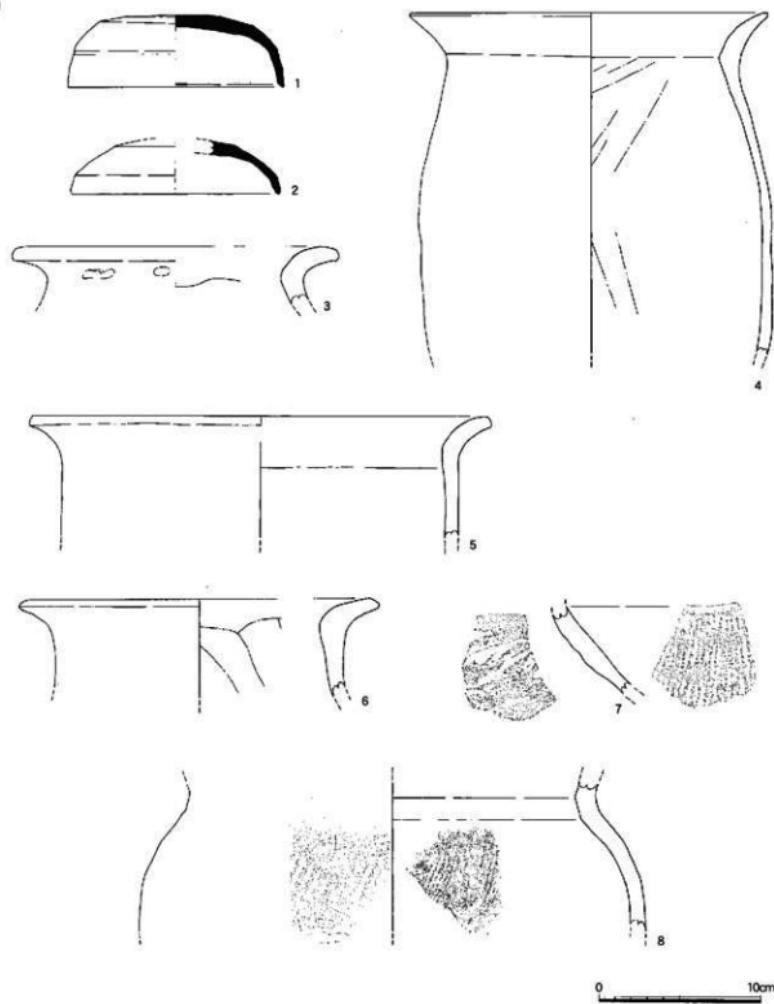
3~18は土師器。3~6は甌。4は胴部下半まで残存する。口縁部は外反が大きい。2イ類。胴部は張りがあまり強くなく、外面はナデ調整。5は胴部の張りがなく、口縁部が大きく外反する。甌の可能性もある。7、8は胴部内外面にタタキ目が残る。色調は浅黄橙色と他の土師器より明るく、硬質である。そのため須恵器の焼成不良品の可能性もあるが砂粒が多く、器面の状態から土師器の可能性が高いと考えた。そのため須恵器工人が作った土師器ではないかと考えられる。7は外面にカキ目？(ハケ目?)後タタキを施す。傾きは任意である。8はカキ目？(ハケ目?)後タタキを施す。9~11は土師器甌(甌)の把手片。12は杯。遺存状態が悪いが、赤色顔料を塗布しているのがかろうじて残存している。15~17は高杯。15は弥生土器の可能性もある。17は内外面にヘラミガキ？(ナデ?)を施す。20~45は須恵器。20~22は杯蓋1類。23~28は杯蓋2類。23は2ア類。24、25はイ類。26~28は2ウ類。23は焼け歪みがある。29~32は杯1類。33、34は杯2アα甲類。35は杯2イα甲類、36、37は2イα乙類。40はこれまで出土した須恵器皿とは器形が異なり、体部下半が丸みを帯び、口唇部上面に平坦面をもつ。古代に属する高杯の杯部と同一の器形である。41は甌1イ類の大正品。接合しなかったため図化していないが、破片は他にも出土している。43~45は壺。43は長頸壺の口縁部片。波状文が細かく、凸帶もはっきりしており、出土した須恵器の中では時期的に最も古いものである。丘陵上の古墳からの流れ込みの可能性が高い。自然軸が付着する。44は胴部外面にハケ目？カキ目を施す。46~49は青磁。50~52は土製羽口片。51と52は磨耗が進む。

(4) 包含層出土石製品

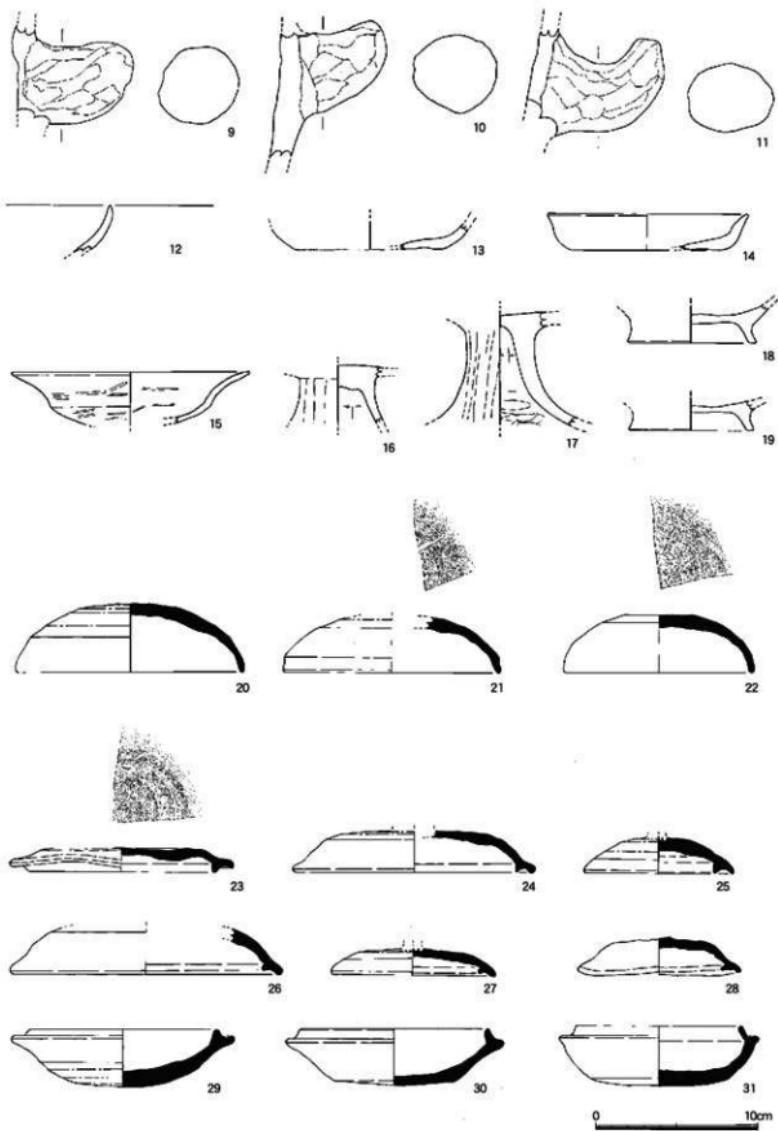
53は滑石系の石材を用いた勾玉の完形品。丘陵上からの流れ込みと思われ、中世の遺物と共に出土した。54は磨製石鎌片。仁田古墳群1、2、4区からは弥生土器片が出土していることから、これらに伴うと思われる。55は加工用の磨製石斧片と思われる。56~59は凹石。凹石は破片も含め多く出土している。58は特に使用頻度が高く、両面共に大きく窪む。

4. 小結

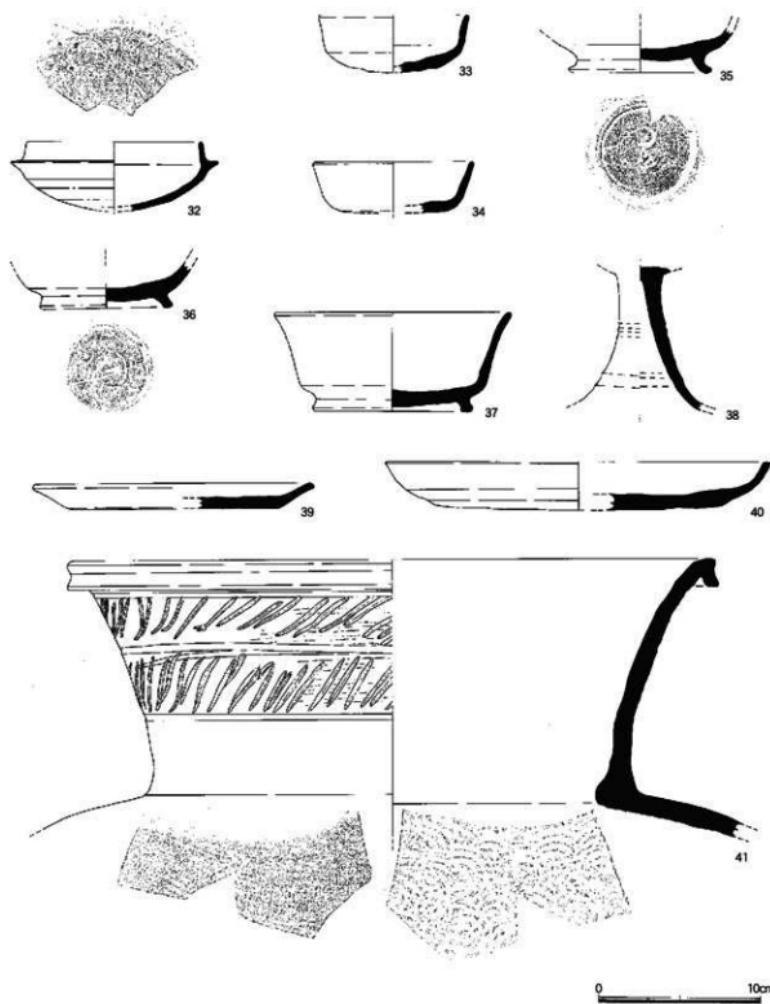
注目すべき成果としては、43の長頸壺と53の勾玉の出土が挙げられる。これらは仁田古墳群4区の埴輪窓跡と近い時期の遺物であり、丘陵上に同時期の古墳の存在が想定される。



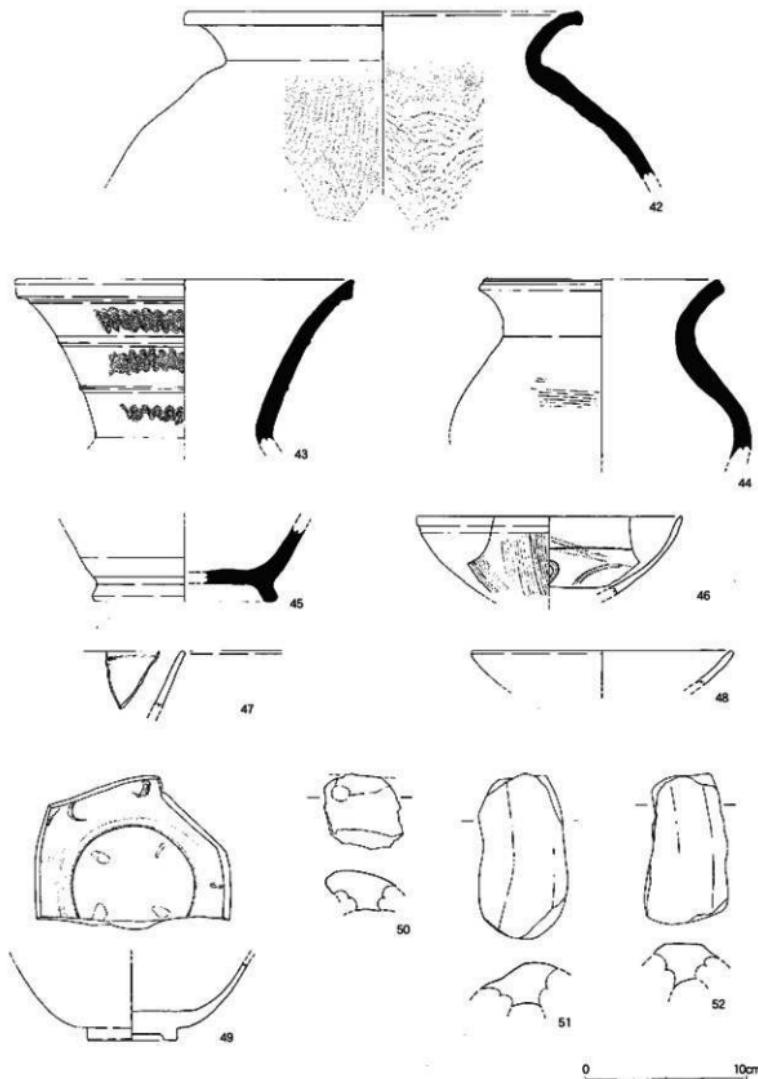
図V-4 SK301出土遺物・包含層出土土器1 (1/3)



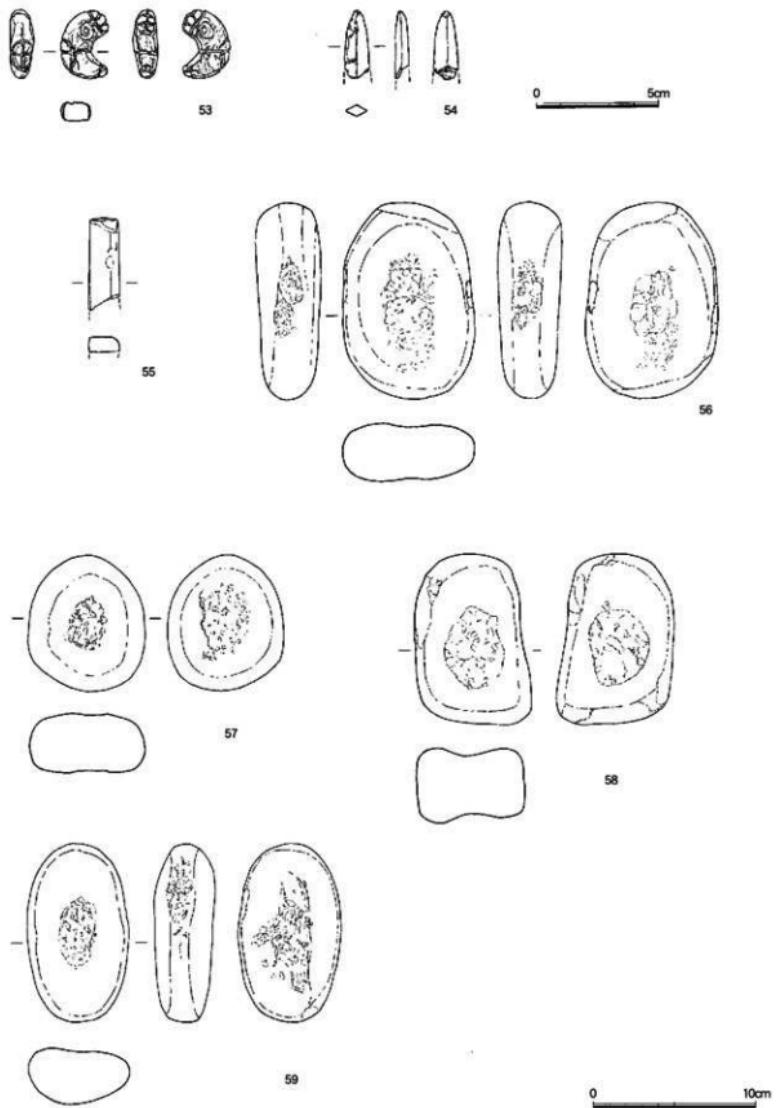
図V-5 包含層出土土器2 (1/3)



圖V-6 包含層出土土器 3 (1/3)



図V-7 包含層出土土器・陶磁器・土製品 (1/3)



圖V-8 包含層出土石製品 (1/2、1/3)

表V-1 仁田古墳群3区出土土器一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 輪(外面) 胎土(内面)	調整		備 考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内器面	
V-4-1	08002085	SK301 №1	須恵器杯蓋	4.4	(13.3)	青灰色 褐灰色	ヘラケズリ		
# -2	08002092	SD304	須恵器杯蓋	(3.3)	(12.8)	灰白色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	
# -3	08002116		土師器蓋	(3.2)	(10.0)	褐色 にぶい黄褐色	ナデ	ケズリ	
# -4	08002113	E-11 №1	土師器蓋	(20.9)	21.9	にぶい黄褐色 浅黄橙色	ナデ	ヘラケズリ	
# -5	08002114	E-10 №1	土師器蓋	(7.4)	(29.2)	橙色	ナデ	ヘラケズリ	
# -6	08002115	東北	土師器蓋	(6.0)	(22.0)	橙色 にぶい橙色	ナデ	ヘラケズリ	
# -7	08002120	表土剥ぎ下層	土師器蓋?	(4.8)		にぶい黄褐色 浅黄橙色	タタキ	カキ目 ハケ タタキ	
# -8	08002112		土師器蓋	(9.6)		浅黄橙色 橙色	ハケ タタキ	タタキ ナデ	
V-5-9	08002117	トレンチ2	土師器瓶?			橙色			
# -10	08002118	東北斜面	土師器瓶?	(7.6)		橙色			
# -11	08002119	東北溝	土師器瓶?			にぶい橙色			
# -12	08002124	E-11谷部	土師器杯	(2.5)	(9.4)	浅黄橙色	ナデ? ミガキ?	ナデ	
# -13	08002123	表土剥ぎ	土師器杯	(1.5)	(9.2)	浅黄橙色	回転ナデ	回転ナデ	
# -14	08002121	D-9	土師器杯	2.2	(12.4) (9.1)	にぶい黄褐色			
# -15	08002122	東北	生土基高杯?	(3.2)	(14.6)		ミガキ		
# -16	08002127	トレンチ2	土師器高杯	(3.5)		にぶい橙色	ヘラ ナデ	ナデ	
# -17	08002128	E-11北壁下	土師器高杯	(7.1)		橙色	ミガキ	ナデ	
# -18	08002125	北壁	土師器輪	(2.3)	(7.9)	にぶい橙色	回転ナデ		
# -19	08002126	北壁	土師器輪	(1.8)	(7.7)		回転ナデ	ナデ	
# -20	08002088	トレンチ3北	須恵器蓋	4.2	(14.0)	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	
# -21	08002090	トレンチ2南上部	須恵器杯蓋	(3.4)	(13.3)	青灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	
# -22	08002091	表土剥ぎ下層	須恵器杯蓋	3.5	(11.7)	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	
# -23	08002089	東斜面上方	須恵器杯蓋	1.4	(13.7)	青灰色	ヘラケズリ 回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	
# -24	08002087	東北斜面	須恵器杯蓋	(2.6)	(14.9)	暗灰黄色	ヘラケズリ ナデ	回転ナデ	
# -25	08002083	トレンチ2	須恵器杯蓋	(2.3)	(9.2)	灰白色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ナデ	
# -26	08002086	谷部	須恵器杯蓋	(2.8)	(16.8)	灰オリーブ色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	
# -27	08002082	表土下層	須恵器杯蓋	(1.7)	(10.2)	灰色 青灰色	ヘラケズリ ナデ	回転ナデ ナデ	
# -28	08002084	トレンチ2, 3	須恵器杯蓋	2.3	(10.0)	暗オリーブ灰色	ヘラケズリ ナデ	回転ナデ ナデ	
# -29	08002100	東北溝	須恵器杯	3.6	13.7	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	
# -30	08002102	斜面南側	須恵器杯	3.5	(13.3)	灰色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	
# -31	08002101	トレンチ2ベルト	須恵器杯	3.7	(12.2)	灰色 灰褐色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	
V-6-32	08002103	トレンチ2	須恵器杯	(4.2)	(12.6)	灰黄色	ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ	ヘラ記号
# -33	08002097	トレンチ3北	須恵器杯	3.5	(9.2)	灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	
# -34	08002104	トレンチ2	須恵器杯	(3.1)	(9.8)	灰黃褐色	回転ナデ	回転ナデ	
# -35	08002099	トレンチ2ベルト	須恵器杯	(2.7)	8.7	にぶい赤褐色	回転ナデ	ナデ	ヘラ記号
# -36	08002098	東北溝	須恵器杯	(2.8)	8.2	灰褐色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ記号

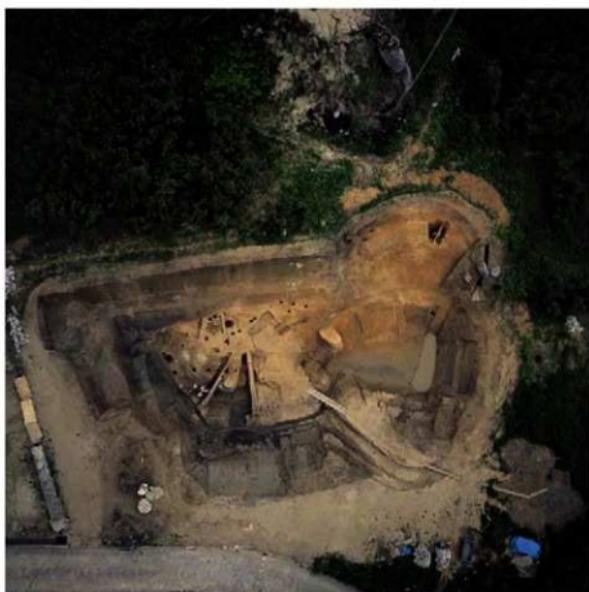
押出番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 釉(外面) 胎土(内面)	調整		備考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内器面	
V-6-37	08002095	表土剥ぎ下層	須恵器杯	6.1	(14.5) 9.8	灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
#-38	08002093	東北	須恵器高杯	(8.4)		青灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
#-39	08002105	E-11トレンチ3	須恵器皿	1.5	(17.2) (13.0)		回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
#-40	08002094	東北斜面	須恵器皿	3.0	(23.5) (17.5)	暗青灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
#-41	08002106	谷トレンチ3	須恵器甕	(17.0)	(39.7)	暗灰褐色		回転ナデ タタキ	
V-7-42	08002108	E-11トレンチ3	須恵器甕	(10.3)	(24.3)	灰色	回転ナデ タタキ	回転ナデ タタキ	
#-43	08002109	E-11N.3	須恵器甕?	(10.0)	(20.6)	オリーブ灰色 灰色		ナデ	
#-44	08002107	トレンチ2ベルト	須恵器甕	(11.0)	(15.0)	灰白色	ハケ ナデ	ナデ	
#-45	08002096	表土下層	須恵器杯?	(4.7)	(11.3)	灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
#-46	08002111	表土剥ぎ	青磁?白磁?焼	(4.9)	(16.3)	灰オリーブ色 灰白色	施釉	施釉	
#-47	08002081		青磁碗	(3.5)		オリーブ灰色 灰白色	施釉	施釉	
#-48	08002080	表土下層	青磁碗?	(2.1)	(16.0)	灰オリーブ色 灰白色	施釉	施釉	
#-49	08002110	表土剥ぎ	青磁?碗	(4.8)	5.7	灰オリーブ色 灰白色	施釉	施釉	

表V-2 仁田古墳群3区出土土製品一覧表

押出番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 釉(外面) 胎土(内面)	調整		備考
				長さ	幅 厚さ		外器面	内器面	
V-7-50	08002131	E-11北壁	土製品縁羽口	(4.5)	(4.7)	灰白色 橙色			
#-51	08002129	東北溝	土製品縁羽口	(10.2)	(6.4)	にぶい黄褐色 橙色			
#-52	08002130		土製品縁羽口	(9.1)	(5.0)	橙色			

表V-3 仁田古墳群3区出土石製品一覧表

押出番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)			備考		
				長さ	幅	厚さ			
V-8-53	08003761	D-9	石製品勾玉	2.7	1.3	8.5	滑石系の石材		
#-54	08003760	東斜面	磨製石砾	(2.8)	1.0	0.45	端部が磨耗する		
#-55	08002079	北壁	磨製石斧	(5.6)	(1.9)	(1.0)			
#-56	08002077	トレンチ2-3	凹石	12.1	8.1	3.9			
#-57	08002078	東斜面上方	凹石	8.4	7.1	3.7	花崗岩		
#-58	08002075	トレンチ2-3	凹石	10.5	6.9	4.5	花崗岩		
#-59	08002076	東斜面上方	凹石	11.0	6.3	3.7			



1. 調査区全景 1 (上空から)



2. 調査区全景 2 (西から)



1. 遺構検出状況（西から）



2. 調査区全景 3（北西から）



3. 谷部完掘状況（北から）



4. SK302 半截（南から）



5. SD304 土層（西から）



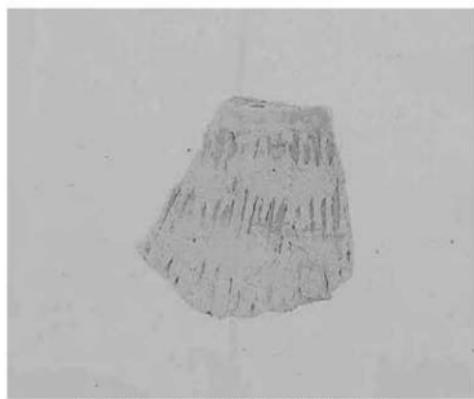
6. SK307（北から）



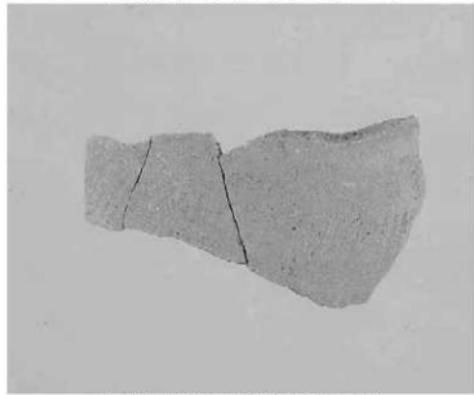
7. 遺物出土状況（西から）



8. 調査区東壁（西から）



1. 包含層出土土師器壺（表）（図V -4-7）

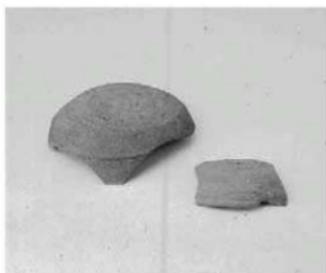


2. 包含層出土土師器壺（図V -4-8）

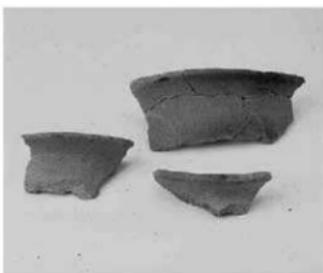


3. 包含層出土土師器壺（図V -4-4）

仁田古墳群 3 区出土遺物 1



1. 包含層出土須惠器蓋集合



2. 包含層出土土師器甕集合



3. 包含層出土土師器甕(裏)(図V -4-7)



4. 包含層出土土師器高杯集合



5. 包含層出土須惠器集合①



6. 包含層出土須惠器集合②



7. 包含層出土須惠器集合③



8. 包含層出土須惠器甕(図V -7-43)

仁田古墳群 3区出土遺物 2



1. 包含層出土須恵器壺 (図V -6-41)



2. 包含層出土陶磁器集合



3. 包含層出土櫛羽口集合



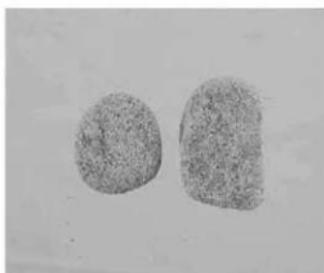
4. 包含層出土石製勾玉 (図V -8-53)



5. 包含層出土磨製石器集合



6. 包含層出土凹石集合①



7. 包含層出土凹石集合②

仁田古墳群 3 区出土遺物 3

第VI章

矢作遺跡4区の調査

遺跡名：矢作遺跡4区（略号YAH-4）

所在地：佐賀県唐津市浜玉町渕上

矢作遺跡4区の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図VI-1)

矢作遺跡4区は標高20～26mの独立丘陵上に位置する。この丘陵部は、遺跡地図では矢作古墳群内に含まれる。矢作古墳群は遺跡地図によると複数基の古墳によって構成されているとされるが、調査前は果樹園と林になっており、古墳の存在を確認できなかった。そこで尾根上を中心調査を行なった結果、丘陵先端部でST401の石棺蓋石を確認したため、矢作遺跡4区として調査区を設定した。他の部分では表土直下に花崗岩の岩脈が見られることから、果樹園造成の際に削平を受けていることが分かった。ST401付近は果樹園の段の部分にあたったため、辛うじて削平を免れている。

矢作遺跡4区ではST401以外の古墳や遺構は発見されなかった。ST401は当初箱式石棺だけを確認していたが、墓壙を掘下げた結果粘土床を検出した。5月に主体部の調査に入り、6月に終了した。

(2) 層序 (図VI-3)

ST401西側のトレンチ土層では表土下に2、3層（黄褐色、明褐色粘質土）として墳丘流出土を確認している。他の部分は削平により表土直下が地山となる。

2. 遺構 (図VI-2～8)

(1) ST401

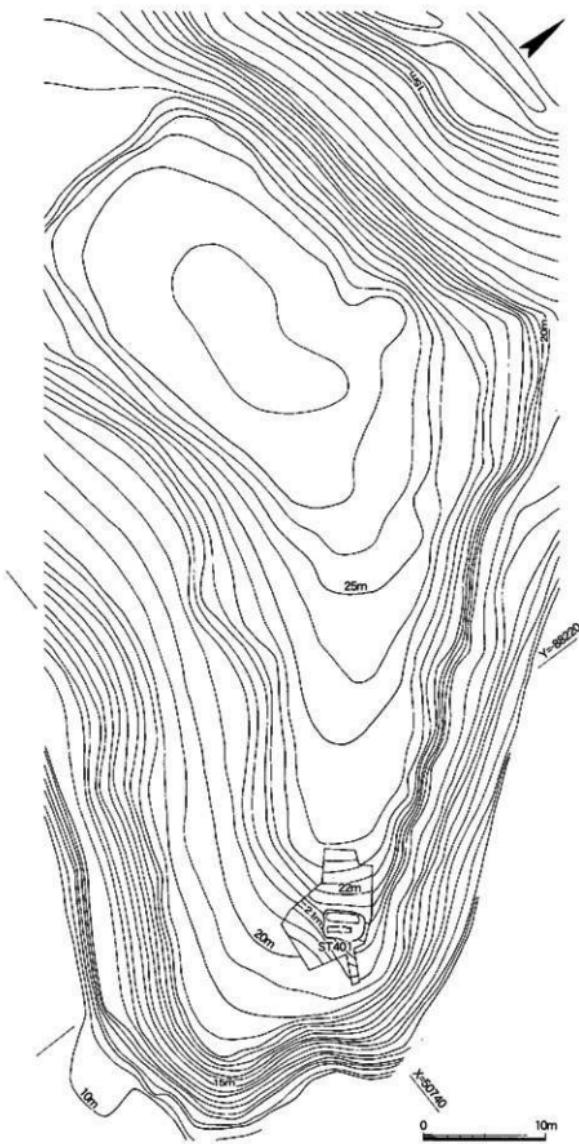
・墳丘 (図VI-2)

ST401は標高20～22mの丘陵先端部に位置する。墳丘は果樹園造成の際に削平を受けており、はっきりしないが、前述のとおり墳丘西側で墳丘流出土を確認している。立地から見ると、大規模な墳丘は想定できず、調査担当者は調査時の所見を基に、径約6.5～7mの柏を覆う程度の低墳丘を推定している。葺き石等の外部施設はない。

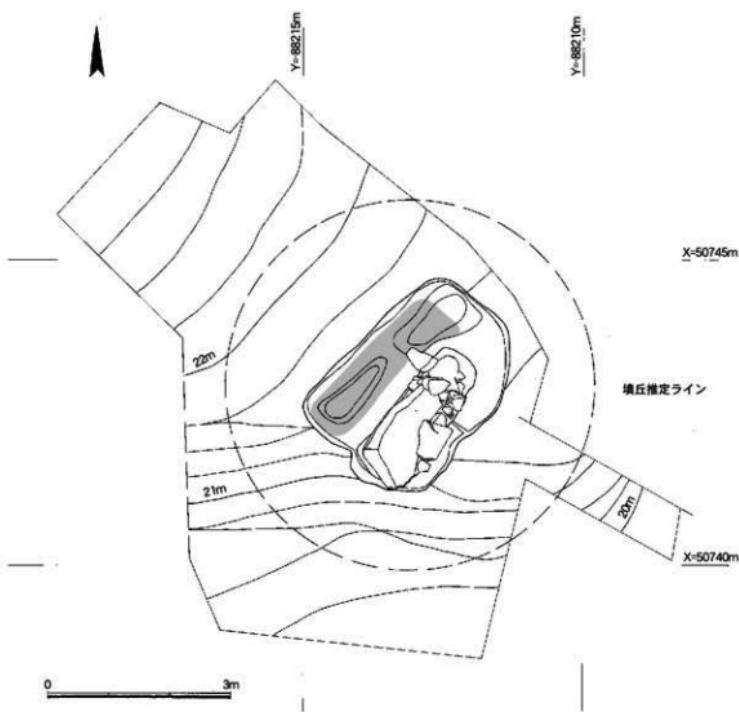
・主体部 (図VI-4～8)

埋葬施設は墓壙内に箱式石棺と並行する形で粘土床を確認しており、埋葬施設が2基並列して築かれている。箱式石棺を第1主体部、粘土床を第2主体部とした。切り合い関係からは前後関係ははっきりしないが、第2主体部が先行するようにも見える。しかし土層図(①と③)では順が逆転しているようであり、両主体部の埋設時期に差はないか。しかし墓壙の平面プランでは、南側の第1主体部と第2主体部の間には境界があり、また墓壙の深さも0.5mほど違うため、全く同一時期ではないと思われ、平面プランから第1主体部が先行すると考えたい。

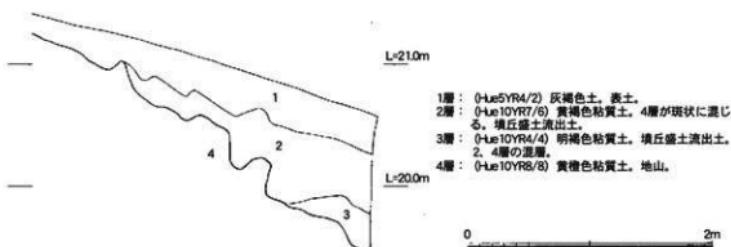
箱式石棺は未盗掘であったため、良好な遺存状態を期待していたが、蓋石を取り外した結果、石棺内には蓋石の隙間から浸入した土砂が充満していた。箱式石棺の規模は、内法の長軸1.9m、幅0.36m、高さ0.4mと細長い。床土整地土の8層は黄褐色砂質土。しかし明確な床面は確認できなかった。床土は蓋石や側壁の内面には、ベンガラと思われる赤色顔料が塗られていた。頭部位置に玄武岩の枕状の石が置かれている(図VI-6)。2体分以上の人骨が8層から浮いた状態で出土したが、流入した土砂や根による搅乱のため遺存状態が悪く、正確な埋葬人数は不明であるものの、枕状の石と頭蓋骨の出土位置から2体と推測され、頭部位置は南頭位と北頭位である。石室内からは副葬品として、床面から浮い



図VI-1 矢作遺跡4区地形測量図 (1/400)



図VI-2 ST401 填丘測量図 (1/80)



図VI-3 調査区北東壁土層図 (1/40)

た状態（1層）で鉄鎌が出土した。また1層から浮いた状態で刀子も出土している。

第2主体部の粘土床は、砂粒をほとんど含まない暗褐色粘土である。粘土床の大きさは南北に2.7m、東西に0.8m。粘土床の立ち上がりが不明瞭なため木棺型式は不明である。粘土床は北端付近が最も高く、中央付近が最も低く、南端に向けて若干高くなる。東西方向は西側が最も高く東に向けて下がるもの、②土層では東側が緩やかに立ち上がる。また南端付近には赤色顔料が残存していた。遺物は出土していない。粘土床の下部は、南北に細長い土壤が2基連なって見つかった。

3. 遺物（図VI-9）

遺物は図示した鉄器以外に弥生時代以降の土器片が数点出土しているが、細片のため実測することができなかった。1は鉄鎌の完形品。長さ8.7cm、鎌身幅2.5cm。ふくらより関部が若干広い。杉山氏の分類（杉山、1988）では三角形鎌（1A式）、水野氏の分類（水野、2007他）では有茎鎌の柳葉式と考えている。2は刀子の刀身部片。切先と茎部は欠損する。切先付近の刃部がつぶれる。

4. 小結

①墳丘：

削平を受けており墳丘規模ははっきりしないが、調査時の所見から直径10mを超えることはないと判断できる。葺き石等は確認されておらず、石棺を覆う程度の盛土しかもたなかったのではないだろうか。

②埋葬施設：

箱式石棺と粘土床（木棺）が並列で2基築かれている。箱式石棺は2体以上の人骨が確認されたが、遺存状態が悪く、詳しいことは分かっていない。石材の大部分は花崗岩であるが、枕状の石に用いられた玄武岩は、近隣では約4km離れた鏡山から産出するため、鏡山周辺から持ち込まれた可能性がある。遺跡は花崗岩地帯にあり、手頃な石は付近から多く採れるため、玄武岩が持ち込まれたのは、意図的な行為の産物であろう（註1）。玄武岩は枕状の石以外にも蓋石等に用いられている。人骨と鉄鎌は共に8層から浮いた状態で出土した。枕状の石も同一のレベルであり、平面検出や土層断面観察では確認できない床面が1層にあるのであろう。

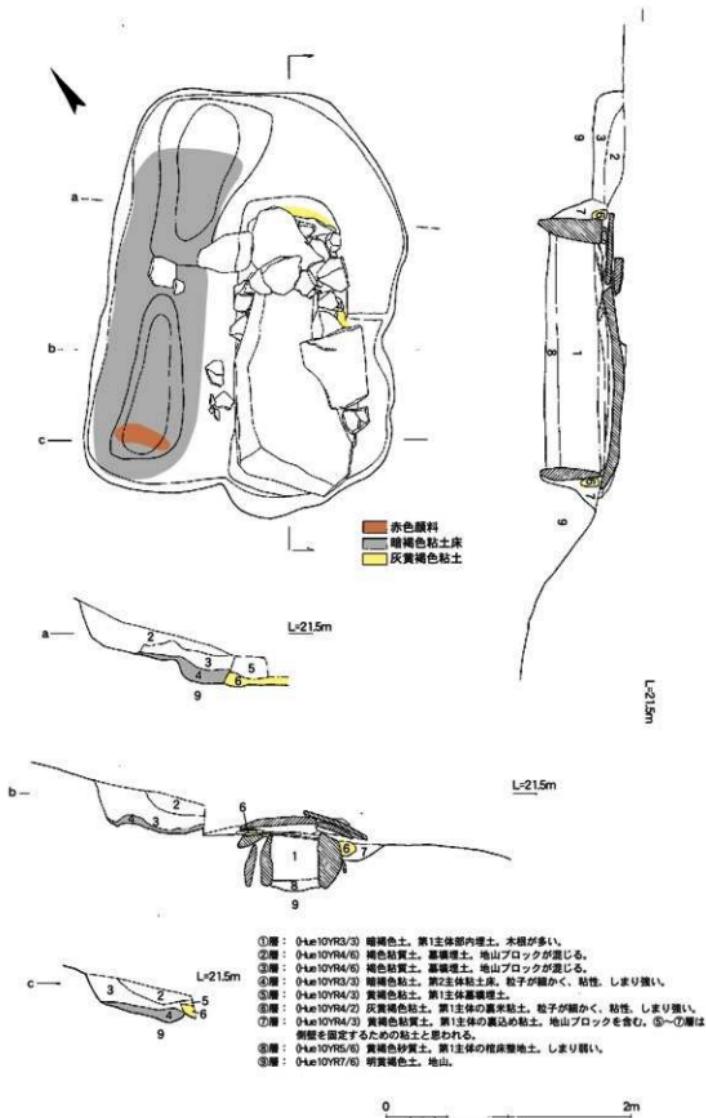
第2主体部は前述のとおり、粘土床には立ち上がりがないため主体部ではない可能性も考えたが、赤色顔料を確認しており、粘土の面的な広がりから主体部と考えたい。

③出土遺物：

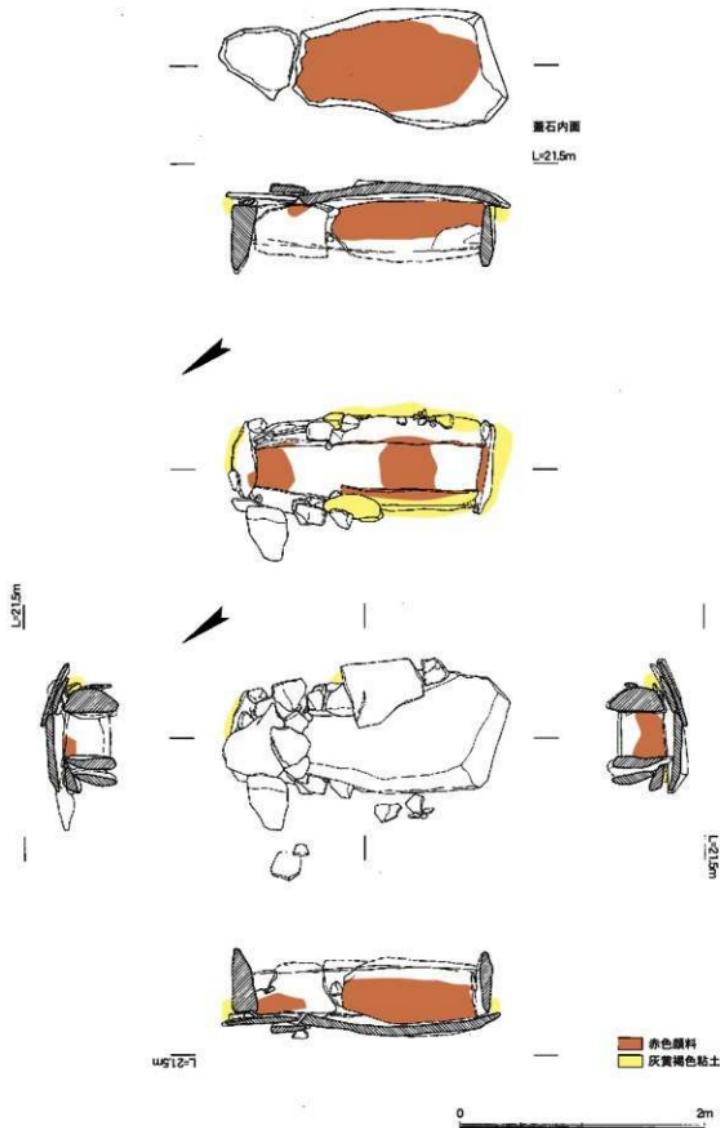
鉄鎌と刀子と土器細片が埋土中から出土している。杉山氏と水野氏の研究により、鉄鎌の型式からは前期～中期前半に位置づけられる。

④時期：

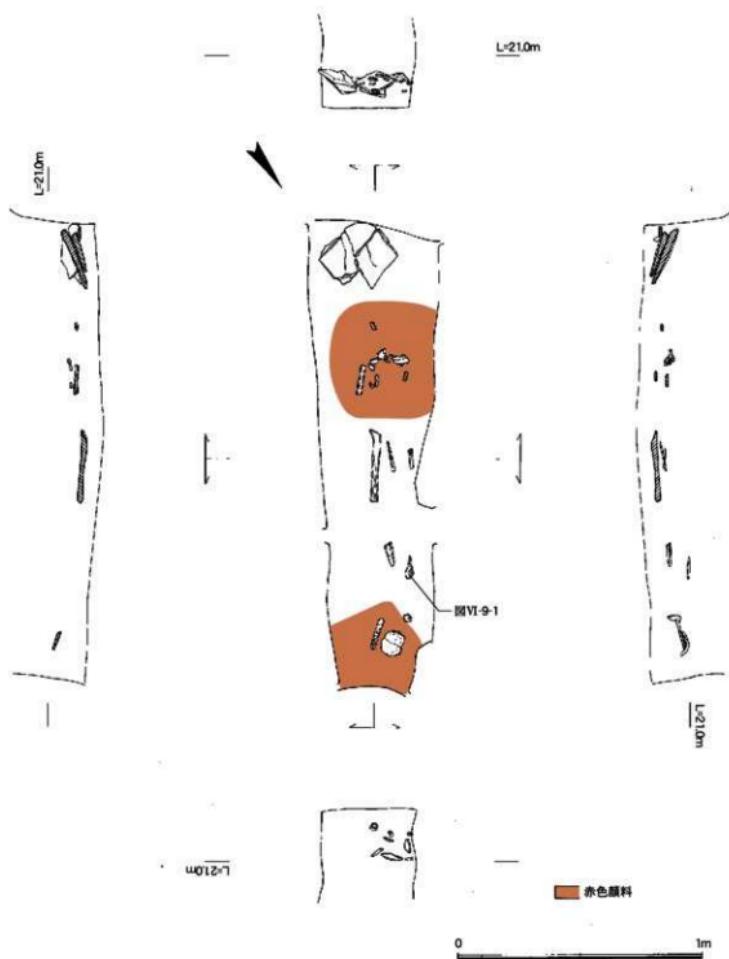
箱式石棺の複数体埋葬は遺物が出土する例が少ないため時期特定が難しいが、古墳時代の前期には見られるようである。また主体部並列埋葬は、浜玉町内の経塚山古墳（集成4期）や小山田古墳（集成4～5期）で確認されている（註2）。ST401も両墳と同じく主体部並列埋葬であることから、集成編年の4期（～5期）に位置付けるのが最も適当なのではないだろうか。しかし根拠が弱いことは否めないため、今後の検討が必要である。



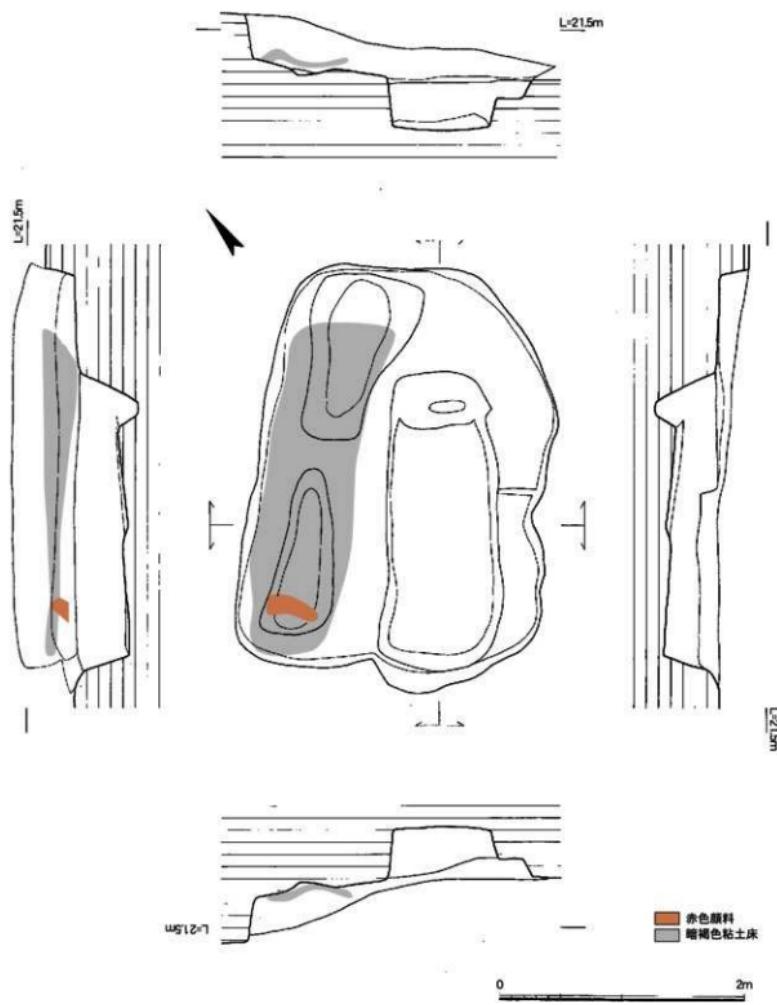
図VI-4 ST401 石室第1、第2主体部土層図 (1/40)



图VI-5 ST401 第1主体部 (1/40)



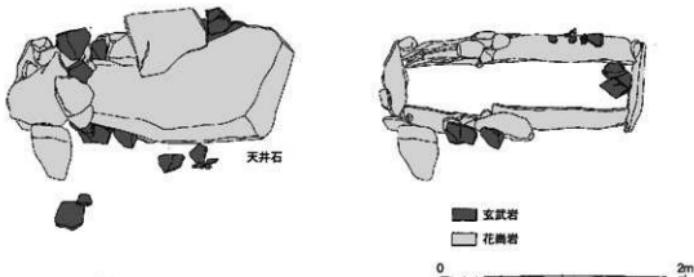
図VI-6 ST401 第1主体部内遺物出土状況 (1/20)



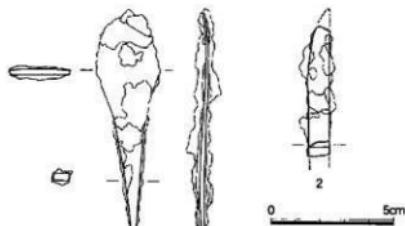
图VI-7 ST401 第1、第2主体部墓塘 (1/40)

(註1) 短絡的に考えることは慎まなければならないが、祭祀行為を行なったことが最も考えられる。

(註2) 経塚山古墳は竪穴式石室の墓壙内に並行して2基の粘土床を配する。しかし1基は未使用のまま埋められたとされるため、厳密には主体部並列埋葬の例とはいえないか。小山田古墳は、竪穴式石室と石棺が並行して納められている。石棺の埋葬が先行するが、ほぼ同時期と推定されている。



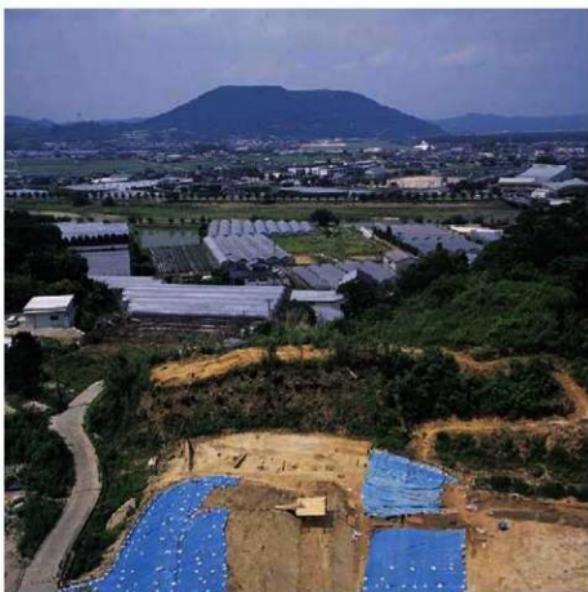
図VI-8 ST401 第1主体部使用石材 (1/40)



図VI-9 ST401 出土鉄製品 (1/2)

表VI-1 矢作遺跡4区出土鉄製品一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法 量(cm)	備考
VI-9-1	09001203	ST01	鉄器 鉄鏃	長さ8.7 幅2.5 厚さ0.3	
* -2	09001261	ST01 1層	鉄器 刀子	長さ5.3 幅0.8 厚さ0.3	



1. 調査区全景 1 (北から)



2. 調査区全景 2 (南から)



1. ST401 第 1, 2 主体部検出状況 1 (西から)



2. ST401 第 1, 2 主体部検出状況 2 (南から)



3. ST401 第 1 主体部蓋石 (北から)



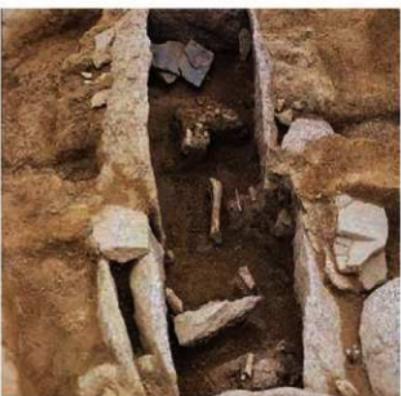
1. ST401 第1主体部蓋石除去後（北から）



2. ST401 第2主体部土層断面（南から）



3. ST401 填丘土層（南から）



1. ST401 第1主体部遺物出土状況（北から）



2. 調査区全景3（上空から）



1. ST401 完掘状況（南から）



2. ST401 第 1, 2 主体部掘方（南から）



1. ST401 石室出土鐵鎌 (圖VI -9-1)



2. ST401 石室出土刀子 (圖VI -9-2)

矢作遺跡 4 区出土遺物

第VII章

下新田古墳群の調査

遺跡名：下新田古墳群（略号SMD）

所在地：佐賀県唐津市浜玉町渕上

下新田古墳群の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図VII-1)

下新田古墳群は標高 60m 付近の丘陵上に位置し、遺跡地図によると数基の古墳により構成される古墳群である。調査前に破壊された石室 (ST01) がむき出しの状態になっているのを確認していたため、A 地区として当初より調査区域に設定していた。確認調査や表土剥ぎの結果、ST01 以外には古墳を発見することができなかったため、他の古墳は既に消滅している可能性が高い。そのため A 地区は ST01 周辺に限って詳細な調査を行なった。調査中に石室石材が大きく傾き、危険な状態となったが、無事に調査を終えることができた。

この他周辺に遺跡の広がりについて調査した結果、谷を挟んだ標高 25 ~ 40 m 付近の丘陵斜面から、弥生土器片が出土したため、B 地区として調査範囲に加えることになった。B 地区も果樹園による破壊を受けており、トレンチ調査を 4ヶ所で行なった。

(2) 層序 (図VII-3)

A 地区は果樹園造成により大きく削平を受けており、1層とした表土と赤褐色粘質土（赤土）の地山が基本層序である。B 地区は表土、褐色粘質土、地山で構成される。褐色粘質土中に少量の遺物が含まれている。

2. 遺構

下新田古墳群 A 地区では、前述のとおり ST01 以外の遺構は確認されなかった (図VII-1, 2)。これは果樹園造成の際に大きく地形改変を受けているためである。丘陵は道路や段の造成により旧来の地形を留めていない部分が多い。B 地区 (図VII-7) では 1 トレンチからピット? が確認された他は発見されなかった。

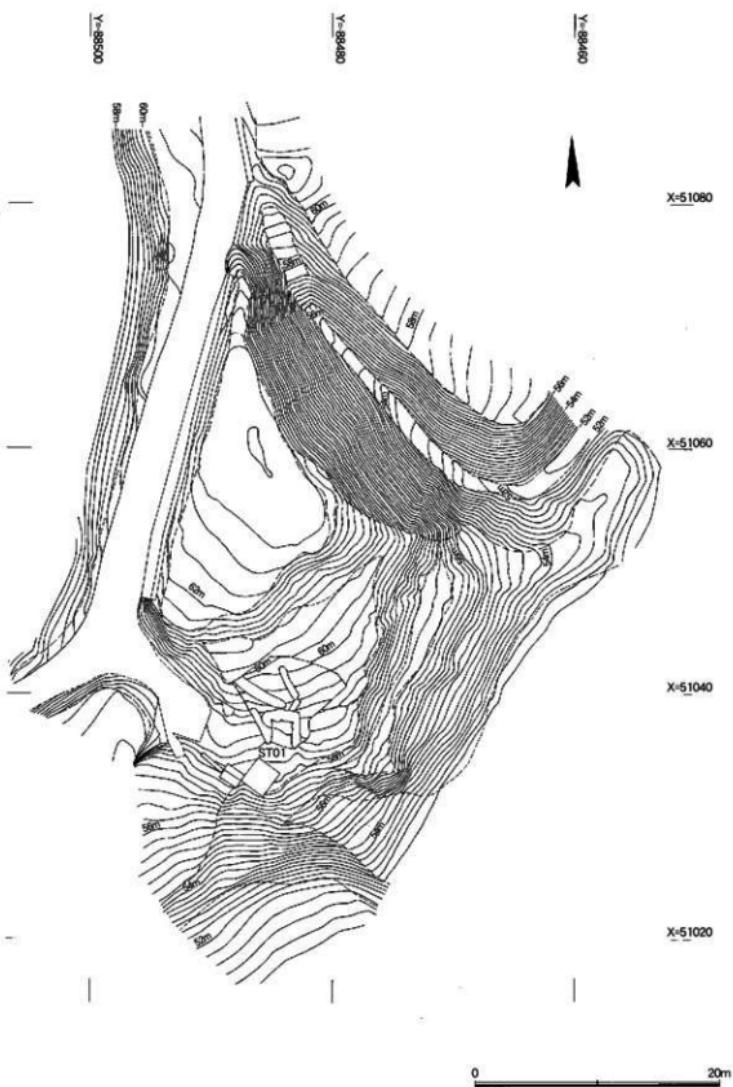
(1) A 地区の遺構

ST01 (図VII-2~6)

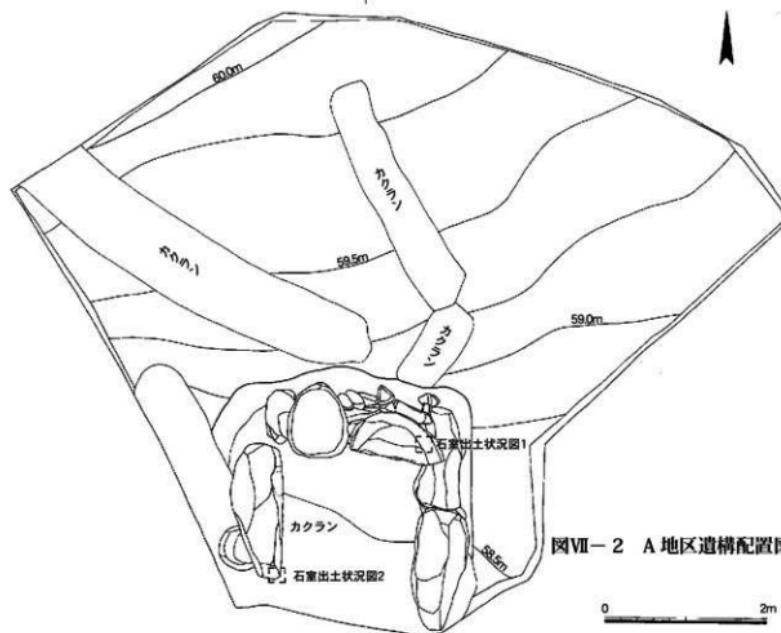
大きく破壊を受けており、墳丘も削平を受けているため、墳丘規模は不明である。石室掘方は奥壁の裏込め付近だけは辛うじて埋土の状況を確認できた。石室掘り方は狭く、現状では「コ」の字状を呈す。石室も破壊がひどく、奥壁が横位に配した腰石と二段目まで、側壁は左側壁が大型の石材を腰石として横位に一石配し、右側壁は横位に配した腰石を二石並べる。玄室の現存長は内法で奥壁幅 1.8m、玄門側は 1.65 m、残存玄室長は 2.5m、残存高は 1.6m である。石室床面も大きく搅乱を受けており、調査前はゴミ捨て場として利用されている状態であった。そのため床面が遺存しているのは奥壁近くだけであった。土師器杯 (図VII-4) は石室東隅のカクラン層から出土した。唯一古墳の時期を示す遺物である。

(2) B 地区の遺構 (図VII-7)

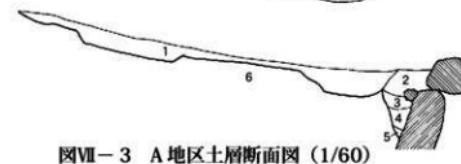
前述のとおり 1 トレンチからピットが見つかっているが根穴の可能性もある。層序は他のトレンチでも同じであるため、代表として 1 トレンチ西壁を掲載する。3 層が遺物包含層である。弥生土器は 1 トレンチからの出土であるが、3 層から出土が確認されているのは撫糸文土器だけである。しかし量的に少なく、狭い範囲での確認であるため、3 層に弥生土器を含まないのかは確定できない。



図VII-1 下新田古墳群 A 地区地形測量図 (1/400)

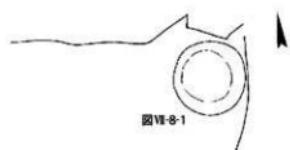


図VII-2 A地区遺構配置図(1/60)



図VII-3 A地区土層断面図(1/60)

- L=60.0m
1層: (4Ae5YR4/1) 棕褐色粘質土。表土。
2層: (4Ae10YR3/3) 墓褐色粘質土。カクラン。
3層: (4Ae10YR4/6) 棕褐色粘質土。石室
墓壁高さ約3m。
4層: (4Ae10YR6/9) 棕褐色粘質土。石室
墓壁高さ約3m。
5層: (4Ae10YR4/4) 棕褐色粘質土。石室
墓壁高さ約3m。
6層: (4Ae2.5YR6/8) 明黄色粘質土。
地山。

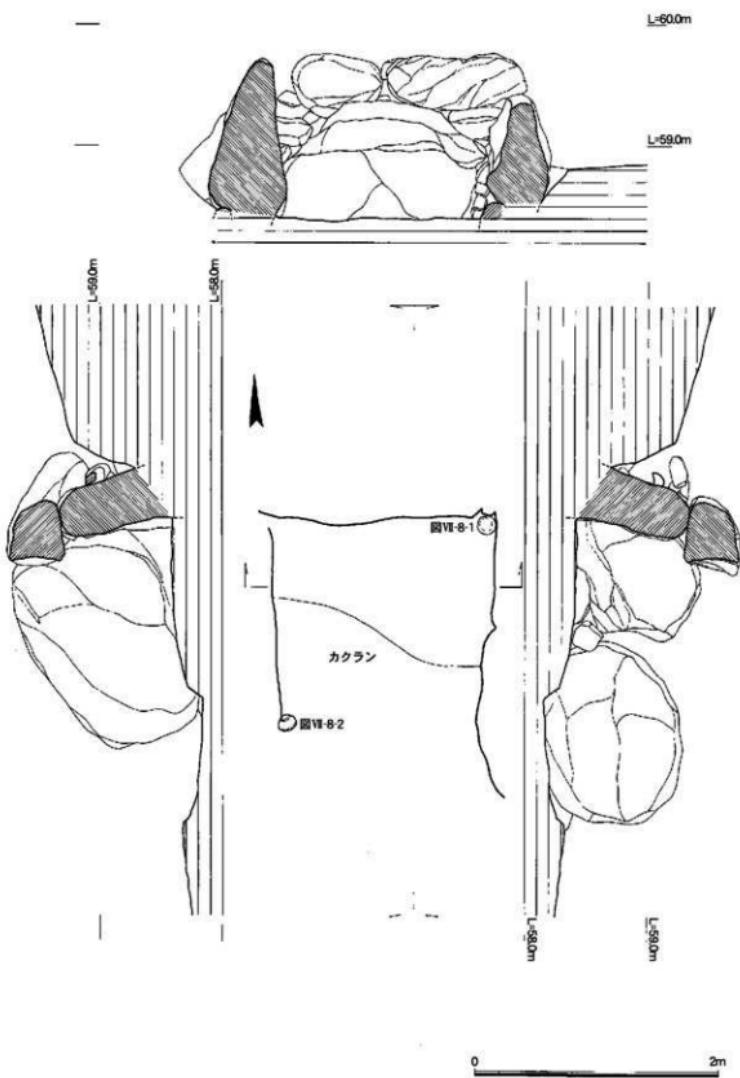


図VII-4 石室遺物出土状況図1(1/10)

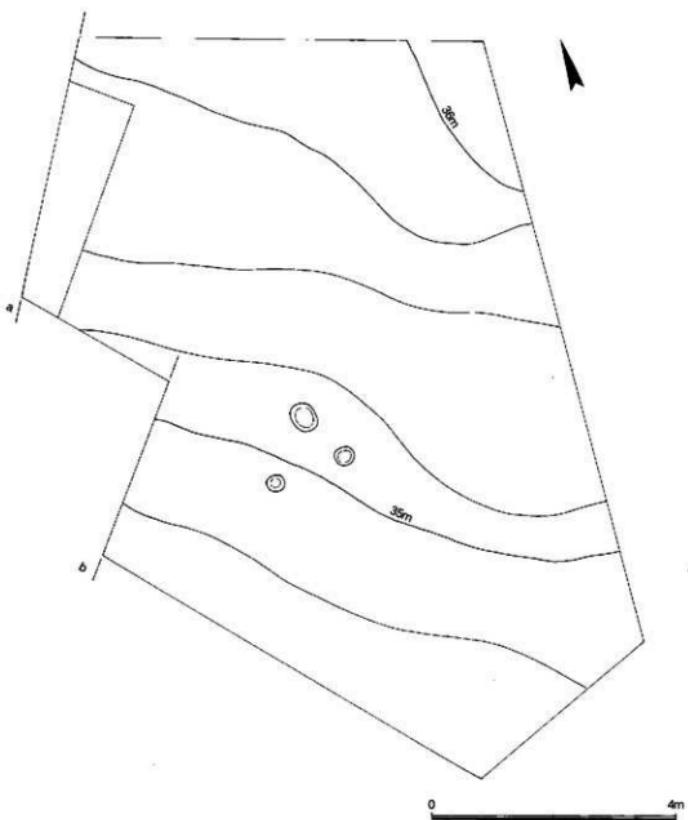


図VII-5 石室遺物出土状況図2(1/10)

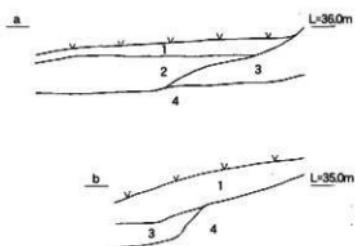
0 50cm



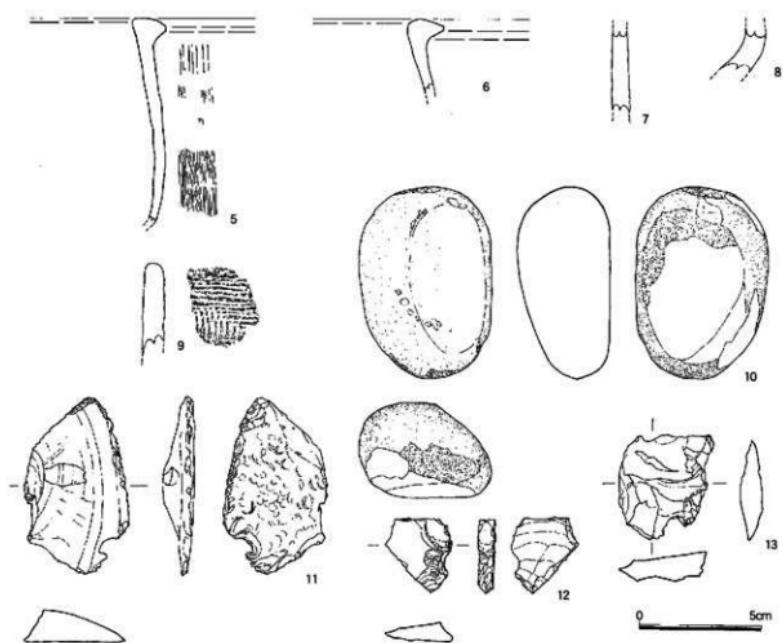
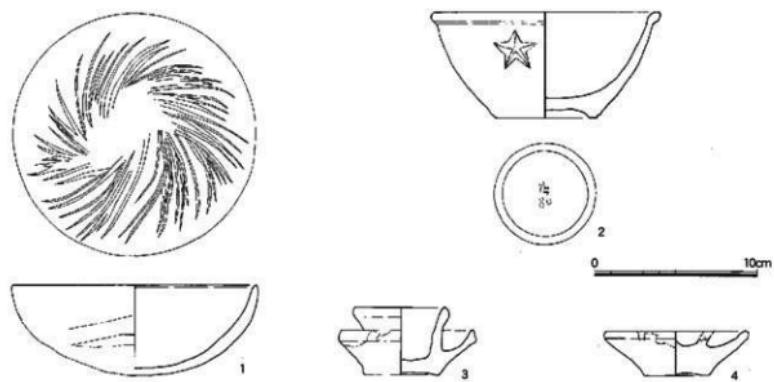
図VII-6 ST01 古墳石室 (1/40)



1層：(Hue10YR3/4) 暗褐色粘質土。表土。
 2層：(Hue10YRS/6) 黄褐色粘質土。表土。
 3層：(Hue10YRA/4) 塗色粘質土。遺物包含層。
 4層：(Hue7.5YR3/2) 黑褐色砂質土。地山。



図VII-7 下新田古墳群B地区1トレンチ遺構配置図(1/80)



図VII-8 下新田古墳群 A・B 地区出土遺物 (1～10が1/3、11～13が1/2)

3. 遺物（図VII-8-1～13）

1～4がA地区、5～13がB地区から出土している。

（1）A地区の遺物（図VII-8-1～4）

1は土師器の楕形の杯。内器面に渦巻状の暗文を施す。2は白磁碗である。体部外面に☆、底面に有80とある。第2次大戦時に有田で作られた軍用食器である。3、4は陶器灯明皿。3は完形に復元でき、上半部に鉄軸が掛かる。

（2）B地区的遺物（図VII-8-5～13）

5、6は弥生土器甕。口縁端部の突出は弱い。1トレンチの3層からは撚糸文土器と石器が少量出土している。これは矢作遺跡3区縄文下層と同一の様相である。下新田古墳群B地点と矢作遺跡3区は、同一の谷筋にある。7～9は縄文土器である。7は残存状況が悪いものの、矢作遺跡3区出土品との類似から撚糸文土器の胴部片とした。器形は若干外反している。8は底部付近と思われる個体。文様は残っておらず不明である。これらは矢作遺跡3区出土品と同じ明褐色の明るい色調のものである。9は口縁部片。文様もはっきり残っており、縦横の撚糸文が施される。土器胎土中には5mm程度の鉱物？が数種類含まれている。黒褐色の色調であり、矢作遺跡3区出土品とは色調が異なる。10は敲石に転用された磨石である。一部欠損するもののほぼ完形品である。11、12はスクレイパー。11は礫面を残す側縁部を利用してたり、サヌカイト製。12は黒曜石製。抉り部分を使用している。13はチャート？の剥片であり、唐津地方周辺では産出しないため搬入の可能性がある。

4. 小結

A地区ST01は大きく破壊を受けており、得られた情報は少ない。石室規模は奥壁の幅が1.8m程度であるため、大型の石室にはならないであろう。出土遺物も少ないが、暗文を施す土師器は小松氏の編年（小松2002）の6期以降であるため、6～7期前後に埋葬施設として用いられたのであろう。

B地区は明確な遺構は確認されておらず、どのような遺跡が広がっているのか詳細は分からぬが、他の調査区からも5、6のような城ノ越式土器が出土しており、須歎式は少い。狹義の唐津平野部では須歎式土器が出土する遺跡が非常に多く、城ノ越式は出土量が少ないと、異質な印象を受ける。浜玉地区的調査が進んでいないためこの傾向がどこまで広がるのか分からぬが、西九州道関係で発掘調査を行なった大江前遺跡でも須歎式土器が卓越することはなく、唐津平野部との違いとなるかもしれない。今後注目すべき点である。

また縄文土器はいずれも細片であるが、浜玉地区では縄文土器が出土した調査事例は五反田松本遺跡に限られており、貴重な事例である。この中でも撚糸文土器の出土は注目される。撚糸文土器の出土は縄文時代の遺跡の調査事例の多い上場台地でもそれほど多くなく、早期の遺跡の分布及び立地を考える上で貴重な事例となった。

参考文献（古代～近世関係、本報告書全体）

安芸穂子 2005 「江戸遺跡出土のキセラー東大構内遺跡における時期別様相一」成瀬晃司・堀内秀樹他『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院外来診察棟地点』東京大学理蔵文化

財調査室

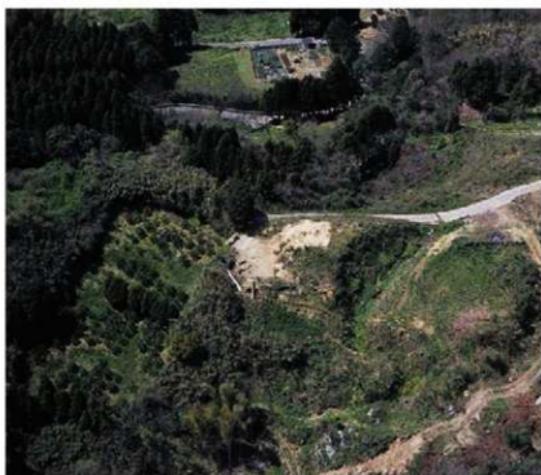
- 小形泰宏 1995 『宋玄寺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集 財團法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室
- 小田和利 1990 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－16－高松家墓地』福岡県教育委員会
- 小畠弘己・大坪志子 2008 『熊本大学構内遺跡発掘調査報告IV（1996・1997年度）』熊本大学埋蔵文化財調査報告書第4集 熊本大学埋蔵文化財調査室
- 下村智 1993 『席田青木遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集 福岡市教育委員会
- 下村智 1994 「北部九州の近世墓に使用される棺蓋について」『先史学・考古学論究』龍田考古会
- 下山覚・松崎卓郎・平島義孝・小石龍信 2005 『太宰府・佐野地区遺跡群20』太宰府市教育委員会
- 角信一郎 2003 『佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書－2000年度－』佐賀市文化財調査報告書第142集 佐賀市教育委員会
- 高橋徹・田中裕介・友岡信彦・江田豊 1996 『机張原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 大分県教育委員会
- 永井永美男 1996 『日本出土錢總覽』兵庫県埋蔵錢調査会
- 中島恒次郎 1995 『12.九州北部』中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中島恒次郎 1998 『西北九州からみた豊前国の食器相』『中近世土器の基礎研究XII』日本中世土器研究会
- 船井向洋 1992 『大光寺遺跡』伊万里市文化財調査報告書第37集 伊万里市教育委員会
- 東中川忠美 2000 『陶器の編年 4.壺・甕』九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』
- 東中川忠美 1987 『肥前ににおける近世の大甕』岡崎敬先生退官記念事業会『東アジアの考古と歴史』同朋舎出版
- 森隆 1989 『九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の観察－畿内系黒色土器との対比における－』『古文化談叢』第21号 九州古文化研究会
- 森山栄一 2006 『原田第1・2・40・41号墓地 下巻』筑紫野市文化財調査報告書第90集 筑紫野市教育委員会
- 山本信夫 1988 『大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器－10～12世紀の資料(1)本文編－』『中近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会
- 山本信夫 1990 『統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－』『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論集刊行会
- 山本信夫・山村信榮 1997 『中世食器の地域性 10 九州・南西諸島』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 横山浩一 1983 『佐賀県横枕における大甕の成形技術－現存する叩き技法の調査－』『九州文化史研究所紀要第二十七号』九州大学文化史研究施設

表VII-1 下新田古墳群出土土器一覧表

桝団番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調 輪(外面) 胎土(内面)	調整		備考
				器高	口外径 (底)径		外器面	内器面	
VII-8-1	09001389	A地点 ST01	土師器 杯	5.5	15.0	橙色	ヨコナデ	暗文	
* -2	09001388	A地点 ST01	白磁 植	6.5	14.0 6.2	灰白色	施釉 露胎	施釉	
* -3	09001384	A地点 ST01	陶器 灯明皿	4.1	(8.0) 4.6	灰褐色 にぶい橙色	鐵輪 糸切	ナデ	鐵輪
* -4	09001385	A地点 ST01	陶器 灯明皿	(2.7)	3.9	灰褐色 赤褐色	鐵輪	鐵輪	
* -5	09001387	B地点 1トレンチ	弥生土器 壺	(12.5)		橙色	ハケ目 ナデ	ナデ	
* -6	09001386	B地点 表層	弥生土器 壺	(4.5)		橙色	ヨコナデ タテハケ	ナデ	
* -7	09001270	B地点 3層 1トレンチ	縄文土器	(5.7)		褐灰色 にぶい黄褐色	より糸文	ナデ	
* -8	09001271	B地点 3層 1トレンチ	縄文土器	(5.05)		灰褐色	より糸文	ナデ	
* -9	09001272	B地点 3層 1トレンチ	縄文土器	(3.6)		にぶい黄褐色 にぶい褐色		ナデ	

表VII-2 下新田古墳群出土石製品一覧表

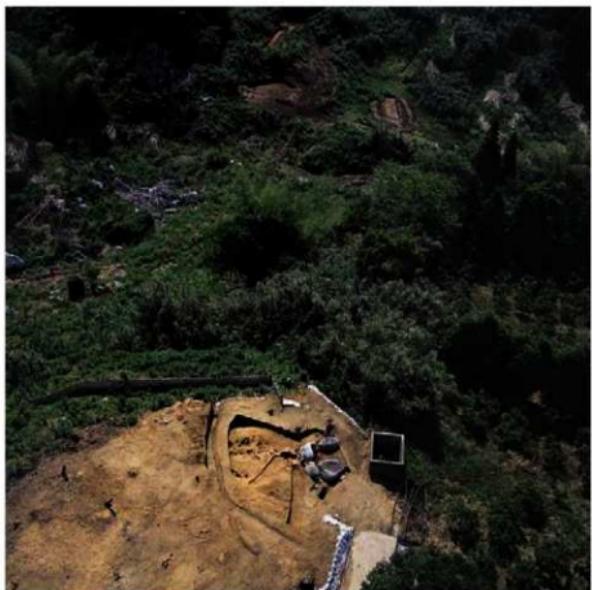
桝団番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)			備考	
				長さ	幅	厚さ		
VII-8-10	09000667	B地点 1トレンチ	霰石 磨石	11.7	8.1	5.8	重量770.0g	一部欠損
* -11	09001273	B地点 3層 1トレンチ	スクレイバー	7.2	4.0	1.3	サヌカイト製	片面は破面残す
* -12	09001274	B地点 3層 1トレンチ	スクレイバー	3.05	2.7	0.8	黒曜石製	抉り周辺を使用か?
* -13	09001275	B地点 3層 1トレンチ	剥片	4.3	3.55	0.9	チャート製	



1. 調査区全景 1 (南から)



2. 調査区全景 2 (玉島川を望む)



1. 調査区全景 3 (上空から)



2. A 地区全景 (上空から)



1. ST01 石室全景（南から）



2. ST01 石室石積（北から）



3. ST01 遺物出土状況（南西から）



1. B 地区 1 トレンチ全景（南から）



2. ST01 遺物出土状況（南から）



3. ST01 石室掘方土層（西から）



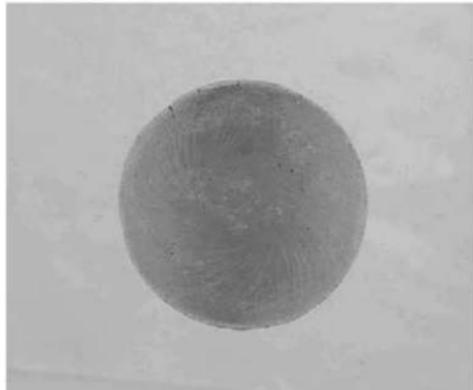
4. A 地区作業風景（南から）



5. B 地区 1 トレンチ西壁（東から）



1. ST01 出土土器杯 (図VII -8-1)



2. ST01 出土土器杯 (図VII -8-1)



3. ST01 出土磁器碗 (図VII -8-2)

ST01 出土遺物 1



1. STO1 出土陶器灯明皿 (图VII -8-3,4)



2. B 地区出土遗物集合

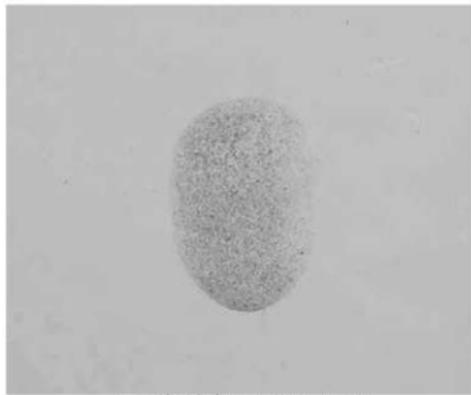


3. B 地区出土弥生土器集合

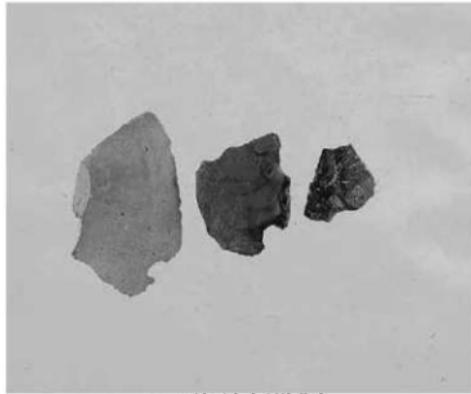
STO1 出土遗物 2, B 地区出土遗物 1



1. B 地区出土繩文土器集合



2. B 地区出土凹石 (図VII-8-10)



3. B 地区出土剥片集合

B 地区出土遺物 2

第VIII章

大坂古墳群の調査

遺跡名：大坂古墳群（略号OOS）

所在地：佐賀県唐津市浜玉町渕上

大坂古墳群の調査

1. 調査の概要

(1) 調査の概要 (図VIII-1)

大坂古墳群 ST01 は、調査前に破壊され、天井石と側壁の一部がむき出しの状態になっているのを確認していた。ST02 は伐採後に発見したが、既に破壊を受けて石室石材がむき出しになっていた。

地元の地権者からの聞き取りによると、戦前に ST01 から鉄製品等を掘り出したらしく、奥壁側の天井石を外して中に入ったようだ。天井部が開口していたため石室内には土砂が充満しており、石室内部についても大きく破壊を受けていると考えていた。しかし調査の結果、床面が残存しており、石室構造も大よそ残っていることが判明した。また埴丘盛土も一部残存しており、当初の予想よりはるかに残存状態が良いことが分かった。ST02 は前述のとおり大きく破壊を受けており、奥壁と側壁の一部を残すのみとなっていた。ST01 と ST02 の間は約 40m 空いており、他にも古墳があった可能性もあるが、表土剥ぎの結果、古墳を確認することはできなかった。但し、地主も開墾をした際には ST02 の存在は把握していなかったようで、同規模の埴丘や石室の古墳が存在していた可能性は十分ある。

また調査中に ST01 石室が盗難に遭い、鉄錆等が盗まれるという、まことに遺憾な出来事が発生した。調査は、平成 20 年 5 月で終了し、この大坂古墳群の調査終了をもって玉島川東岸の発掘調査は、全て終了した。

(2) 層序

前述のとおり果樹園造成の際に削平を受けているが、地主からの聞き取りによると重機による開墾は行なっていないということであり、地形変化はそれ程大規模なものではなかったようである。層序は基本的には表土と赤褐色粘質土の地山（赤土）の 2 層であったが、丘陵南端や ST02 付近は表土直下に花崗岩の風化土壤や岩脈が見られた。

2. 遺構 (図VIII-2 ~ 16)

遺構は古墳の他、焼土坑や埴丘下層から見つかった溝がある。

(1) ST01 (図VIII-2 ~ 12)

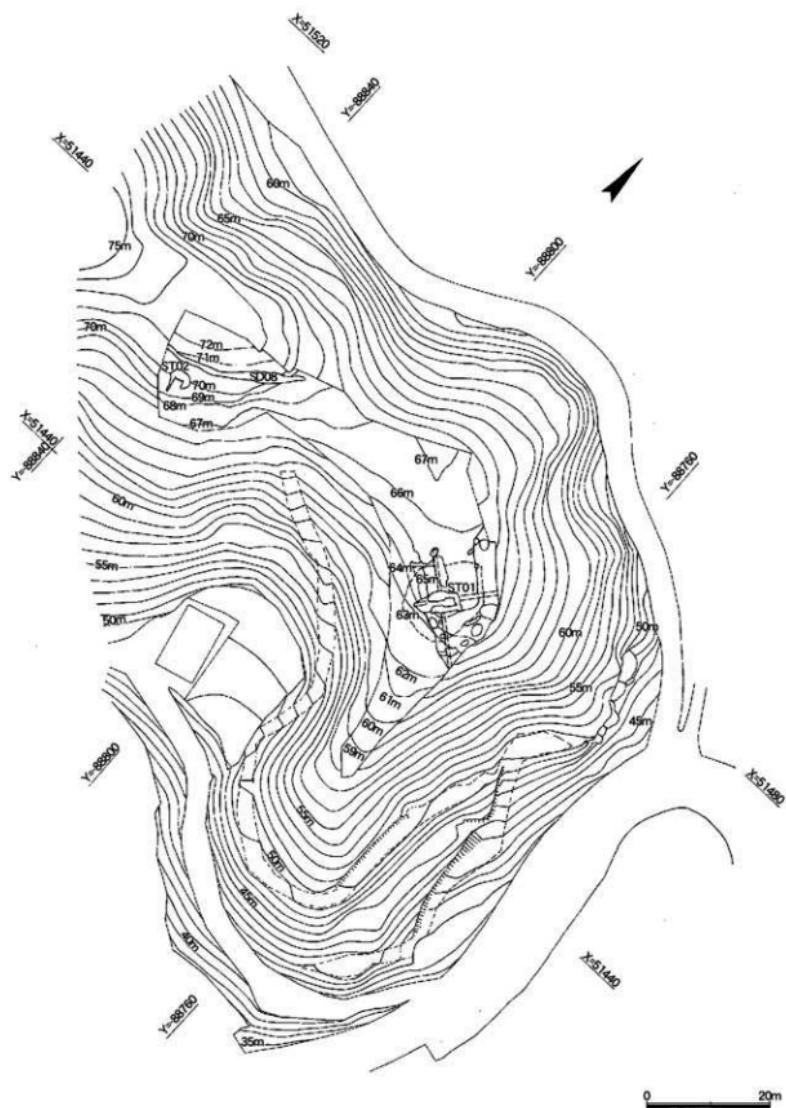
・埴丘 (図VIII-2 ~ VIII-5)

当初は、石室が露出している状態であったため、埴丘が残存していることを想定していなかったが、調査の結果、埴丘盛土が一部残存していることが分かった。墓道付近は、果樹園の段造成のためにカットされて急斜面となっている。東西 (図VIII-4)、南北ベルト (図VIII-5) 共に 5 層が埴丘盛土にあたる。盛土は、粘性が比較的強い明褐色粘質土の単層であり、版築状に別種の土を積み重ねることは行っていないが、5 ①、② 層で若干含有物に違いが見られるようである。3 層は埴丘流出土である。

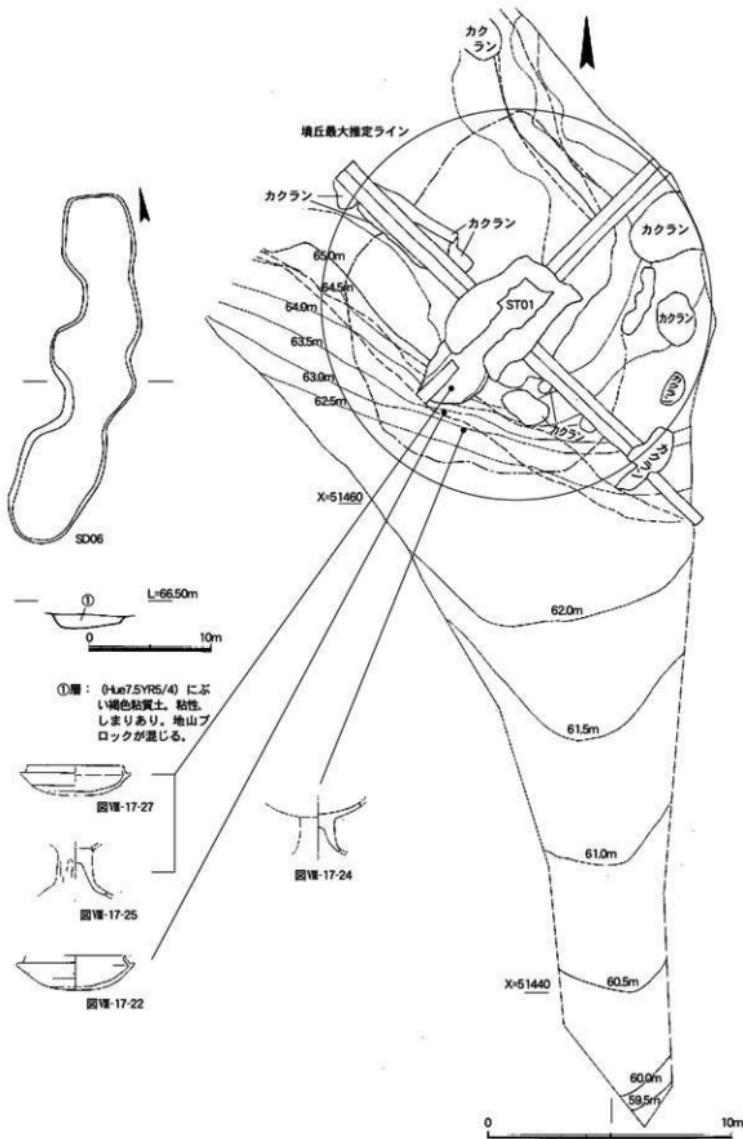
表土剥ぎ後の測量では、削平のため、地山の整形範囲はいびつな形に広がっており (図VIII-3)、明確に墳形を捉えることができなかったが、円墳と考えたい。直径は 12 ~ 15m を想定している。

・前庭部 (図VIII-6)

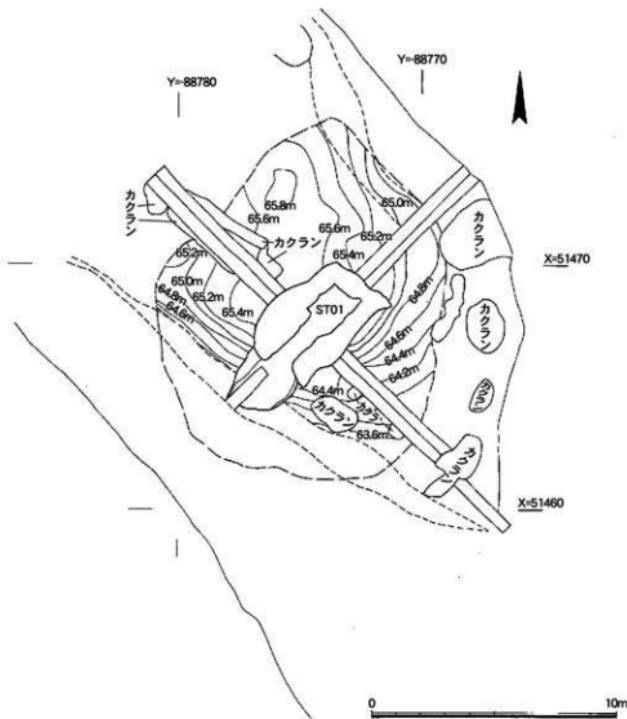
墓道の掘り込みから 1.5m ほど離れた埴丘斜面に土器の集中が見られた。土器は破碎され小片になった状態であった。須恵器の平瓶、杯、甕等が出土している。この中の須恵器甕 (図VIII-19 ~ 31) と



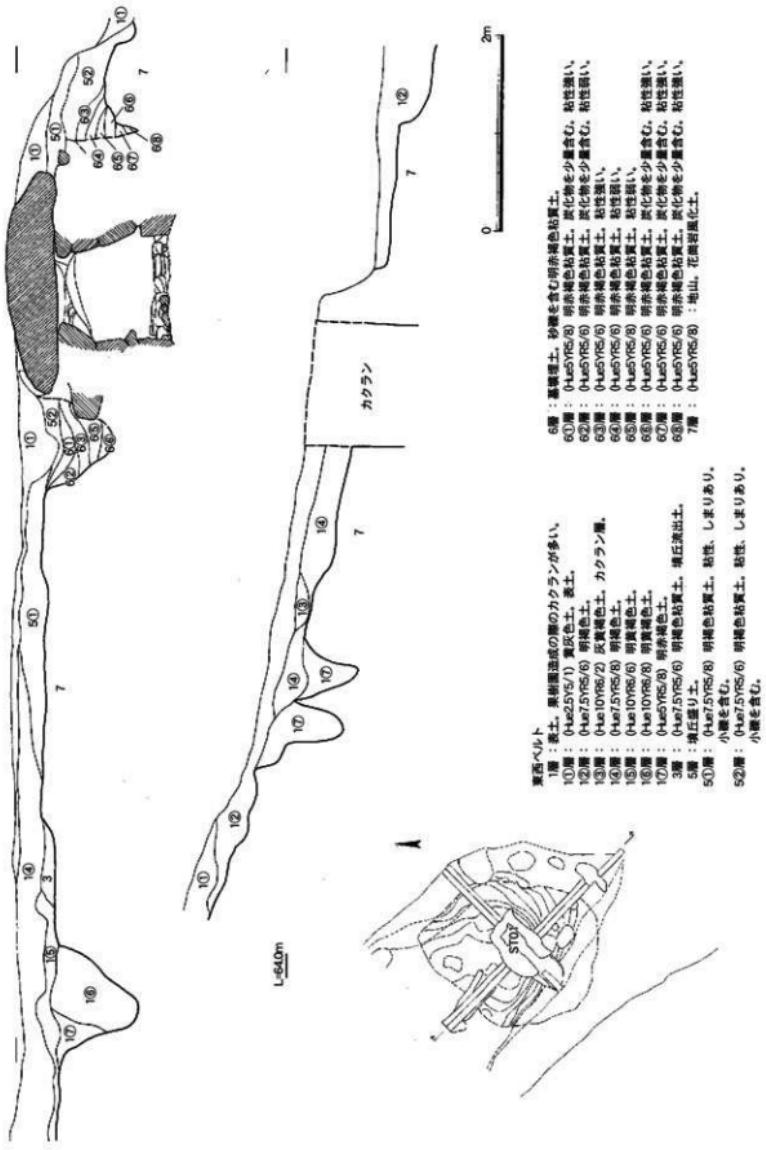
図VII-1 大坂古墳群遺構配置図 (1/800)



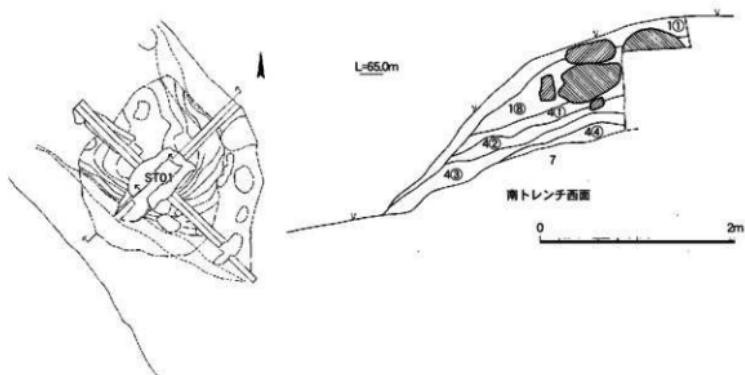
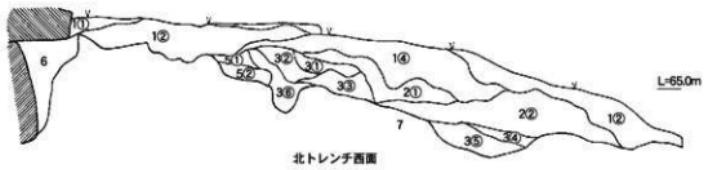
図VIII-2 ST01 古墳墳丘 (1/200)



図VIII-3 ST01 地山整形状況 (1/200)



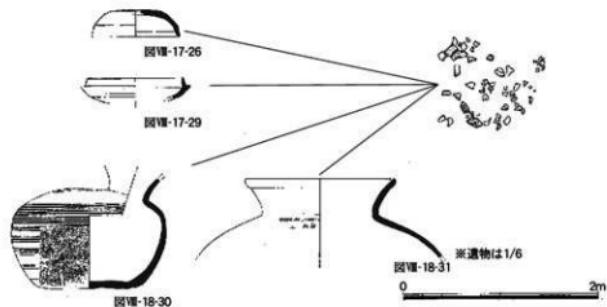
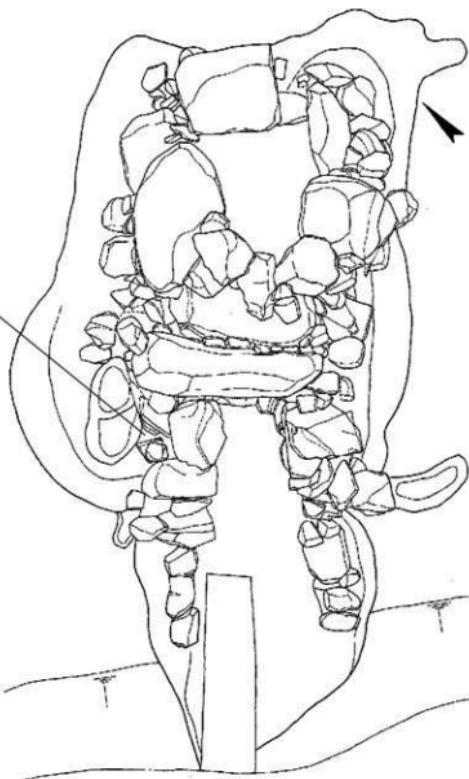
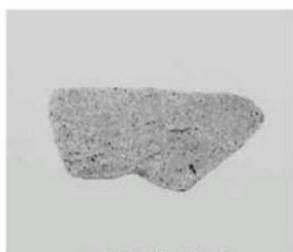
図VIII-4 ST01 東西トレンチ土層断面図 (1/50)



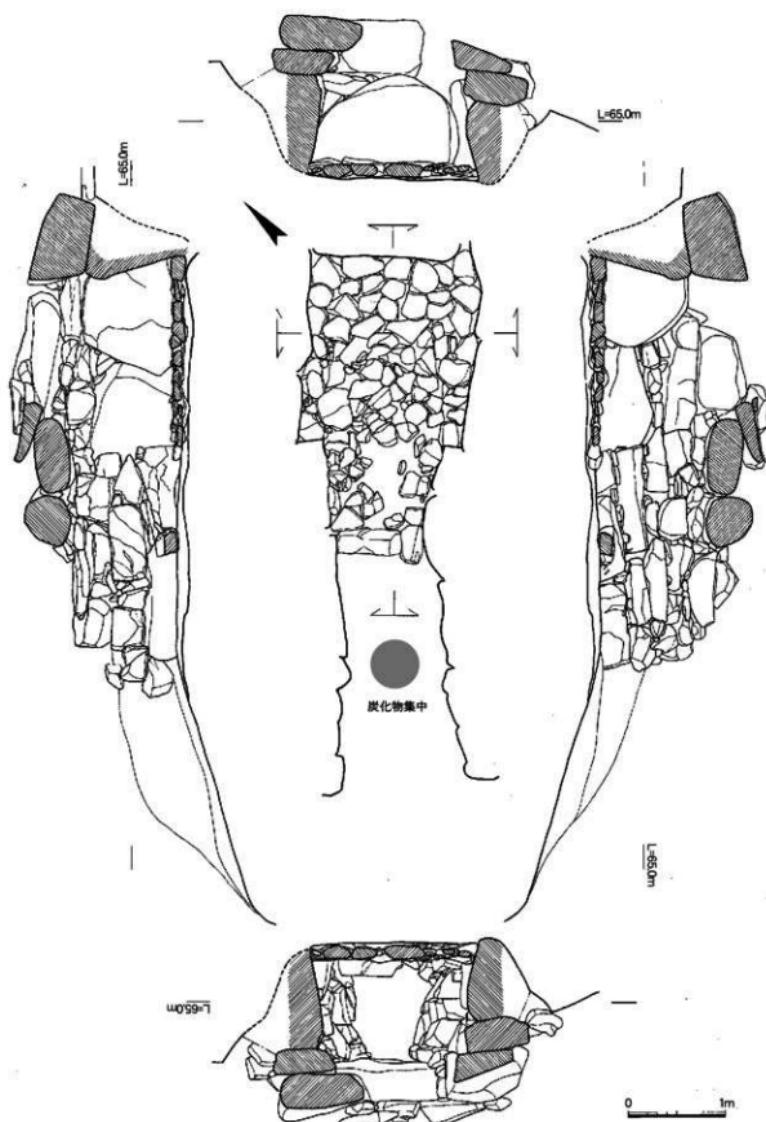
南北ベルト

- 1層：表土。
 1①層：(Hue2.5YR5/1) 黄灰色土。表土。
 1②層：(Hue7.5YR5/6) 明褐色土。
 1④層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色土。
 1⑥層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色土。近世～近代？
 2層：古代以降？の粘質土。
 2①層：(Hue7.5YR5/6) 明褐色粘質土。炭化物を極少量含む。粘性強い。
 2②層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。炭化物を極少量含む。粘性強い。
 3層：堆積流水土。
 3①層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。
 3②層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。炭化物を極少量含む。
 3③層：(Hue7.5YR5/6) 明褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。
 3④層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。地山塊多く含む。
- 3⑤層：(Hue7.5YR6/8) 暗褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。地山塊を多く含む。
 3⑥層：(Hue7.5YR5/8) 明赤褐色粘質土。しまりあり、粘性強い。
 4層：基礎埋土。
 4①層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。炭化物を極少量含む。
 4②層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。炭化物を極少量含む。
 4③層：(Hue10YR6/8) 明黃褐色粘質土。しまり、粘性あり。
 4④層：(Hue10YR6/6) 明黃褐色粘質土。しまりあり。
 5層：堆積盛土。
 5①層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。しまり、粘性あり。
 5②層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。炭化物を極少量含む。しまり、粘性あり。
 6層：(Hue5YR5/8) 明赤褐色粘質土。基礎埋土。しまり、粘性あり。
 7層：(Hue5YR5/8) 明赤褐色土。地山。花崗岩風化土。

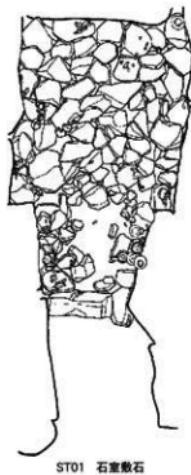
図VII-5 ST01 南北トレンチ土層断面図 (1/50)



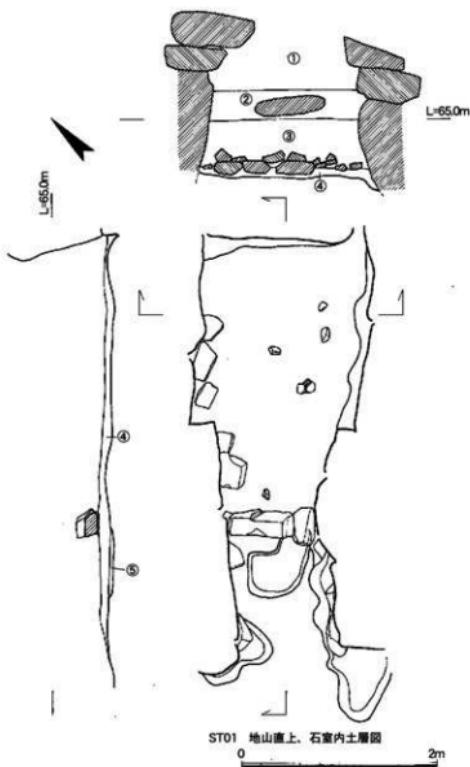
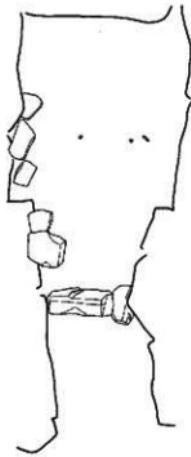
図版-6 STO1 古墳天井石 (1/50)



図VII-7 ST01 古墳石室 (1/50)



- ①層：(Hue7.5YR4/6) 褐色粘質土。腐植土。
- ②層：(Hue7.5YR5/8) 明褐色粘質土。しまりが強い。崩落した石材（小型・大型共に）を含む。
- ③層：(Hue7.5YR5/6) 明褐色粘質土。粘性、しまりが強い。床面近くに崩落した小型の石材が混じる。
- ④層：(Hue7.5YR5/6) 明褐色粘質土。石室内整地土。砂礫を多く含む。しまりが強く、粘性あり。
- ⑤層：(Hue7.5YR5/3) にぶい褐色粘質土。炭化物をわずかに含む。粘性、しまり弱い。



図VIII-8 ST01 古墳石室内堆積状況 (1/50)

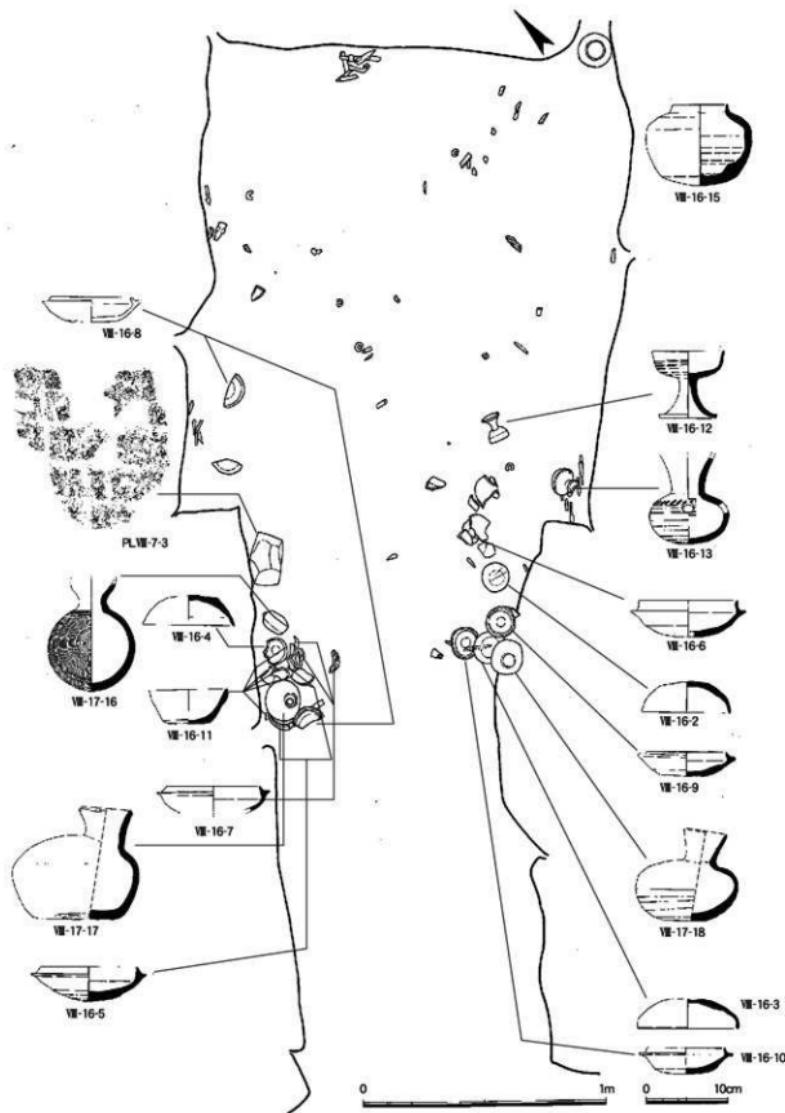
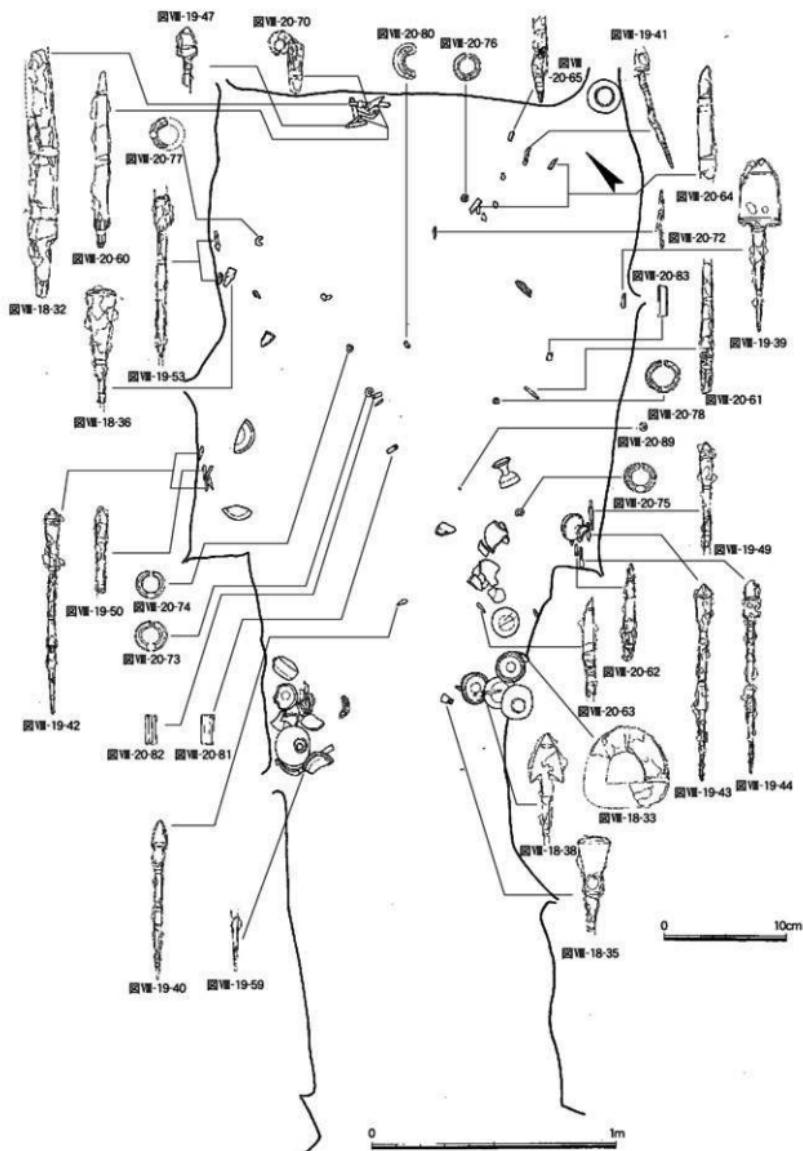
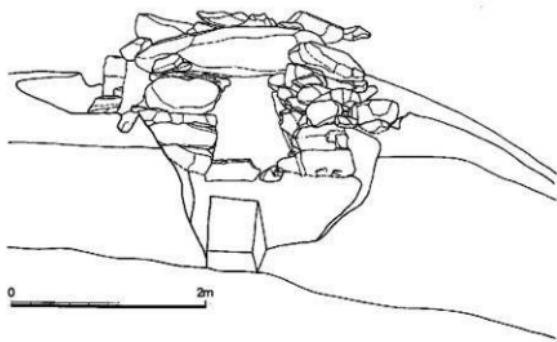


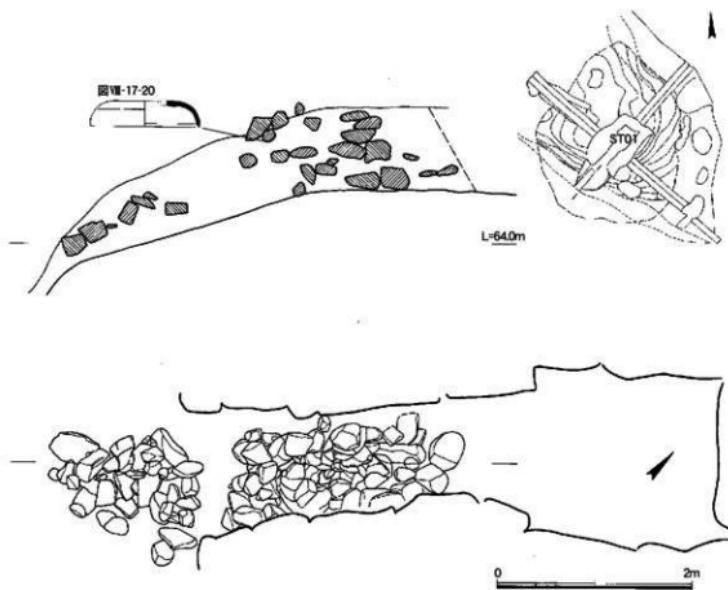
図9 ST01 石室内遺物出土状況 1 (1/20)



図VII-10 ST01 石室内遺物出土状況 2 (1/20)



図VII-11 ST01 古墳石室正面見通し (1/50)



図VII-12 ST01 古墳石室閉塞状況 (1/50)

羨道付近の墓壙出土品（図VII-6写真）は、接合はしないものの同一個体の胴部小片である。そのため前庭部の土器の集中には、石室築造時に行なわれた祭祀行為の遺物を含んでいる可能性が高い。これは、閉塞部付近や埴丘出土品の須恵器杯が古い特徴を残していることからも上記を考える理由である。

・石室（図VII-6～8、12）

石室内は天井付近まで土砂が堆積しており、3層に分層できる（図VII-8）。土砂は前述のとおり、天井石を外し、石室内から鉄製品等を掘り出したために堆積したのであろう。床面には崩落した石材が散乱していた。2層からも石室を構成していたと思われる石材が見つかっている。

石室は単室両袖の横穴式石室である。主軸をN 43° E にとる。玄室長1.9m、幅が奥壁側と玄門側共に1.7 mと方形に近い。天井部は開口しており、現存高は1.5 m。袖部は北部九州に通有な立柱石ではなく、塊石の平積であり、内側に突出しない。右袖部が四段、左袖部が五段を積む。腰石は奥壁一石、側壁は両側壁共に横に二石並べる。腰石は高さを1.0mと袖部の天井石の一段下の石材に合わせている。奥壁、両側壁共に内傾しており、上段の石積みもそれに合わせる形で持ち送られる。玄室床面には0.3m以下の石材を敷石としている。奥壁側はきれいに揃えて敷かれているのに対し、羨道側は乱雑に敷かれしており、羨道部は中央に敷石がない部分がある。調査中の所見として、羨道側の敷石下部から菅玉が出土しており、羨道側だけ敷石を敷きなおしている可能性が考えられる。

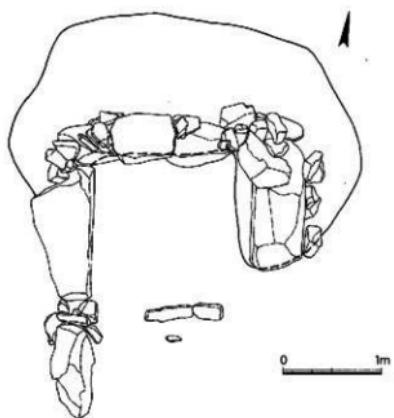
羨道は天井石がもう一、二石分墓道側に延びると思われ、推定長が2.3 m。幅は袖部側が1.2 m、墓道側が1.0 m、天井高は1.1 mである。羨道側壁は玄室と目地は通っているものの石材が小さく、大型の腰石も用いていない。袖部を構成している塊石は、羨道部の側壁を兼ねる。横長の石材を袖部の石材と目地を揃えて右側壁は一石、左側壁は二石並べる。羨道入口の床面には薄く炭化物が広がっていた。仕切り石は羨道中程の一ヶ所。仕切り石の外側から塊石の閉塞石を積み上げており、一部が墓道側に流れ出している。図VII-12は閉塞石の図であるが、断面は一部の石材を入れただけにとどまる。

墓道は長さ約2.8mで、床面幅は羨道側が約1.0 m、前庭部側は石列がある部分は1.2 m、掘り込みの幅は1.7m、深さ0.8mを確認した。前面を削平されているが、現状からそれほど延びないと思われる。墓道について調査者は、掘り込みだけと考えていたようだが、報告段階で一部塊石積みがあることを確認した。羨道側から1m程延びると思われ、二、三段積みであろうか。整理段階で確認したため、図VII-6の上面からの図や図VII-7の断面には入れることができたが、同図の立面には含めることができなかった。

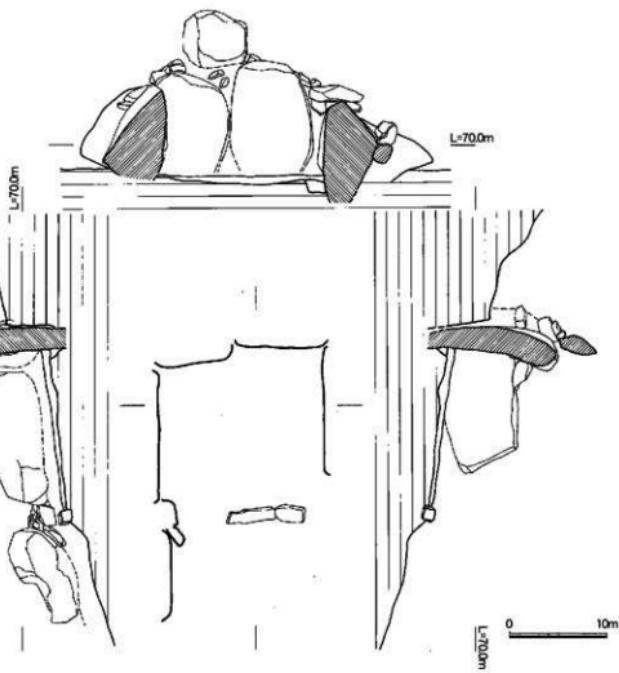
・遺物出土状況（図VII-9、10）

遺物の出土位置は、種別毎に出土位置におおよその傾向が見られる。土器類に関しては、仕切り石と袖部間の両側壁沿いと、玄室の袖部付近から出土したものが多い。しかし須恵器壺（図VII-16～15）だけは奥壁と左側壁の隅部にかませられた形で見つかった。型式的には新しく、追葬時の遺物と思われる。鉄製品は袖部近くの他、玄室側壁や奥壁沿いからまとまりを持ちつつ出土している。前述のとおり盜掘を受けているものの、出土遺物の多くは出土位置をおおよそ保っているのではないだろうか。鉄製品では大型品が少ないため、戦前に掘り出されたのは、伝承のとおり大型の鉄製品であったのだろう。装身具類は、袖部近くから1点が見ついているものの、他は玄室中央付近からの出土が多い。

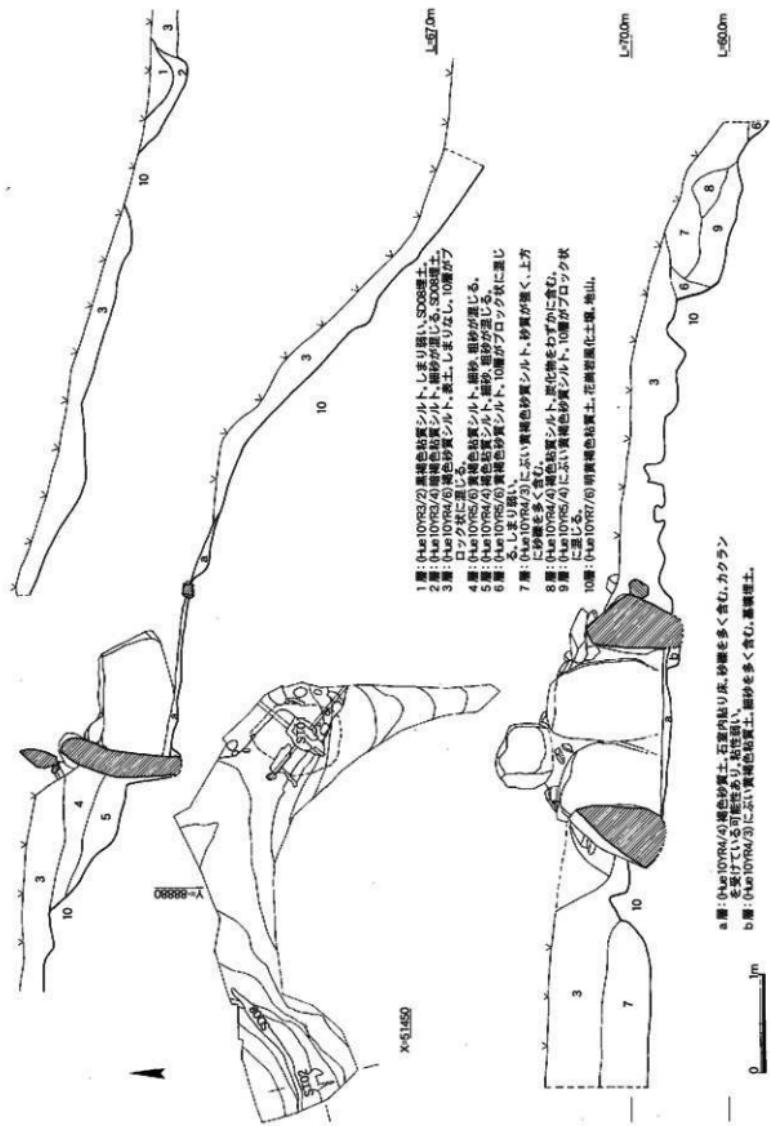
注目すべき遺物に線刻石材がある。玄門付近で見つかった石材の一つに格子状の線刻が見つかった（PL VII-7-3）。県文化財保護審議員の西田先生に鑑定していただいた結果、この線刻は自然にできたものではなく、人工的に彫られたものという鑑定をいただいた。この石材は石室石材が崩落したものであれば、石室内の他の石材にも線刻が見られるはずであるが、石室内では確認できいため、この可能性は考えられない。そのためPL VII-7-3は石室内に持ち込まれたことが考えられるが、類例を探すこと



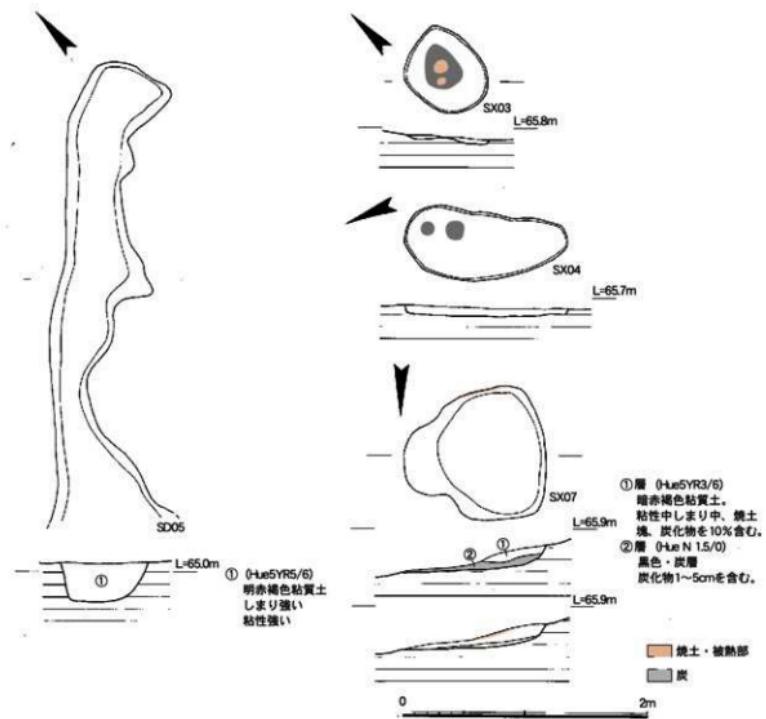
図VII-13 ST02古墳石室 (1/50)



図VII-14 ST02古墳石室 (1/50)



図III-15 ST02 南北東西トレーン土解図 (1/50)



図VII-16 溝・炭窯(1/40)

とができなかった。しかし出土した位置も副葬品が集中した部分であることから、持ち込まれたものと考えたい。

(2) ST02 (図VII-14、15)

・墳丘 (図VII-15)

果樹園造成の際に大きく削平を受けており、墳丘については規模、墳形共に不明である。当時の造作土としては、奥壁裏込め埋土(4、5層)を残すのみである。

・石室 (図VII-14)

ST01と同じく横穴式石室であり、主軸を N13°W にとる。しかしつつ大きく破壊を受けており、奥壁と両側壁の腰石付近を残すのみである。石室は袖部が残存していないため、詳しい石室構造や全長は不明であり、玄室残存長は 2.9m、奥壁幅 1.7m である。奥壁には縦位に配した石材を横に二石を並べ、

腰石上に一石を積む。側壁は横位に配した石材を右側壁が横に二石、左側壁に一石が残る。床面は貼床(a層)が残存するが、床面が石室開口部に向けてなだらかに傾斜しており、調査者も攪乱を受けている可能性を考えている。床面中央付近には仕切り石が残る。奥壁から仕切り石まで 1.6m である。遺物は出土していない。

(3) SD05 (図Ⅷ-16)

検出長は 3.8m で、幅は一定ではなく 0.2 ~ 0.7 m、深さは 0.2 m 程度。遺物は出土していないが、ST01 の墳丘下層から見つかっているため、ST01 築造以前の流路とできる。人工的な溝か雨水により削られた自然流路であるかは不明である。

(4) SX03 (図Ⅷ-16)

径が 0.7m 程度の円形を呈し、深さは極浅い。中央付近に炭化物と焼土が見つかった。

(5) SX04 (図Ⅷ-16)

1.3 × 0.6m、深さは 0.1m と浅い。炭化物が北隅近くで見つかった。

(6) SX07 (図Ⅷ-16)

1.2 × 1.1m、深さは 0.2m。南壁上端が焼けている。

SX03、04、07 は検出状況と規模からみると、炭窯もしくは鍛冶炉が想定されるが、鉄滓が出土していないことを考えると、前者の可能性が高いと思われる。遺物が出土していないため時期特定はできない。

3. 遺物

ST02 からは遺物は出土しておらず、今回掲載しているのは全て ST01 出土品である。これらを土器とそれ以外に分け、出土地点毎に石室、閉塞部付近、墳丘等に分けて詳述する。

(1) 石室内出土品 (図Ⅷ-17-1~15、図Ⅷ-18-16~18)

1 は土師器壺片。外器面に横方向のヘラミガキを施す。石室内からの唯一の土師器の実測可能品。2 ~ 18 は須恵器。2 ~ 4 は杯蓋。口径が 12 ~ 10cm 台で、天井部は回転ヘラ切り後ナデ調整のみを施す。5 ~ 11 は杯身。5 ~ 7 は受け部径が 13cm を超え、5, 6 は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリを施す。杯蓋とは径が異なり、これらは閉塞部や墓道出土品と径がほぼ同じである。8 ~ 10 は回転ヘラ切り後にヘラケズリを施しておらず、2 ~ 4 の杯蓋の調整と同一である。8 は羨道の右側壁の集中部出土品と玄室右側壁付近出土品が接合した。石室内では他の出土品は離れた位置の出土品が接合した例はない。11 は杯としたが蓋の可能性もある。12 は小型の無蓋高杯。13 は翫。口縁部が欠損する。14, 15 は壺。15 は口縁部が短く立ち上がる短頸壺の完形品。前述のとおり奥壁と側壁の間にかませられた形で出土している。16 は提瓶。口縁端部が欠損する。胴部にカキ目を施すが丁寧ではない。またカキ目を施していない側面は磨耗が進んでおり、使用方法に由来するものか? 17, 18 はほぼ完形の平瓶。17 は焼成が甘く、底部付近は土師器に近い色調を呈しており生焼けに近い。ヘラケズリを底部付近の小範囲にのみ施す。口縁部は外反気味に立ち上がる。18 は 17 と比して小型であり、回転ヘラケズリを丸底気味の底部から胴部中程まで施す。口縁部は直線的に立ち上がる。

(2) 閉塞部付近出土品（図VIII-18-19～23）

全て須恵器である。19、20は杯蓋。口径は13cm台であり、口唇部内面に段を有する。21、22は杯身。受け部径は14cm台。19は閉塞下層と墓道出土品が、21は閉塞下層とSTO1-3区土器集中部出土品が接合したもの。土器集中部出土品は構築時の遺物を含むと推測しており、閉塞石付近の出土品も同時期の遺物と思われる。23は甕の口縁部片。

(3) 墳丘他出土品（図VIII-18-24～29、図VIII-19-30、31）

24、25は土師器高杯の脚部片。26～31は須恵器。26は杯蓋。口径は10cm台だが、口唇部内面に段を有する。27～29は杯身。受け部径は13～14cm台。30は平瓶。口縁部を欠損する。胴部上～中程までカキ目を巡らす。胴部下半はタタキ後回転ヘラケズリを施す。31は焼成がやや甘く、小片に分れて出土した。3区土器集中部からは26、29～31が出土している。

(4) 石室出土鉄製品（図VIII-19-32～図VIII-21-72）

・短刀、板鍔（図VIII-19-32、33）

32は短刀もしくは刀子。遺存状態が悪く、分離が進んだ状態である。他にも破片は出土しているが、接合しなかった。鍔を装着する。33は板鍔と考えている。内孔が縦2.6×横3.0cm（推定）の隅丸台形を呈する。表面が剥離し、1/3が欠損する。

・鉄鎌（図VIII-19-34～図VIII-20-59）

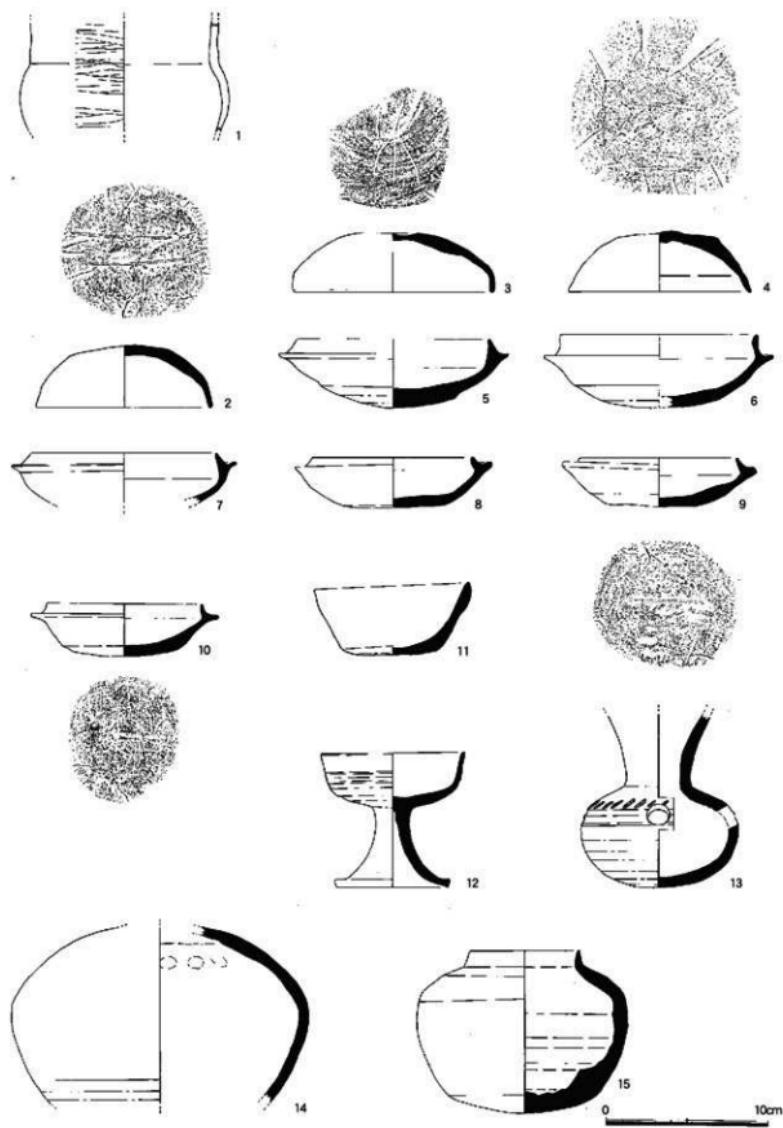
水野分類(2007)に従って記載するが、杉山分類(1988)も一部併記する。34～36は有茎鎌群方頭式。34、35は鎌身長が5cm台、36は7cm台。35の茎部は鉄鎌中で唯一断面が円形（八角形？）を呈する。他の鉄鎌の茎部は方形や長方形である。35、36は一部に木質を残す。37、38は有頸鎌群腸抉三角形式か。37は茎部幅が広く、鎌身端部が欠損する。38は腸抉が若干湾曲する。39は有頸鎌群三角形式の完形品。いわゆる平根系の鉄鎌。鎌身部は薄く、茎部の一部に木質が残る。40～53は有頸鎌群長頸鎌。40、41、46は鎌身部が角闘の長三角形を呈する。41は頭部から茎部が折り曲げられている。42～45は鎌身部がナデ闘の圭頭形。42～44は完形品。45は茎部が欠損しておりはっきりしないが、折り曲げか。48～50もナデ闘の圭頭式であるが、闘部が無闘により近い。52、53は片刃箭式。53は棘状闘か？54～59は茎部の小片。

・刀子、鍔（図VIII-21-60～68）

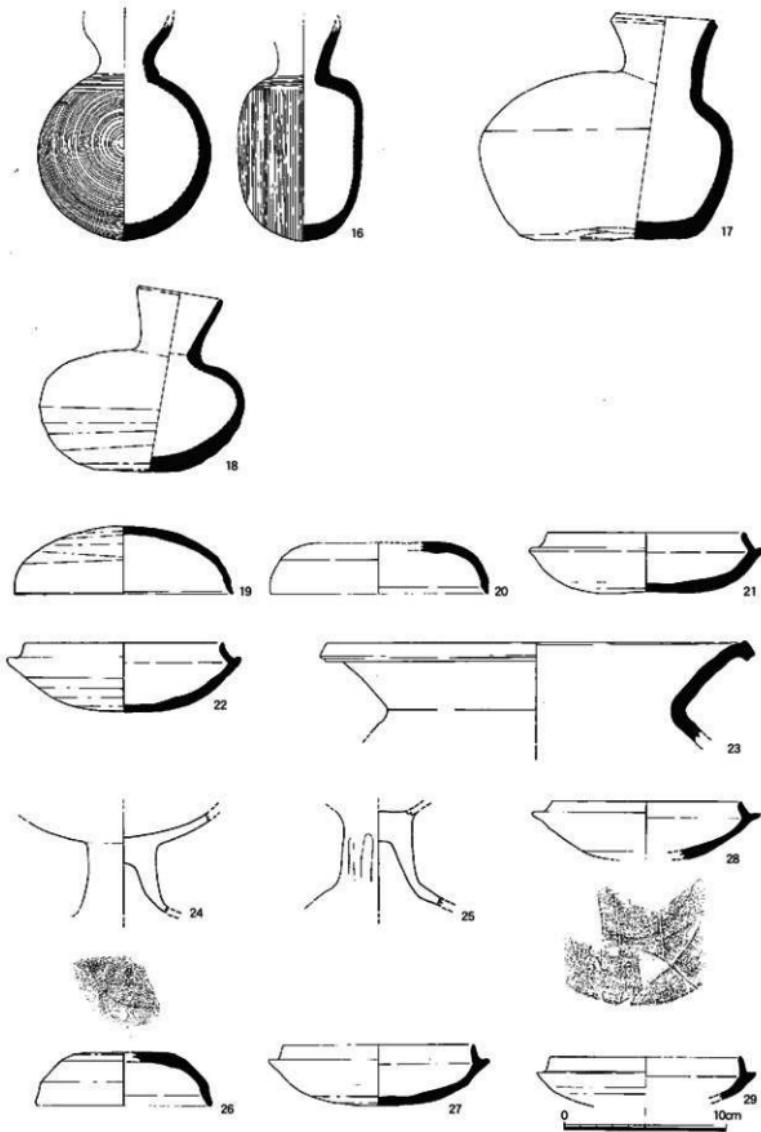
計測できるものは少ないが、刀身部が10cmを超える60、61、64、66と5cm前後の62、63に分けられる。60は完形品である。全長14.5cm。刀身部に対して茎部が短い。茎部には木質が残る。両闘で角闘に近いナデ闘である。61は刀身部先端が欠損する。茎部は木質に覆われているため、闘部の形状は不明。62は全長7.8cmの完形品である。刀身部と茎部の境付近にピン状の小さな突起があり、留具の可能性を考え図化したが、付着物の可能性もある。茎部は木質が多く残存しており、闘部の形状は不明。63は刀身部先端と茎尻を欠損する。茎部には木質が残存し、闘部の形状ははっきりしないが、両闘の可能性がある。64、66は刀身部片。出土品の中では60と並び大型品である。65は刀身部上半が欠損する。茎部は刀身部に対して外反り気味であり、端部は尖尻。闘部は不均等な両闘のナデ闘である。67と68は鍔か？遺存状態が悪い。

・その他（図VIII-21-69～72）

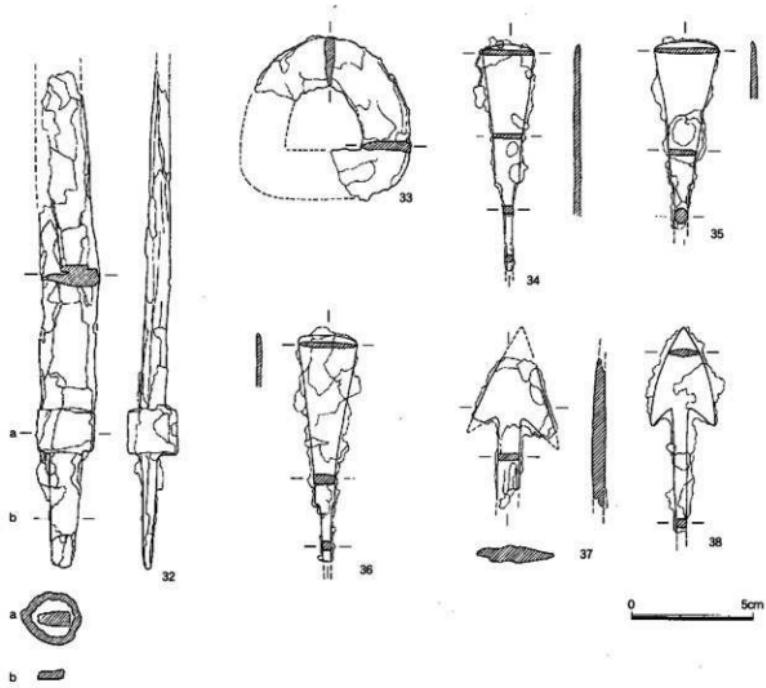
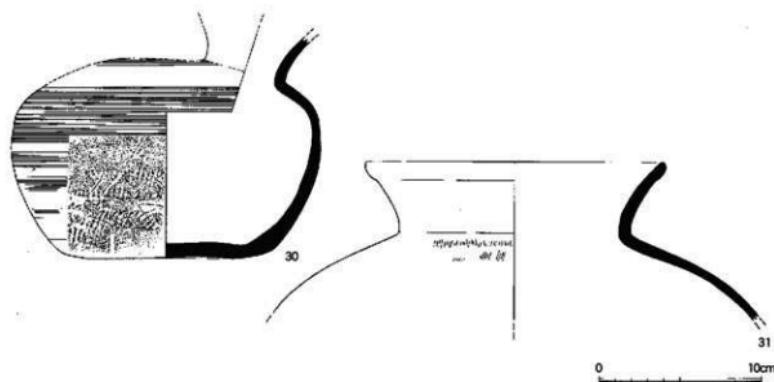
69、70は馬具の一部か。69は鉄具、71は両頭金具か。



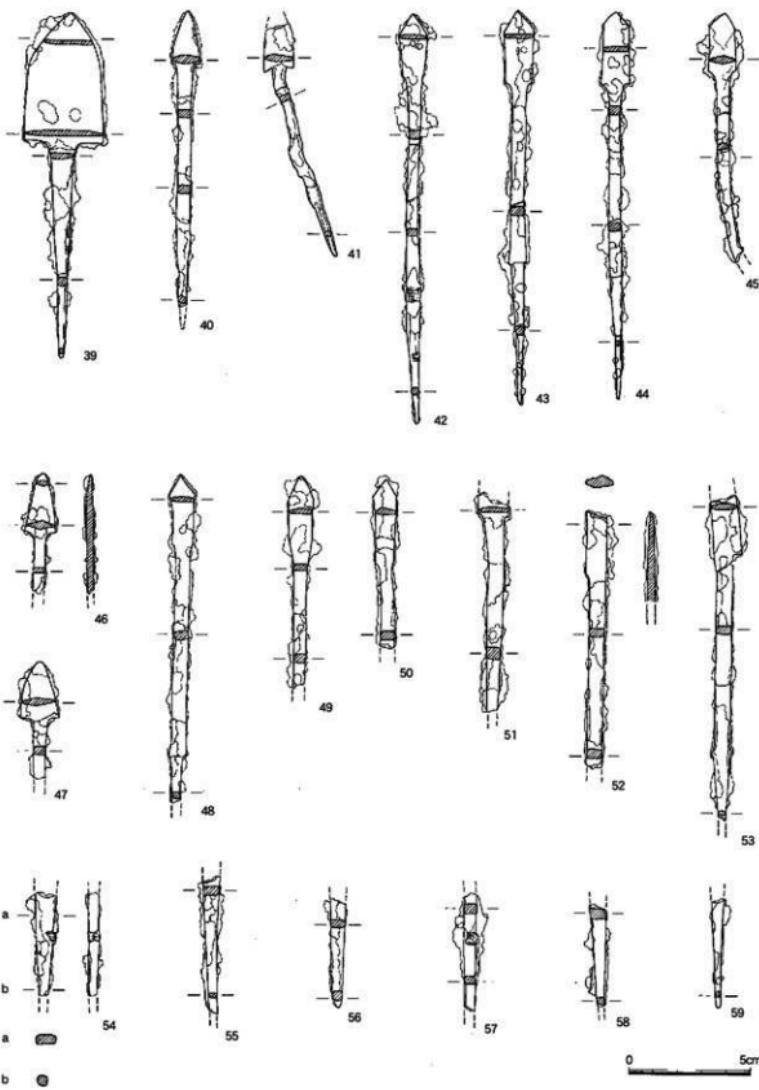
図VII-17 ST01出土土器1 (1/3)



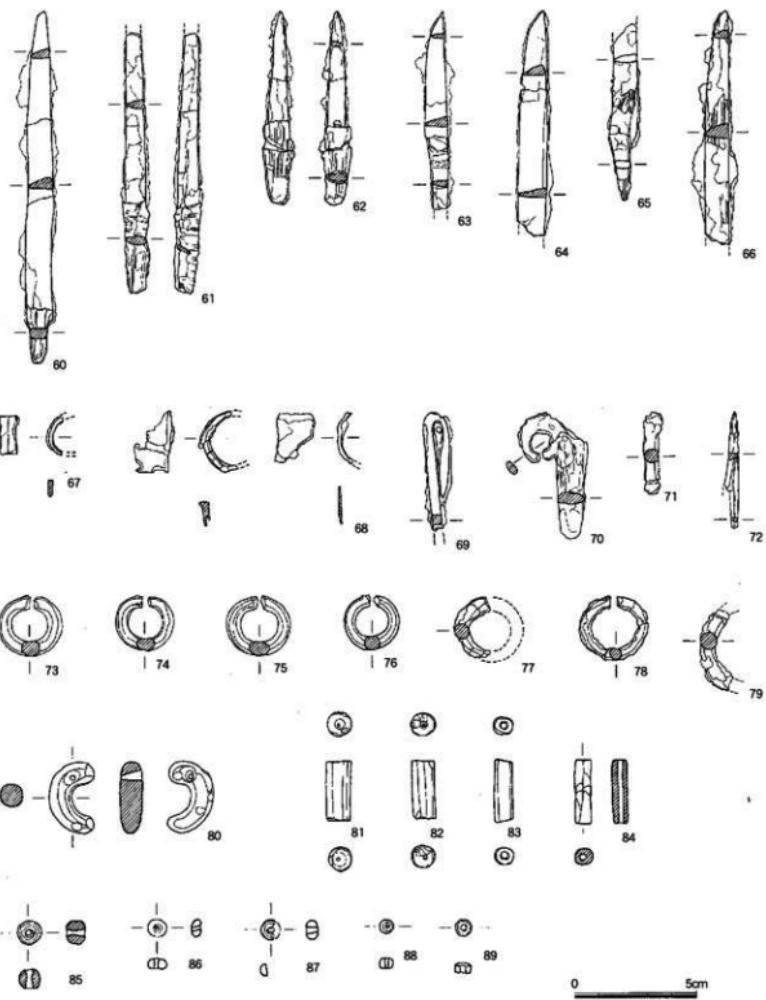
図VIII-18 ST01出土土器2 (1/3)



図VIII-19 ST01 出土土器・鉄製品 (1/3, 1/2)



図VII-20 ST01 出土鉄製品 (1/2)



図VIII-21 ST01 出土土器鉄製品・装身具類 (1/2)

(5) 石室出土装身具 (図VII-21-73~89)

73~78は耳環。73~76は青銅製品。完形品。77、78は遺存状態が悪く、表面は残っていない。青銅製か。大きさから耳環であろう。79は復元径が4cmを超える。遺存状態が悪いが、鍔の状態から青銅製と思われる。環頭の可能性も考えたが、はっきりしない。73~76と77~79は遺存状態が大きく異なるが、出土位置に違いはない。80はヒスイ製勾玉。鉄錐片面穿孔。目の位置が上がっておらず、宇野氏の分類では飼類となり、古式の特徴をもつ。80~84は管玉。81、82は鉄錐片面穿孔。碧玉製。両品は出土位置も近い。83、84は石錐両面穿孔か。表面が磨耗しており、81、82とは材質も異なる。伝世品か。84は破損品。85~89はガラス玉。85は表面が雲母に似ており金色を呈し、風化が進む。小丸玉。他は小玉。87は緑色で、他は深青色。

4. 小結

他地域と比して唐津市域は、横穴式石室墳の調査事例が少なかったことから、今回の調査は、市域の古墳を知る上で貴重な調査となった。ST01は玄門平積みの石室（小松、1995）であり、唐津市内では初例である。佐賀県内では牛津川上流域（多久市、小城市域）に類例がある。一本松古墳群（特にB号）に石室規模や平面プランが類似する。九州内では、宗像市周辺～糸島半島の玄界灘沿岸の古墳に類例がある。これまで玄界灘沿岸地域から伝わったことが、小松氏により指摘されていたが、ST01が見つかったことでそれがはっきりした。袖部が玄門立柱の石室が多くを占める九州内では、異質な石室である。分布の意義や出自を含め、今後追求すべきであろう。出土遺物は盜掘を受けている割には豊富であり、須恵器や鉄製品が多く出土している。その中でも、線刻石材は注目すべきである。築造時期は須恵器杯蓋の口唇部内面に段を有するものが出土していることから、TK43並行期に築造されたのではないだろうか。しかし他の須恵器はTK209並行以降のものが多いことから、築造時期がTK209並行に下ることも十分考えられる。

ST02は大きく破壊を受けており、遺物も出土していないため時期特定に苦慮する。石室形式もほとんど分からぬが、仕切り石の位置が袖部にあたるとは考えられず、石室内の間仕切りと考えられるところから、長方形プランであろうか。腰石が比較的薄く小さいことから、石室も大型にはならないものと思われる。時期はST01より後出で、終末期の横穴式石室と考えたい。

参考文献（縄文時代～古墳時代関係、本報告書全体）

- 赤坂亨 2006 「筑前・肥前北部の前期古墳」 第9回九州前方後円墳研究会実行委員会『前期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 宇野慎敏 2008 「北部九州における古墳時代後期の装身具」 第11回九州前方後円墳研究会実行委員会『後期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 大村直 1996 「鉄製農耕具の組成比」『史館』第28号 史館同人
- 大村直 1997 「鉄器の組成比と所有形態」『考古学研究』第44巻第2号 考古学研究会
- 藏富士寛 2009 「九州地方の横穴式石室」 杉井健『九州系横穴式石室の伝播と拡散』 北九州中国書店
- 小嶋篤 2009 「筑前の後・終末期古墳」 第12回九州前方後円墳研究会実行委員会『終末期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会

- 小松謙 1995 「肥前小城に築造される玄門構造の特異な横穴式石室」『佐賀考古3』 佐賀考古談話会
- 小松謙 1999 「肥前東部地域の横穴式石室—導入と展開および終末—」 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会 『九州における横穴式石室の導入と展開』 九州前方後円墳研究会
- 小松謙 2002 「肥前地域における古墳時代中・後期土師器の編年」 第5回九州前方後円墳研究会実行委員会 『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』 九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会 『九州における横穴式石室の導入と展開』 九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 2007 「埋葬施設—その変化と階層性・地域性—」 第10回九州前方後円墳研究会実行委員会 『中期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 重藤輝行 2008 「玄界灘沿岸地域の後期古墳」 第11回九州前方後円墳研究会実行委員会 『後期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 島津屋寛 2009 「熊本県下の古墳時代箱式石棺」 杉井健・竹中克繁 『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』 熊本大学文学部
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鎌について」 樅原考古学研究所 『樅原考古学研究所論集 第八 創立五十周年記念』 吉川弘文館
- 長直信 2009 「九州島における7世紀の須恵器—九州北部周辺の土器様相とその並行関係—」 第12回九州前方後円墳研究会実行委員会 『終末期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 橋本達也 2006 「九州における古墳前期の鉄製品」 第9回九州前方後円墳研究会実行委員会 『前期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 橋本達也 2008 「九州における古墳時代後期の甲冑と鉄鎌」 第11回九州前方後円墳研究会実行委員会 『後期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会
- 水野敏典 2007 「古墳時代鉄鎌研究の諸問題—東アジアの中の鉄鎌様式の展開」 『古代武器研究』 第8号 古代武器研究会
- 山崎純男 2004 「九州縄文土器の編年」 甲元真之 『先史・古代東アジア出土の植物遺存体(2)』
- 和田理啓 2007 「九州の鉄鎌—その変化」 第10回九州前方後円墳研究会実行委員会 『中期古墳の再検討』 九州前方後円墳研究会

表VII-1 大坂古墳群出土土器一覧表

件名番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調	調整		備考
				口径 底径	器高		外器面 内器面	外器面	
VII-17-1	09001367	ST01 No.17.18.20	土師器 盆		(6.8)	橙色	ミガキ	ナデ	
* -2	09001372	ST01 No.21	須恵器 杯蓋	10.8	3.8	灰白色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
* -3	09001371	ST01 No.24	須恵器 杯蓋	12.3	3.6	灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
* -4	09001374	ST01 No.30	須恵器 杯蓋	11.2	3.7	灰色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
* -5	09001375	ST01 No.33.36	須恵器 杯	(14.0)	(4.2)		回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	
* -6	09001380	ST01No9	須恵器 杯	(14.0)	(4.5)	暗オリーブ灰色 褐灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	
* -7	09001393	ST01 No.32	須恵器 杯	13.6	(3.1)	灰色	回転ナデ	回転ナデ	
* -8	09001377	ST01 No.27	須恵器 杯	12.0	3.1	オリーブ灰色 灰色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	
* -9	09001378	ST01 No.22	須恵器 杯	11.8	3.0	浅黄色 灰黄色	回転ナデ ナデ	回転ナデ	
* -10	09001376	ST01 No.23	須恵器 杯	11.5	3.2	灰黄色 浅黄色	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	
* -11	09001373	ST01 No.31.34.35. 40.55.58越	須恵器 杯蓋	9.6	4.4	オリーブ灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	
* -12	09001390	ST01 No.2	須恵器 高杯	8.8 7.1	8.3	灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	
* -13	09001391	ST01 No.60	須恵器 豚		(10.7)	暗灰色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	
* -14	09001396	ST01 No.4~7.11	須恵器 盆		(10.7)	灰褐色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ 指頭圧痕	
VII-18-15	09001360	ST01 No.37	須恵器 盆	6.6	10.0	灰白色 灰色	回転ナデ	工具によるナデ	
* -15	09001392	ST01 No.29他	須恵器 提瓶		(13.4)	褐灰色	回転ナデ カキ 目 ヘラケズリ		
* -17	09001363	ST01 No.11	須恵器 平瓶	5.9 9.5	13.9	にぶい赤褐色	回転ナデ ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	
* -18	09001362	ST01 No.25	須恵器 平瓶	5.2	11.3	青灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -19	09001368	ST01閉塞 下層No.1-1 基部3層No.1-2	須恵器 杯蓋	13.5	4.2	灰色 灰白色	回転ナデ 転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	
* -20	09001369	ST01閉塞	須恵器 杯蓋	(13.9)	3.1	灰色 黄褐色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	
* -21	09001381	ST01閉塞 下層No.2	須恵器 杯	(14.4)	(3.7)	灰黄色 黄灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -22	09001379	ST01閉塞 表土南	須恵器 杯	(14.4)	(4.2)	褐灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -23	09001361	ST01閉塞 下層No.3	須恵器 壺	(26.7)	(6.2)	暗灰黄色 灰黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	
* -24	09001366	ST01 3区	土師器 高杯		(6.3)	橙色		ナデ 工具痕	
* -25	09001365	ST01埴丘 表土複雜	土師器 高杯		(6.0)	にぶい赤褐色 明赤褐色	工具によるナデ	工具によるナデ	
* -26	09001390	ST01 3区No.11	須恵器 杯蓋	(10.8)	3.3	灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	
* -27	09001383	ST01埴丘 表土複雜 基部3層	須恵器 杯	(13.6)	(3.7)	黄灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	

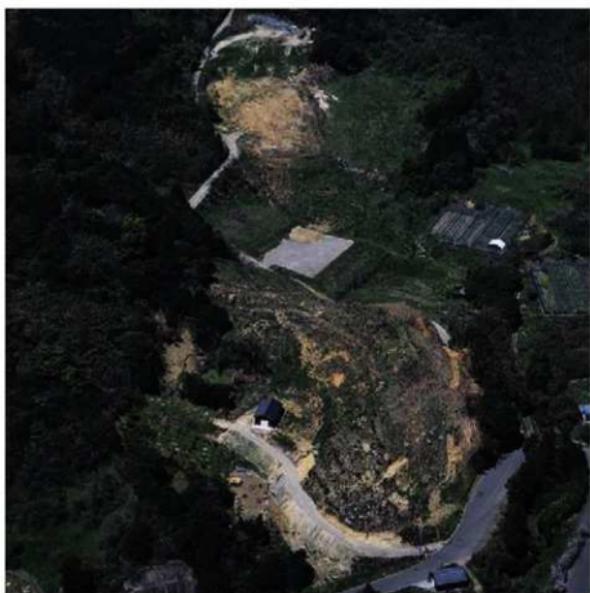
押出番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)		色調	調整		備考
				口径 底径	器高		外器面	内器面	
Ⅷ-18-28	09001394	ST01 3区表土	須恵器 杯	14.0	(3.5)	灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ナデ 回転ナデ	
* -29	09001382	ST01 No.213.14.16地	須恵器 杯	(13.4)	(2.6)	褐灰色 オリーブ灰色	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
Ⅷ-19-30	09001395	ST01 3区表土 No.12.10.11.12.21	須恵器 平瓶	(13.1)	(14.3)	暗灰黄色 黄灰色	カキ目 タタキ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	
* -31	09001364	ST01 3区 No.21.22.23.24	須恵器 瓶	(18.5)	(9.7)	褐灰色	ナデ タタキ	ナデ タタキ	

表Ⅷ-2 大坂古墳群出土鉄製品・耳環・玉類一覧表

押出番号	登録番号	出土地点	器種	法 量 (cm)					備 考
Ⅷ-19-32	09001263	ST01 No.45	鉄器 短刀?	残存長20.3	最大幅2.3	最大厚2.15			
* -33	09001241	ST01 No.52	鉄器 板鈎	最大長4.4	最大幅4.35	最大厚0.35			
* -34	09001231	ST01 玄室數石下 東半分	鉄器 鉄鏡	残存長9.25	縦身部長5.65	縦身部幅2.15	縦身部厚0.25		
* -35	09001230	ST01 No.51 右門	鉄器 鉄鏡	残存長7.7	縦身部長5.8	縦身部幅2.6	縦身部厚0.2	茎部 残存長1.9	木質残 茎部幅0.6 茎部厚0.7
* -36	09001229	ST01 No.63.64	鉄器 鉄鏡	残存長9.4	縦身部長7.0	縦身部幅2.4	縦身部厚0.2	茎部 残存長2.4	木質残 茎部幅0.4 茎部厚0.4
* -37	09001233	ST01 玄室南	鉄器 鉄鏡	残存長6.2	縦身部残存長3.3	縦身部残存幅3.1	縦身部厚0.5	茎部幅0.9	茎部厚0.25
* -38	09001232	ST01 玄室No.55	鉄器 鉄鏡	残存長8.4	縦身部長4.1	縦身部幅2.7	縦身部厚0.35	茎部 残存長4.3	茎部幅2.8 茎部厚0.4
Ⅷ-20-39	09001209	ST01 玄室No.53ほか	鉄器 鉄鏡	長さ14.2	縦身部長5.3	縦身部幅3.3	縦身部厚0.2	茎部長8.8	木質残
* -40	09001211	ST01 玄室No.73ほか	鉄器 鉄鏡	残存長12.05	縦身部長2.1	縦身部幅1.25	縦身部厚0.4	茎部残存長9.95	茎部幅0.3 茎部厚0.35
* -41	09001218	ST01 玄室No.16ほか	鉄器 鉄鏡	残存長6.7	最大幅1.7	最大厚0.25			
* -42	09001212	ST01 玄室No.47.52	鉄器 鉄鏡	長さ16.8	縦身部長2.6	縦身部幅1.25	縦身部厚0.2	頸部 長8.6 頸部幅0.75	頸部厚0.3 茎部長5.6 茎部厚0.3
* -43	09001210	ST01 玄室No.75ほか	鉄器 鉄鏡	長さ16.2	縦身部長3.0	縦身部幅1.2	縦身部厚0.2	頸部長7.4 頸部幅0.4 茎部長5.6 茎部幅0.3	茎部厚0.5
* -44	09001213	ST01 玄室No.47.52	鉄器 鉄鏡	長さ15.85	縦身部長3.0	縦身部幅1.2	縦身部厚0.2	茎部 長13.85 幅0.5	茎部幅0.4
* -45	09001219	ST01 玄室No.62付近	鉄器 鉄鏡	残存長10.15	縦身部長2.9	縦身部幅1.1	縦身部厚0.45	茎部幅0.5	茎部厚0.3
* -46	09001220	ST01 No.51付近	鉄器 鉄鏡	残存長4.9	縦身部長2.5	縦身部幅1.35	縦身部厚0.4	茎部 残存長2.4 幅0.5	茎部厚0.2
* -47	09001262	ST01 No.42	鉄器 鉄鏡	残存長4.85	縦身部長2.35	縦身部幅1.5	縦身部厚0.35	茎部 残存長2.5 幅0.6	茎部厚0.4
* -48	09001214	ST01 No.51付近	鉄器 鉄鏡	残存長13.45	縦身部長2.9	縦身部幅1.1	縦身部厚0.2	頸部 長8.7 幅0.6 頸部幅0.4	頸部厚0.3
* -49	09001215	ST01 No.75 No.78	鉄器 鉄鏡	残存長8.7	縦身部長3.2	縦身部幅1.2	縦身部厚0.25	頸部 幅0.45 頸部厚0.4	
* -50	09001228	ST01 No.56	鉄器 鉄鏡	残存長9.0	縦身部残存長1.0	縦身部幅1.3	縦身部厚0.25	茎部 残存長8.0 幅0.4	茎部厚0.6
* -51	09001216	ST01 玄室	鉄器 鉄鏡	残存長9.0	縦身部残存長1.0	縦身部幅1.3	縦身部厚0.25	茎部 残存長8.0 幅0.5	茎部厚0.45

桝因番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
W-20-52	09001227	ST01 玄室	鉄器 鉄鑓	残存長11.6 縱身部長2.6 縱身部幅0.8 縱身部厚0.3 基部 残存長9.0 基部幅0.65 基部厚0.4	
# -53	09001217	ST01 No.69 No.70	鉄器 鉄鑓	残存長13.3 縱身部長2.5 縱身部幅1.2 縱身部厚0.25 基 部長8.15 基部幅0.8 基部厚0.4 基部長7.35 基部幅0.3 基部厚0.2	
# -54	09001221	ST01 玄室	鉄器 鉄鑓	残存長3.25 最大幅0.9 最大厚0.4	
# -55	09001222	ST001 玄門	鉄器 鉄鑓	残存長5.6 最大幅0.7 最大厚0.4	
# -56	09001226	ST01 No.51付近	鉄器 鉄鑓	残存長4.5 最大幅0.6 最大厚0.4	
# -57	09001224	ST01 玄室	鉄器 鉄鑓	残存長4.9 最大幅0.5 最大厚0.35	
# -58	09001225	ST01 玄室床	鉄器 鉄鑓	残存長4.5 最大幅0.6 最大厚0.4	
# -59	09001223	ST01 玄室 No.57	鉄器 鉄鑓	残存長4.5 最大幅0.5 最大厚0.45	
W-21-60	09001234	ST01 No.14 No.43	鉄器 刀子	長さ14.45 縱身部長12.7 縱身部幅1.25 縱身部厚0.5 基 部長1.6 基部幅0.7 基部厚0.5	基部木質残
# -61	09001236	ST01No.62 付近 No.80	鉄器 刀子	残存長10.7 縱身部残存長7.0 縱身部幅0.9 縱身部厚0.4 基部長3.7 基部幅1.1 基部厚0.4	基部木質残
# -62	09001240	ST01 No.62 No.65	鉄器 刀子	長さ7.8 縱身部長4.6 縱身部幅0.8 縱身部厚0.2 基部長 3.2 基部幅1.0 基部厚0.35	木質残
# -63	09001235	ST01 No.38	鉄器 刀子	長さ7.8 縱身部長4.9 縱身部幅1.0 縱身部厚0.4 基部長 2.9 基部幅0.7 基部厚0.3	
# -64	09001237	ST01 No.39 No.13	鉄器 刀子	縦身部残存長9.2 縱身部幅1.2 縱身部厚0.4	基部木質残
# -65	09001238	ST01 No.15	鉄器 刀子	残存長7.15 縱身部残存長5.05 縱身部幅1.05 縱身部厚 0.35 基部長2.1 基部幅0.6 基部厚0.35	基部木質残
# -66	09001239	ST01 玄室	鉄器 刀子	縦身部残存長9.6 縱身部幅1.0 縱身部厚0.55	一部木質残
# -67	09001249	ST01 玄室	鉄器 不明	最大長1.5 最大幅0.7 最大厚0.2	
# -68	09001250	ST01 玄室	鉄器 不明	最大長1.6 最大幅1.2 最大厚0.1	接合不可、同一個体2点
# -69	09001242	ST01 玄室	鉄器 鋏具	最大長4.9 最大幅0.4 最大厚0.4	
# -70	09001247	ST01 玄室 No.46	鉄器 馬具	最大長5.1 最大幅1.0 最大厚0.4	一部木質残
# -71	09001246	ST01 玄室	鉄器 頭具	最大長3.35 最大幅0.6 最大厚0.6	
# -72	09001248	ST01 玄室 No.71	鉄器 不明	最大長4.7 最大幅0.3 最大厚0.2	
# -73	09001254	ST01 No.79	青銅製品 耳環	径2.6×2.5 厚さ0.7×0.6 重量13.3g	
# -74	09001252	ST01 No.41	青銅製品 耳環	径2.35×2.25 厚さ0.7×0.5 重量8.9g	
# -75	09001253	ST01 No.59	青銅製品 耳環	径2.7×2.4 厚さ0.7×0.6 重量14.1g	
# -76	09001251	ST01 No.18	青銅製品 耳環	径2.3×2.25 厚さ0.65×0.6 重量7.2g	
# -77	09001243	ST01 No.68	青銅製品 耳環	復元径2.8×2.9 厚さ0.6	
# -78	09001244	ST01 No.83	青銅製品 耳環	径2.9×2.6 厚さ0.5×0.5	
# -79	09001245	ST01 玄室北	青銅製品 不明	復元径4.3 厚さ0.7	

博団番号	登録番号	出土地点	器種	法量(cm)	備考
W-21-80	09001260	ST01 玄室 No.74	玉製品 勾玉	全体長3.0 全体幅1.95 中間径0.95×0.9 孔径0.45×0.35 0.2×0.2	鉄錐片面穿孔
* -81	09001255	ST01 No.1	玉製品 管玉	径1.0×1.0長さ2.45重量4.6g	鉄錐片面穿孔
* -82	09001256	ST01 No.48	玉製品 管玉	径0.95×0.9長さ2.4重量3.8g孔径0.3×0.25 0.15×0.15	
* -83	09001257	ST01 No.49	玉製品 管玉	径0.7×0.8長さ2.55重量2.4g孔径0.3×0.25	両面穿孔
* -84	09001208	ST01 No.62付近	玉製品 管玉	長さ2.6 径0.7×0.7 重量1.5g	
* -85	09001206	ST01 玄室北	玉製品 丸玉	径1.0×0.95厚さ0.8孔径0.3×0.3 重量2.0g	
* -86	09001207	ST01 玄室内	玉製品 ガラス小玉	復元径0.9×0.7 孔径0.1 厚さ0.4 重量0.5g	
* -87	09001205	ST01 玄室南	玉製品 ガラス小玉	復元径0.8 孔径0.2×0.25 厚さ0.5 重量0.3g	
* -88	09001259	ST01 玄室	玉製品 ガラス小玉	径0.6×0.6 高さ0.3×0.4 重量0.2g	
* -89	09001258	ST01 玄室 No.54	玉製品 ガラス小玉	径0.7×0.7 高さ0.3×0.4 重量0.2g	



1. 調査区全景 1 (調査前、南から)



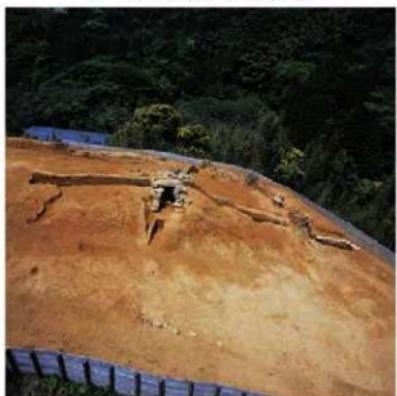
2. 調査区全景 2 (北から)



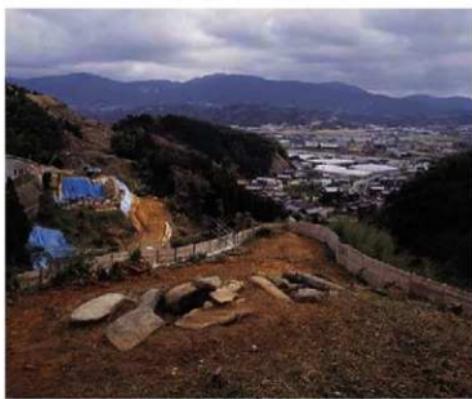
1. 調査区全景 3（上空から）



2. ST01 全景 1（上空から）



3. ST01 全景 2（南から）



1. ST01 調査前（西から）



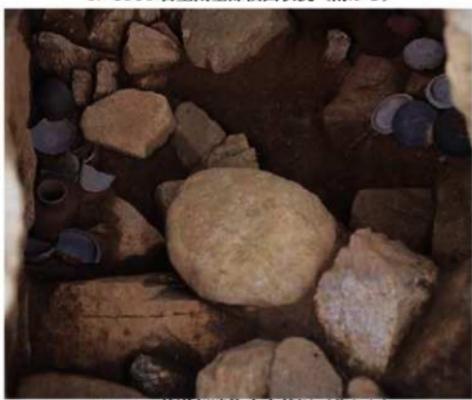
2. ST01 墳丘検出状況（南東から）



3. ST01 墓道前面遺物出土状況（南から）



1. STO1 石室閉塞部検出状況（南から）



2. STO1 漢道部遺物出土状況（北から）



3. STO1 石室内遺物出土状況（南から）



1. ST01 石室床面全景（南から）



2. ST01 右袖部（北から）



3. ST01 左袖部（北から）



1. ST02 全景（南から）



2. ST02 石室全景（南から）



3. SX03 断面（北から）



1. ST01 石室出土須恵器杯・杯蓋集合

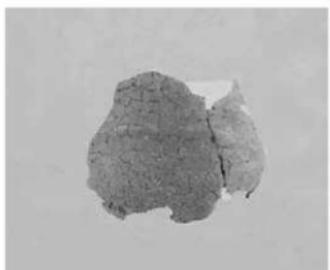


2. ST01 石室出土須恵器高杯・壺類集合



3. ST01 出土石製品？(図II-9)

ST01 出土土器 1、石製品



1. ST01 石室出土土師器壺 (図VIII-17-1)



2. ST01 石室出土須恵器杯蓋 (図VIII-17-2)



3. ST01 石室出土須恵器杯 (図VIII-17-9)



4. ST01 石室出土須恵器杯 (図VIII-17-10)



5. ST01 石室出土須恵器杯 (図VIII-17-11)



6. ST01 石室出土須恵器高杯 (図VIII-17-12)



7. ST01 石室出土須恵器壺 (図VIII-17-15)



8. ST01 石室出土須恵器壺 (図VIII-17-15)

ST01 出土土器 2



1. ST01 石室出土須恵器提瓶 (図版18-16)



2. ST01 石室出土須恵器平瓶 (図版18-17)



3. ST01 石室出土須恵器平瓶 (図版18-18)



4. ST01 漢道付近出土須恵器集合



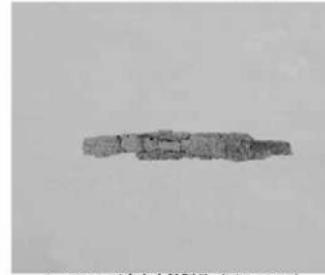
5. ST01 出土須恵器杯蓋 (図版18-19)



6. ST01 墓道他出土土器集合



7. ST01 出土須恵器杯 (図版18-22)



8. ST01 石室出土鉄製品 (図版19-32)

ST01 出土土器 3、ST01 出土鉄製品 1



1. ST01 石室出土鉄製品 (図VIII-19-33)



2. ST01 石室出土鉄鐵集合① (図VIII-19)



3. ST01 石室出土鉄鐵集合② (図VIII-19)



4. ST01 石室出土鉄鐵③ (図VIII-20-37)



5. ST01 石室出土鉄鐵④ (図VIII-20)



6. ST01 石室出土鉄鐵⑤ (図VIII-20)



7. ST01 石室出土鉄鐵⑥ (図VIII-20)



8. ST01 石室出土刀子① (図VIII-21)

ST01 出土鉄製品 2



1. ST01 石室出土刀子② (図Ⅷ-21)



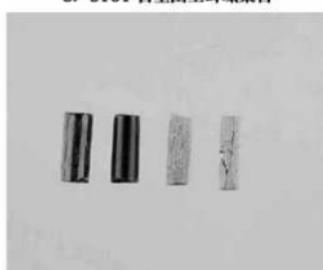
2. ST01 石室出土鉄製品集合



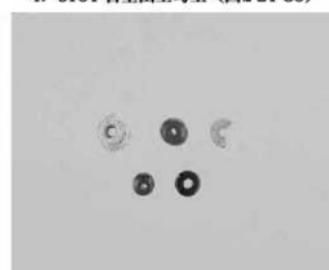
3. ST01 石室出土耳環集合



4. ST01 石室出土勾玉 (図Ⅷ-21-80)



5. ST01 石室出土管玉集合



6. ST01 石室出土小玉集合

ST01 出土鉄製品 3、ST01 出土耳環、ST01 出土玉類

付 論

1. 仁田古墳群1区出土棺蓋について

棺蓋について、取上げ後の計測結果は表III-3のとおりである。計測の結果、下記のことが判明した。
1、20世紀代と推測している棺蓋は、器壁が厚手のものが多いため、重量は（計測していないため厳密には言えないが、）同じ大きさの棺蓋と比して重い傾向がある。

2、新しい蓋になるほど頸部径と口径、最大径の差が小さいものが多い。

また上記の特徴を調べるために、管見に触れた年代が判明している棺蓋を年代順に並べたものが図IX-1である。2類とした蓋はおおよそ18世紀代に収まると考えられ、仁田古墳群1区出土品も同時期であろう。1類は当遺跡も含め、最も出土数が多く、現在でも畠の片隅で普通に見かけるものである。棺蓋の編年については、今回参照した東中川氏他が行なっているが、18世紀以降の変遷について、いまだに編年が確立していない。これは棺蓋自体の変化が少ないとや、記年銘資料が得られていないためであり、今後の良好な資料の増加に期待したい。

2. 唐津市域の古墳の分布について

唐津市内では古墳の調査事例が少なく詳細な分布図が存在しない。そのため、『唐津市史』や『佐賀県遺跡地図』等に掲載されている埋葬施設の分布図（図IX-2、3）を作成した。一部所在や名称が不確かなものも含まれている。

竪穴式石室墳は非常に少なく、玉島川、松浦川、徳須恵川流域の数例に限られる。

竪穴系横口式石室墳は、古い調査では小型竪穴式石室とされているものがあり、判別できないので、両者を同一のドットで示した。両者の分布は佐志川流域、宇木・半田川流域を中心とする。

横穴式石室は車室墳が多くを占めること、群集墳が発達しないことが特徴として挙げられる。分布域も大きく変わり、島嶼部（特に北部）にも古墳が築かれるようになる。加部島や湊地区には大型墳（径20m以上とする）も築かれる。これらには、漁労具が副葬されることが特徴の一つである。

玉島川流域では前期～中期には、谷口、横田下古墳をはじめ大型墳が築かれるが、後期には下流域の島田塚以外に大型墳は知られていない。また竪穴系横口式石室は最初期の谷口古墳を除き、これまでのところ見つかっていない。初期横穴式石室以外には渕上地区で特徴的な古墳が見つかっている。前述した大坂古墳群STO1の他、渕上古墳は肥後地域の影響を強く受けた石室構造をもつ。

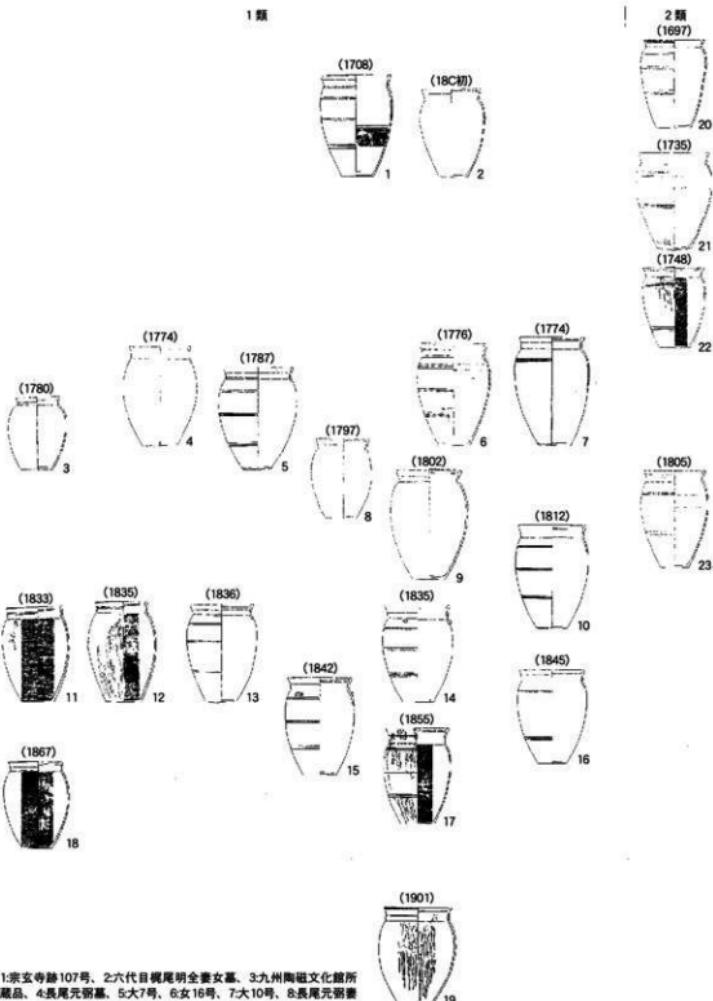
この他北波多地区では、既に消滅しているが、前方後円墳や大型の円墳、規模の大きな群集墳も知られており、唐津地区の古墳分布の中心地の一つである。これに対し松浦川上（巣木川）流域の相知町や巣木町では古墳の分布が希薄であり、好対照をなす。

上記のように唐津市域の古墳の分布について気付いたことを記した。当地域の古墳について、個別の古墳については注目されることが多いが、全体を通して語られることが少ない。これは資料的な制約が大きいためもあるが、今後は古い調査資料にも注目し資料の充実を図る必要がある。

今回の報告では多くの方にご教授をいただいたが、時間的な制約と筆者の怠慢のため宿題を多く残す結果となった。今後の報告でその責を果たしたい。

1類

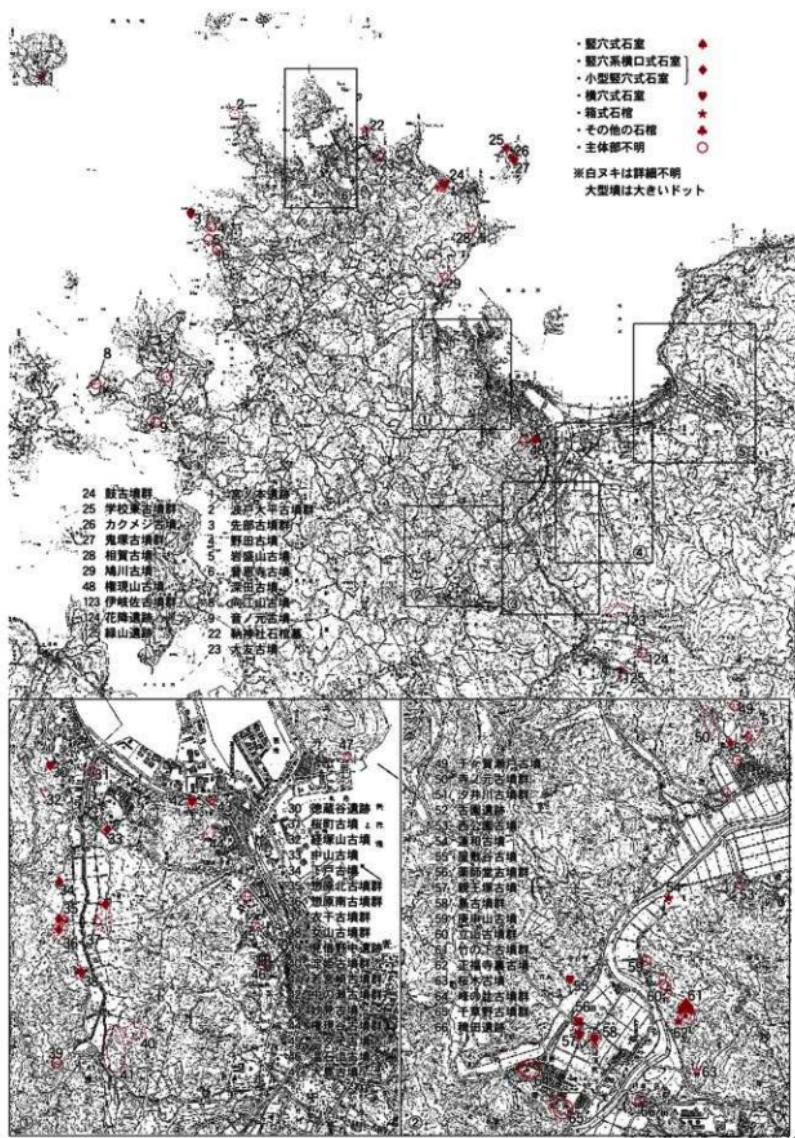
1700



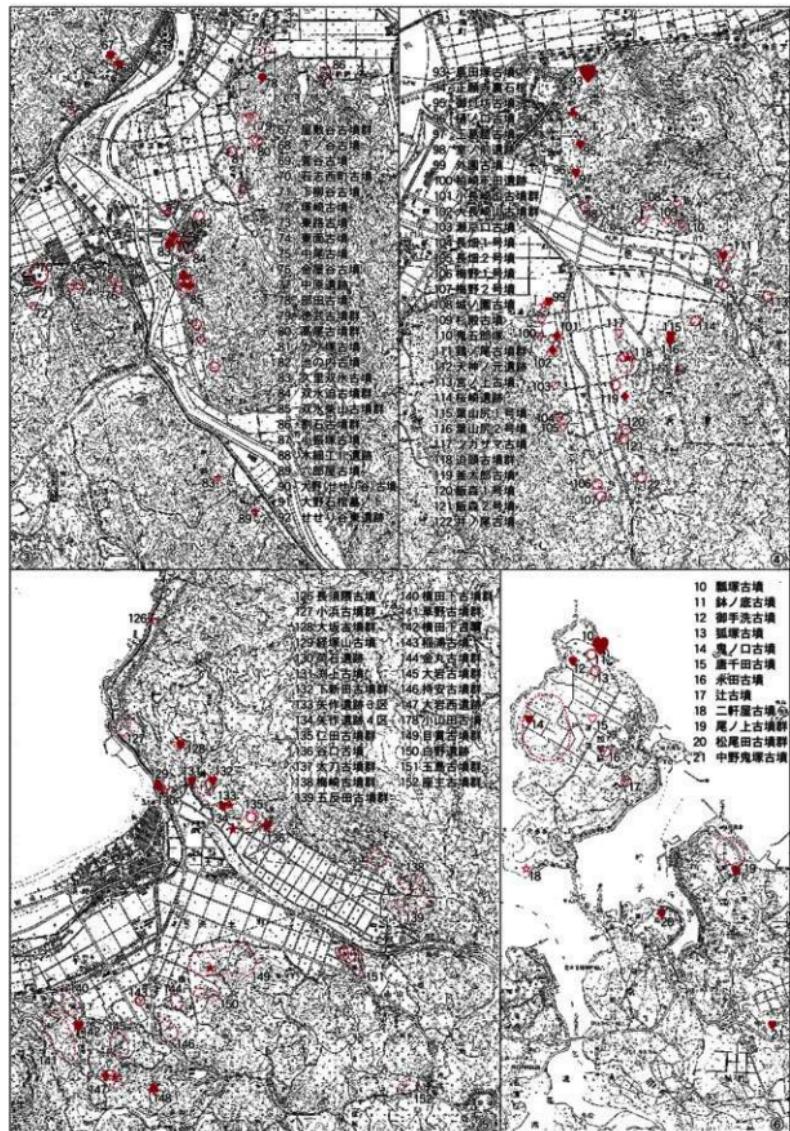
1.宗玄寺跡107号、2.六代目梶尾明全妻女墓、3.九州陶磁文化館所蔵品、4.長尾元留墓、5.大7号、6.女16号、7.大10号、8.長尾元留妻女墓、9.神野二本松造跡繩石經通模、10.大8号、11.廣41-7号、12.原41-9号、13.大6号、14.大9号、15.大2号、16.大1号、17.廣41-3号、18.廣1-31号、19.小松原墓地12号、20.六代目梶尾明全墓21.女10号、22.高松家墓地7号、23.女7号

※大・大光寺遺跡、女・女拝近世墓地、原・原田第1-2-40-41号墓地。
図面は各報告書より転載。また2~4&20は「九州陶磁の歴史」から、
9は「佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書―2000年度―」、19は「熊
本大学構内遺跡発掘調査報告Ⅳ」より転載した。

図XI-1 記年銘棺甕一覧 (1/40)



図IX-2 唐津市内古墳時代墳墓分布図1



図IX-3 唐津市内古墳時代古墳分布図2

報告書抄録

ふりがな	にたこふんぐん1く・2く・3く・やはぎいせき4く・しもしんでんこふんぐん おおさかこふんぐん						
書名	仁田古墳群1区・2区・3区・矢作遺跡4区・下新田古墳群・大坂古墳群						
副書名	西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書						
卷次	8						
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第183集						
編著者名	美浦雄二・戸塚洋輔・藤原理恵						
編集機関	佐賀県教育委員会						
所在地	〒840-8570 佐賀市城内1丁目1番59号 TEL(0952)25-7232						
発行年月日	西暦2010年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村 遺跡番号	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
にたこふんぐん 仁田古墳群1区	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 谷口	412023	3024 20683	33°27'10" 56903	130°03'07" 平成17年12月5日 平成18年3月8日	550m ²	西九州 自動車道 建設事業
にたこふんぐん 仁田古墳群2区	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 谷口	412023	3024 20683	33°27'10" 47149	130°03'04" 平成18年4月12日 平成18年7月10日	480m ²	
にたこふんぐん 仁田古墳群3区	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 測上	412023	3024 06050	33°27'15" 65115	130°03'03" 平成19年4月23日 平成19年6月1日	650m ²	40m ²
にたこふんぐん 矢作遺跡4区	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 測上	412023	1011 2015 3023	33°27'14" 39655 65115	130°03'03" 平成19年5月17日 平成19年6月19日	40m ²	
しもしんでんこふんぐん 下新田古墳群	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 測上	412023	3020 05930	33°27'24" 86486	130°02'53" 平成19年3月20日 平成19年5月21日	60m ²	1000m ²
ほか さかこふんぐん 大坂古墳群	からつし 唐津市 はまたちよう 浜玉町 測上	412023	3018 97887	33°27'35" 11696	130°02'42" 平成20年1月28日 平成20年5月27日	1000m ²	

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仁田古墳群1区	墳墓	江戸	土壙墓 龍柏木棺	棺甕 陶磁器	谷口地区の代々の墓地
仁田古墳群2区	集落	中世	土壙墓	土師器 黒色土器	糸切りの土師皿と黒色土器碗が共伴
仁田古墳群3区	集落	古墳 古代	土壙	土師器 須恵器	
矢作遺跡4区	墳墓	古墳	古墳	鉄製品	未盗掘墳
下新田古墳群	墳墓	古墳 繩文	古墳	繩文土器 土師器	繩文早期の土器が出土
大坂古墳群	墳墓	古墳	古墳	須恵器 鉄製品	玄門平積みの石室を確認

佐賀県文化財調査報告書第183集

仁田古墳群 I

仁田古墳群 1・2・3区・矢作遺跡4区・

下新田古墳群・大坂古墳群

— 西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(8) —

平成22(2010)年3月26日

発行 佐賀県教育委員会

〒840-8570 佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号

印刷 株式会社佐賀印刷社

〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西6丁目11番7号

